

# 乱れ学 -中-

## 第 2 部 応用分野



4 2 0 はじめに

4 2 1 社 会

4 2 2 政 治

4 2 3 経 済

4 2 4 人 間  
(前 編)



# 乱れ学 目次

## (-上巻-)

第 1 部	基 礎 的 考 察	
4 1 0	はじめに	1
4 1 1	乱れ学の誕生	2
4 1 2	乱れ学の対象	4
4 1 3	乱れ学の手法	5
4 1 4	秩序場と乱雑場	6
4 1 5	秩序と乱雑の遷移	3 6
4 1 6	因果律	4 7
4 1 7	偶然と必然と乱然	5 4
4 1 8	主観と客観と乱観	6 0
4 1 9	乱れとは何か	6 3
第 1 部	基礎的考察 卷末資料 A ~ E	

## (-中巻-)

第 2 部	応 用 分 野	
4 2 0	はじめに	6 9
4 2 1	社 会	7 6
4 2 2	政 治	9 6
4 2 3	経 済	1 1 3
4 2 4	人 間 (前 編)	1 1 9

## (-下巻-)

4 2 4	人 間 (後 編)	1 4 7
4 2 5	技 術	1 5 3
4 2 6	文 化	1 8 9
4 2 7	ま と め	2 1 0
第 2 部	応用分野 卷末資料 F ~ G	
編集を終えて		

## 420. はじめに

### 420-1. はじめに<sup>①</sup>

ここまで、乱流の基礎研究の成果を紹介し、乱れの基礎的な考え方について議論をしてきました。ここでは乱れという概念が社会の色々な、具体的な課題に、どのように応用出来るかということを書いてみたいと思います。

まず乱れという概念を使って、現在の色々な事象をどのように解釈出来るかについて考えます。その後で、この概念を使って将来の発展をどのように計画すればよいか、を提案してみたいと思います。

“乱れ”は“秩序”に対立した概念で、強いて分類すれば、秩序が優等生的で、保守的であるのに対して、乱れの方は、悪童のような、破壊的な印象を与えます。折り目の正しい人は秩序をしっかりと守り、はみ出した人間が乱れを好むという印象を与えます。しかし保守的な秩序に対して、乱れは新しいものを創造する、きっかけと考えることも出来ます。即ち、乱れは創造的な契機を持っているのです。

“時代は動く”とよく言われますが、人々のものの考え方は、非常にゆっくりとしか、動きません。それよりもずっと速く動くのは、技術です。人々の考え方は、この技術に引きずられて変わっていくのです。例えば過去60年の間に我々の生活は大きく変わりました。自動車が普及し、テレビや、パソコンが出来、携帯電話が現れて、それらを使う人々の生活はすっかり変わり、ものの考え方も変わっていきました。人類の将来は、技術の進歩にかかっているのです。

次章以下で、社会の色々な分野での、乱れ概念の使われ方の応用を説明します

社会の現状の改革は、近未来計画として提示します。遠未来計画として、技術の進歩を取り入れた、思い切った大規模な改善案を提案します。どちらも乱雑度を増やすことを目指しています。その中のあるものは、未だかつて考えられたことのないものです、

(2013. 5/6 最終更新)

## 0. 乱れ学のあけぼの

乱流が、我々の身の回りで色々な形で現れることを見てきました。そして“乱れている”という共通語に広い広がりがあることも分かりました。そこで当然の拡張として、現実には目で見えるような流れはなくても、乱れているという点では共通な、社会の色々な事柄に眼を向けることにします。自然科学の社会への応用、と言ってもいいでしょう。野心的に言えば、あらゆる乱れに共通なモデル、あるいは考え方の追求です。そのためには、乱れという概念をごく一般的な形で整理する必要があります。

ここに提案する乱れ学が、どのような将来を持っているのかはよく分かりません。まるで何を言っているのか分からない読者のために、はっきりした例を与えましょう。

### 1. 自然科学の勝利

自然科学と言えば、ギリシャ文明の発展である、物理や化学、時には生物なども含んで、学校で教えられた自然科学、ギリシャの伝統の上に出来上がった自然科学を思い出すことが当たり前だと思っています。時に化学式を覚えさせられ、手の指を使って電場や磁場の方向を覚えたことも、懐かしく思い出されます。自然というものを理解するためには、色々覚えなければならぬこともありました。私は物理や化学が好きでしたが、色々記憶しなければならぬことに悩まされました。我々の周りで起きていることを理解するには、このギリシャ以来、発展してきた物理や、化学、はては動物学、植物学まで勉強することが唯一の道と信じられていました。しかし、この古典的な自然科学には、はっきりとした適用限界があります。このヨーロッパ伝来の自然科学には、厳然たる胸壁が作られています。即ち、自然科学は決して人間の作り出した、ややこしい問題には触れないということです。即ち、政治や経済には決して手を触れないことです。

編者注<sup>①</sup> 同一標題の3原稿を統合して掲載する。

勝利の一つの理由は、この西欧風の自然科学は自分の分を心得ていて、分に相応しない分野には手を出さないことです。

## 2. 自然科学の広がり

この慎み深い自然科学に転機が訪れました。研究対象の広がりです。まず最初は、環境の問題です。色々な理由で環境が悪化してきたとき、何とかしなければということになりました。毎年、莫大な国家予算を費やしている自然科学者に何とかして貰えないかというのが、国民の切なる願いです。悪くなった環境を、もっと住みよいものにならないか、という問題です。もう一つは天然災害です。日本は、もともとが地震国で、沢山の人が被害を受けます。特に最近の大地震と津波、それに原子力発電所の災害があって、人々は何とかして貰いたい気分で、自然科学者に期待が集まりました。天気予報のように、地震を予報することは出来ないのか、どんな津波が来るのか、もっとしっかりした予報は出来ないのか、地震で被害を受けた原子力発電所などを復旧するのに良い方法はないのか、自然科学者は活動してくれないのか、というわけです。こうなってくると、自然の研究者に対する期待が強くなります。学問としての自然科学は、元々人類に対する自然の災害を軽くしようという欲求から生まれたわけですから。自然をただ喜んで干渉するだけの態度は許されません。しかし、今の自然科学は壮大な設備を作って、目にも見えない微粒子を加速したり、衝突させたりして、実際に自然の中で起きるものからは遠く外れてしまいました。民衆から離反した学問と言うべきでしょう。これで良いのでしょうか。自然を相手にした自然科学に立ち戻るべきではありませんか。地震国日本の科学者達は、もっと身近な自然現象に研究の努力を注ぐべきではありませんか。日本では、津波のせいで一万人もの死人が出ているのです。そちらの方向に目を向けることが、ノーベル賞の趣旨にも合うことではありませんか。

## 3. 自然科学の限界

従来の自然科学は、人間臭い問題に背を向けることによって、それなりの成果を収めました。しかしそのやり方には限界があります、科学は栄えて、人間は苦しむ、ということになってしまいました。従来の科学はずるい、とも表現出来るでしょう。人間のいろいろな問題に完全に背を向けている科学が、人を幸福に出来る訳がありません。その限りでは、科学はただの遊びにしか過ぎません。人間を幸せにする学問は、どこにあるのでしょうか。しかしそのやりかたには限界があります。

人間臭い学問が従来の自然科学に嫌われた最大の理由は、それが定量化出来ないことです。学者先生はみんな潔癖で、数量的にはっきりしないものを取り扱うことを嫌います。例えば、一郎君が花子女史に惚れたことが明らかになっても、どの程度惚れているのかを定量的に表現することは出来ません。本当に深く惚れているのと、ほんの少しか興味を持っているのをどうやれば区別出来るのでしょうか。学者が良心的であればあるほど、このいい加減な問題に深入りすることを嫌うのです。一方で何億円という実験設備を持っている学者先生が、この一郎君の悩みをどうしてあげることも出来ないのです。この矛盾を放っておくことは出来ません。

## 4. 新しい学問

従来の自然科学では、あまり使わない、新しい概念を使った学問が期待されます。それには、いろいろとありますが、自然だけに限られた科学から脱出することが第一です。

人がその一生に遭遇する、あらゆる事象を扱います。いわゆる、理科系も文化系もです。その裏返しとして、正確性が少し失われることを覚悟しなければなりません。どんな支配方程式を探してみても、新しい学問は生まれません。

## 5. 必然、偶然、乱然

我々の周囲に起きる色々な現象は、必然と偶然とに分類されます。古い学問は必然現象を対象にし、それが本当に必然に属する事を立証するのに熱中します。たとえば、日蝕がその良い例です。昔は何故、日蝕が起きるのか分からず、その現象は偶然に分類されていました。しかし、それを必然として説明したいと考えて、とんでもない説が提案されました。傑作なのは、とてつもなく大きな獣が太陽を食べるのだということがありました。しかし、ニュートン力学が発展して、そんなばかげたものではないことが示され、日蝕は偶然から必然に

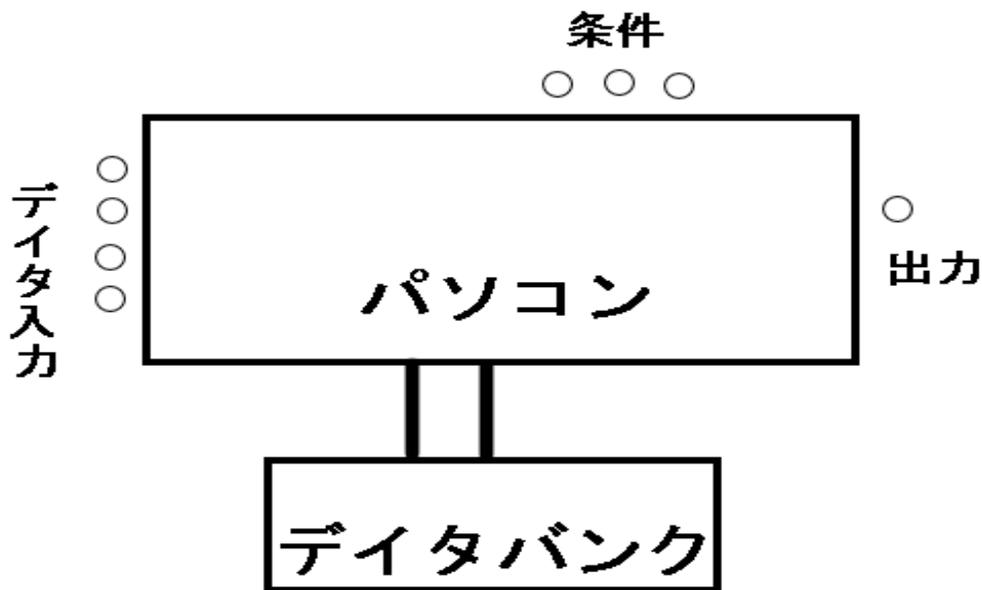
変身しました。そして、日蝕は秒以下の精度で予測出来る、全く自然なものに変わりました。

しかし、一方で、偶然ではないが、必然でも無いというものが注目されるようになりました。たとえば、明日の天気です。

明日は曇りという予報がでて、かんかん照りになったり、その逆になることは珍しくはありません。このような場合にも、天気予報は偶然ではありませんし、かといって明日の天気が必然に支配されているわけでもありません。このような場合を乱然と呼ぶことにします。ここで相手にするのはこの乱然です。きっちりと決まった、必然に対して、偶然でもない、必然でもない事象を乱然と呼ぶのです。即ち、まるっきり予想が出来なくもないが、予想が時に外れるというものです。

## 6. 乱れ学の手法

必然を取り扱うには従来の普通の方法は、まず基礎になる方程式を作って、それから境界条件と初期条件を満たすような解を求めることが出来れば、それでその問題は解けた、という形になるのですが、乱れ学はそのような手法はとりません。というより、そのような行儀の良い方法では片付かない対象と取り組むのです。基礎方程式万能の時代は終わったのです。一例として、明日雨が降るかどうかという乱然問題について考えましょう。



第 1 図

問題の解決はどのようにして行われるのでしょうか。原理的には、過去のいろいろな気象データを調べて、現在の状態とよく似たものを取り出し、それが、一日の間に、どのように変化したかを調べるものです。第1図を見てください。問題に答えを与えるのは、中央にあるパソコンです。難しい数学は使いません。このパソコンは過去の気象データの膨大なデータバンクを持っています。データの処理は、まず現在の気象条件とよく似た過去の場合を探し出すことから始まります。換言すれば、気象に関連した、気温とか、風速とかの色々な要素から成り立つ気象パターンで、現在のパターンと似ているものを探し出すことから始まります。即ち豊富な気象データを持つコンピューターから、現在の気象と一番よく似たものを探し、明日の予想をするのです。これは現在の気象パターンと過去のパターンとの比較で、犯人を探すために行われる指紋の照合そっくりです。指紋照合技術は非常に進歩していますから、それを全面的に利用します。

具体的には、左側の入力端子には現在得られているデータを入れて、上の段にはそのデータをとった条件を入れます。そして何が欲しいかを入力すれば、答えが右側の出力端に現れるというしかけです。コンピューターの中の条件は、欲しい結果が右の面から出るように調節されます。データとしてすでに分かっているようなものを使います。たとえば来週の天気を知りたいならば、一年前のデータがありますので、それを代入すれば容易

でしょう。この方式の強味は、コンピューターの中で、昔のデータを自由自在に使える点にあります。

去年、一昨年の、同じ月日の雨を主とする気象データがパソコンに入っています。コンピューターの中の、色々な点の調節によって、去年の同じ月の降雨量が一致するまで調節します。今度は今年の日データを入れて、出力を得て、それを今年の予想とします。去年、一昨年というのが特別な一たとえば台風がやってきたというような、特別な日であったら、もっと前の年の、標準的な日のデータを使います。未来の天気分かたら、今度は予報を出すことになります。テレビやラヂオを使うことになりますが、予報を出した責任者が誰であるかということが問題になります。現在の予報は誰が作っているのか、責任者も分らず、的中率も分らないという無責任さです。当たるも八卦、当たらぬも八卦、では困ります。責任者の氏名をはっきりし、時々、的中率も放送しなくてはなりません。

予報を出すときに、自信を持っているときと、少し怪しいな、と思うことがあります。昔はふぐを食べたときに、“天気予報”と3度唱えれば、ふぐの毒に当たらない、という笑えない話があり、今でも天気予報をあまり信じていない人もいます。正直に、どれだけの的中したかを発表すれば、このような、ふざけた小話は無くなるでしょう。事実、予報があまり自信がないような場合もありますから、予報にくっつけて、過去の的中率を発表することが良いでしょう。それによって、予報の信頼度が向上します。

天気予報以外の事象にも、同じような方法を適用します。要するに、経験に基づいた予想です。この方法は過去において同じような経験がある、総ての事象に応用出来ます。一方で、経験の蓄積したものにはしか応用出来ない、という弱点がありますが、かなりの広い応用を持っているはずで、自然科学以外に、政治、経済、医療、人間関係、芸術といった、基礎方程式を作れない事象に、広い応用を持っています。

(2013. 9/25 最終更新)

## 7. 地震予報

地震の多い日本での最も重要なものは、地震の予報でしょう。地震がいつ、どのような規模で起きるかということが前もって知れば、どれだけの人命と財産が救われるか分かりません。しかし今のところ、日本にあるのは殆ど予報と呼べないほどのものです。直前に地震の警報が出ますが、殆ど役に立ちません。非常な進歩をしたと称する日本の地震学でも、殆ど実用になる予報は出せない始末です。その一つの理由は、先進国の中で地震の被害を受けるのは日本ぐらいしかなくて、先進国でも地震に本腰を入れて研究する必要がある国、研究者がないことです。地震の研究は、日本人だけが独りでやらなければならないのです。その地震研究に、乱れ学の手法が使えないかを考えましょう。

地震には基礎方程式はありません。過去の経験から予知をするしかありません。

まず地震にどのような前兆があるかを調べましょう。地震は、自然現象としてはそれほど複雑なものではありません。地震が起きるのは、地殻のある種の整理現象に過ぎません。そのきっかけさえ掴めれば、地震は予報出来ます。それでは、地震にどんな前兆があるのでしょうか。

地震予知のための手段としては、広い範囲を含みます。地震計のようなありふれたものから、植物、動物の広い範囲で役に立つものを見つける努力が必要です。これは国家的な仕事ですから、予算を惜しんではなりません。実現の可能性の高いものを二三、示してみましよう。

その一つは、震源における剪断の測定です。地震の大部分が大地塊の縁で始まるものとすれば、その滑りを測定すると、ひょっとしたら地震の始まりを察知出来るでしょう。例えば太平洋の海底の地面の滑りを常に観察するのです。いろいろな場所で地盤のずれを観測します。地面の傾斜を検出する傾斜計を震源になりそうなところに配置するのです。原理的には小さい剪断も検出出来るでしょうから、弱い地震を捜し出すことが出来るかも知れません。

第二の提案は、地中電流の変化の検出です。震源になりそうな場所に電極を埋めて、そこに流れる電流を常に監視するのです。電極に加える電圧によって電流は複雑に変化します。パソコンでその電圧と電流についての詳しい解析をして、リアルタイムに表示をするのです。それが異常な形を示せば、地震の可能性が発生することになります。電極は沢山海の中に沈めます。電流のどのような波形が、どのような地震に相当するかということは、地震が起きたときに取っておくのです。幸いに、日本ではデータ量に不足はありません。このような海底の電流測定は、地震以外にも何らかの有益な知識を我々に与えるでしょう。

(2012. 7/13 最終更新)

## 420-2. 乱れ学のはじまり

### 1. 乱れ学とは何か

乱れが、我々の身の回りで色々な形で現れることを見て来ました。そして“乱れている”という共通語には、大きな広がりのあることも分かりました。そこで乱れ概念の当然の拡張として、目で見える流れは無くても、乱れているという点では共通な、社会の色々な事柄に眼を向けるようになりました。流体力学の社会への応用と言ってもいいでしょう。野心的に言えば、あらゆる乱れに共通な何かを追求することです。もっと別の言い方では、乱れを基礎に置いた世界観の構築と言ってもいいでしょう。そのためには、乱れという概念をごく一般的な形で整理する必要があります。

### 2. 乱れという言葉

日本人は昔から乱れという言葉を受用してきました。万葉集をはじめ、我々に馴染み深い百人一首にも乱れという言葉が詠み込んだ和歌が数多く採用されています。その中の大部分は心の乱れに関係していますが、その他にも乱という漢字を含んだ熟語が数多くあります。

乱れという言葉には、理性よりも感性、正統より異端、繁盛より衰微という、いわば“あわれ”を何となく含んでいます。その他にも似たような言葉として、あやふや、あいまい、などは乱れの親類筋です。また、カオス（混沌）という表現も現れましたが、これはいささか激し過ぎて、日本人の琴線に触れるとは思えません。もともとは宗教に関係した言葉です。

### 3. 連続体近似

ギリシャで始まり、ヨーロッパで花開いた物理学は、物質の構成要素として、小さな粒子（アトム）を追求しました。それが明らかになれば、それらの組み合わせとして、すべての物質の構造や自然現象を理解することが出来るという信念を持っています。それは部分的には大きな成果を収めました。世の中のすべての事象にその考えを適用することは、出来ないことが分かりました。この信念の対極にあるのが連続体近似です。小さな粒を追いかける代わりに、世の中のすべてを連続した流体のようなものとして近似し、その動きを大局的に把握しようという考え方です。流体力学は、この連続体近似によって構成されました。そして輝かしい成功例を沢山持っています。

### 4. 場

乱れを考える上で最初に必要なのは“場”です。場というのは連続体の一つのまとまりです。同じような意味で“系”という言葉が使われることもあります。連続体の集まりは何となく平らな感じが多いので、場と言う方が適切でしょう。場はいわば舞台です。その舞台に色々なものが登場するのです。

この場には必ず境界があります。この境界を通して物質や、熱や、エネルギーが行き来するのを開放場、境界で行き来の無い場を閉鎖場と呼びます。実際にはこの二つを両極端として、ほとんどの場は大なり小なり出入りのある部分開放となっています。この境界条件が、場の持っている性質を決めることも多いのです。例えば、江戸時代の日本という場は鎖国政策で、ほとんど完全な閉鎖境界でした。この閉鎖境界の中で、幾つかの日本固有の文化の花が咲きました。最近では、世界のほとんどで国境が開放境界となっています。そして、グローバル化の名の下にアメリカの影響が流れ込んでいます。

### 5. 媒質

場を満たす物質が媒質です。媒質が活動の主演です。流体力学では、水や空気が媒質ですが、これを拡張することが出来ます。原野という場を満たすものは、草花や蝶々であり、国という場は国民という媒質が埋めています。この埋め方は、連続体として扱えるほど密でなければなりません。大きな空っぽの場の中に小石が一つ、という構造は連続体近似では扱えません。

媒質は必ずしも一種類では無く、多種類の複合体が普通です。そして各々の媒質は、それぞれに媒質特有の

属性を持ちます。速度、温度、密度などの物理的な属性から、そのような色々な属性を持つ媒質が絡み合って、乱れた場を形成するのです。

## 6. 場に働く力

場には色々な力が働きます。その力によって媒質の姿、即ち場の状態が変わります。力としては、場の内部から働く内力と、外から加わる外力とがあります。力の種類としては物理的な狭い意味の力から、もっと一般的な、経済力、武力、政治力、説得力、行動力などというものもあります。力とそれに対する反応は、色々な媒質に対して確認する必要があります。例えば、流体の場合は粘性力という内力が働いて、運動エネルギーを熱に変換します。これがいわゆるエネルギー散逸で、速度変動の減衰という形で現れます。力は必ずしも減衰作用として働くとは限りません。

内力と外力の関係では、政治の問題で、国内の力関係では必要な改革が出来なくても、外圧によってわけなく出来たという例があります。武力で外国に侵攻して、その国の政治を変えてしまうという手荒い力もあります。このような外力は、一般化出来ません。

## 7. 測定

媒質の持つ属性を測定することを考えてみましょう。媒質を適当な空間的、時間的なスケールに分割して、それらを点の集まりと見なします。これは物理学の質点とは違い、有限の広がりを持ち、その広がりの中では測定値は一定と仮定されています。分割をどのようにするかは、対象と目的によって選択されます。人間の集まりを考えると、一人一人が点です。

属性の中で、速度や温度などの物理量は適当なセンサーを使って、かなりの精度で測定出来ます。経済力は持っているお金の額でも分かります。例えば政治力となると、測定が非常に難しくなります。しかし我々はそれらをあえて議論の中に含めます。

これらの属性の測定値は、空間的にも時間的にも変化します。即ち、空間座標と時間の関数です。それは乱れているなら当然です。

## 8. 統計的記述

乱れている場をどのようにして記述出来るかを考えてみましょう。その一つの方法は統計的な記述です。最も簡単な統計量は、場全体の平均です。例えば日本の成人の身長をスウェーデン人の平均と比べることが出来ます。その次に簡単なのは、平均からのずれです。各点のずれの二乗の平均を平方根に開いたものがいわゆる **root mean square (r m s)** です。この考え方を経済力という属性に応用してみましょう。一人一人の持つ財産の **r m s** を平均値で割った量は、貧富の差の客観的な表現です。例えば全員の財産が同じなら、**r m s** はゼロで、貧富の差はありません。もっと複雑な統計量を求めることも出来ます。空間相関、確率分布関数、エネルギースペクトルなどです。空間的に作られた統計量の時間変化や、時間的に作られた統計量の空間変化を考えることが出来ます。

## 9. 個別記述

場の記述は統計だけに止まりません。個別的な記述もそれに劣らず重要です。例えば歴史の中に出てくる英雄、豪傑の行動です。これらの人は例外なく、社会に乱れを作っています。あるいは強力な少数者のグループです。彼らは平均からは突出していて、場をリードします。彼らの活躍は、歴史の記述に欠くことが出来ません。乱雑な場からどのようにして個別記述を取り出す事が出来るかについての詳しい議論は、あとに譲ります。

## 10. 乱れとは何か

最終質問です。乱れという言葉は何気なく使っている人も、この質問に正面から答えられる人はまれです。と言うのは、乱れは考える方向によって何とでも表現出来るからです。これは大事な問題ですから、後の方で

詳しい考察を加えることにします。

## 11. 乱れ学の手法

乱れ学には、一般的などんな場合でも通用する手法はありません。それが、一般学と呼ばれるものとは違っています。いわゆる基礎方程式は存在しないのです。これさえあれば何でも解けるという特効薬はないのです。逆に言えば、そんな特効薬が効くような問題は、乱れ学の中にはありません。

この点で従来の自然科学とは大きな違いがあります。乱れ学は、乱れを適当に扱って基礎方程式を作ろうという努力は、はじめから放棄しています。乱れの部分とそうでない部分を適切に結びつける方法が、見つからないためです。しかし、その関連が見つかる場合もあります。

ある場合には、色々な場合の連続、または種々な量の保存則が成り立たないことをはじめから覚悟しているのです。実際にどのようにすればよいかということは、後で詳しく述べるでしょう。要するに、基礎方程式さえあれば後はそれを適当に解くだけ、という今までの方法には、真つ正面から反対しているのです。

(2012. 7/22 最終更新)

## 未 来 展 望

### 0. 古典的枠組みの崩壊

理論と実験    定量    客観性    因果律

### 1. NS方程式を超える

n次元NS    複雑非線型方程式

### 2. 方程式を超える

方程式を通じて世の中を見る制約からの解放

新しい論理構成の必要性

隠し絵の定理

場が十分に乱雑であれば、見たい形象を見ることが出来る

醜いアヒルの仔の定理    渡辺 慧

白鳥とアヒルには差がない

### 3. 自然科学を超える

情報処理

整理    確認    防御

社会への接近

宗教    心理    教育    経済    政治

(2004. 6/20)

## 421. 社 会

### 421-1. 日本社会のゆくえ

#### 0. はしがき

現在は2006年の始めです。この時点で、日本の社会が30年、50年の後にどんなことになるかを占ってみることにしました。私自身はそんなに長く生きるわけではないので、いささか無責任になるかとも思いますが、しばらくお付き合い願います。

#### 1. 科学

まず学問の分野で、将来に、どのような進歩があるでしょうか。かつて自然科学の中の王座を誇った物理学には、画期的な発展は期待出来ません。分かるものは分かり、分からないものは分からないという、袋小路に入っているような形です。次々に素粒子が発見されても、それがどんな意味を持つのかは分からず、戸惑うばかりです。宇宙がどのようにして出来上がったかについても、小説を読むくらいの感激しかありません。我々が自然を理解することは、これくらいでよいのかも知れません。

化学は分子、原子を一つずつ追いかける、超微細構造の研究での進歩の余地があります。実験技術はそこまで発展します。化合とか分解とか重合などの化学反応の機構について、詳細な知見が得られるでしょう。そしてそれらの成果が、我々の生活にいろんな形で影響します。

これらに対して、生命関連の学問は飛躍的に進歩するでしょう。生物一般についての我々の理解は、広がり深さを増します。肉体だけでなく、精神の分野にも研究が進み、人間の精神構造について、基本的な理解が得られるでしょう。植物と動物について得られた知識は、新しい食料の開発と大量生産に繋がり、世界の食糧問題を解決するかも知れません。人間に対しては医学という形で、肉体にも精神にも大きな影響を持つ進歩が期待されます。その上、遺伝情報の操作によって、色々な人工臓器が自由に作られるようになって、日本人の寿命は更に延びるでしょう。

#### 2. 技術

次に技術の進歩を考えます。いわゆるITで、パソコンと通信を中心として、個人にまで影響する技術は、ほぼ成熟のレベルに達しました。どんな情報も一瞬のうちに誰にでも伝わるようになります。これで一段落です。正直言うと、これ以上の情報には勘弁して貰いたいというレベルまで到達しました。携帯電話が便利になったり、テレビ電話が安くなったりのような変化はあり、テレビと通信の融合も進むでしょうが、革命的と言えるような進歩はありません。

ロボットの技術は発展するでしょう。高い知能を持ったロボットが色々な場面で活躍します。家事や介護専門のロボットの開発によって、家庭でも便利に使えるようになります。秘書の仕事や、自動車の運転のような複雑な仕事をしてくれるロボットも開発が進み、普及するに違いありません。また、ロボットを使った芸術も生まれるでしょう。動く彫刻です。大規模な技術としては、宇宙開発には面白いものはありません。宇宙ステーションが完成しても、やる仕事がありません。個人で大金をはたいて宇宙へ出かけても、大したニュースにはなりません。航空の方では超音速旅客機が現れるでしょうが、旅行時間が少し短くなるだけのものです。

エネルギーについては、核融合発電が成功するかどうかは鍵です。今から成功、不成功を占うことは出来ません。もし今から50年の間に核融合の実用化に成功しなければ、世界のエネルギーバランスは大きく変わります。世界中に油田の枯渇が広がり、原油価格は空高く上昇するでしょう。太陽や風を利用する技術は、エネルギー供給の主力にはならないでしょう。

環境については、あまり心配はありません。大袈裟に騒がれている温暖化が、本当に起きるかどうかには疑問がありますし、たとえ起きたとしても、世界中を震え上がらすほどの大問題にはなりません。植物も動物も人間も、長期間での数度の温度変化には容易に適応出来るからです。

#### 3. 日本社会

日本社会のゆくえを占うのに最大の因子は、出生の減少です。少子化という、いやな言葉がありますが、少

子というのは、どの漢和辞書にも出ているように、若い男のことで、少女に対する言葉です。我々日本人も中国から文字を頂いているからには、出来るだけの正確さを保つのが礼儀というものでしょう。とにかく子供が出来なくなったことが将来に巨大な影響を持ちます。おまけに医学の進歩で、老人の数は増える一方です。なぜ女性が子供を産まなくなったのかについては、社会が悪い、政府の適切な施策が無い、などいろいろな議論がありますが、私には女性が自分で自分の首を絞めているように思えます。というのは、古来、子供というのは、親が年をとって不自由になった時に、その世話をして貰うためのものだからです。それが、大変な思いをして育ててくれた親に対する恩返し、いわゆる親孝行です。子供を産まない女はその恩返しを受けられません。そんな恩返しは要らない、年金があるから、と言う人はその年金の元を稼いでいるのが自分の子供達の世代だということを忘れています。よその子供が稼いだものを労せずして頂くというのは、まるで無銭飲食ではありませんか。恥ずべきことです。政府がどんなに年金制度をいじくっても、それは必ず破綻します。稼ぐ人の数がどんどん減り、老人の数はどんどん増えるからです。将来は政府の年金制度は破産して、子供が親の面倒を見るという、昔のやり方に戻らざるをえないでしょう。その時、子供のない人の悲惨さは大変なものです。今の社会制度では子供を育てることなど出来ないと、うそぶく女性は、ひどいしっぺ返しを受けるのです。

この若年労働人口の減少で雇用情勢は改善されて、就職は楽になります。しかし若者は、きつい勤務を嫌って職場を変えます。日本人の美德であった、勤勉という言葉はすっかり忘れ去られます。経営者は外国人労働力の確保に努力するでしょう。東南アジアにはまだ安価な、ハングリーな労働力があふれています。労働者の入国が奨励されるでしょう。そして沢山の外国人労働者の流入は日本人の一体感を損ない、日本の文化を破壊するでしょう。治安が悪くなって、犯罪が増え、隣人を信用することが出来なくなります。日本人はこのような外国人の大量流入に対する経験と、適切な対抗手段を持っていません。

#### 4. 拝金主義

次に起きるのは、お金がすべてという考え方の蔓延と、貧富の差の増大です。これは現在でもかなり高いレベルに達しています。お金があれば何でも出来る、お金がなければ何にも出来ない、という簡単な哲学です。道徳とか、思いやりとか、奉仕などという考え方はどこかに追いやられて、偉いというのが金持ちと同義語になります。金儲けのためなら、法律の不備をほじくり出して、何をやってもいい、という風潮はますます高まるでしょう。それを後押しするのが、いわゆる自由競争です。競争は自由で、強くて優れた人は金持ちになれる、という信仰です。これは一見もっともなようですが、自分の金儲けだけに没頭している人が社会に貢献しているとは思えません。もっと深刻なのは、日本の宝である優秀な頭脳が、新しい優れたもの作りから離れて、何も生産しないマネーゲームに没頭してしまうことです。これはすでにアメリカで始まっています。何年も前から、私はアメリカの大学を訪問するたびに、大学院での研究の主力が中国や韓国や、ラテン系の若者に占められているのに気付きました。その理由を聞くと、教授連中は、アメリカ出身の優秀な学生が大学院に来なくなった、と言います。それでは彼らはどこへ行ったんだと訊くと、“**money engineering**”と言って肩をすくめます。日本もそうですが、私達の専門の航空宇宙学科はアメリカでも第一級の学生を集めています。それがこの有様です。アメリカのNASAが間違いを犯したり、何となく振るわないのは、金儲けに敏感な学生に見放された為のようです。私は、日本でもその傾向が強くなることは間違いないと思います。

金儲け競争には必ず勝者と敗者があります。勝った方は夢の実現だと、ちやほやされますが、負けた方は切り捨てられます。ぼんやりしているから負けるのだ、ぐずぐず言うな、というわけです。勤め先でも成果主義という考えが有力になって、収入に差が付けられます。サラリーマンも安閑としていられません。社会での貧富の差は増大する一方です。投資やら株やらで儲ける人は、信じられないほどの金持ちになります。最近の新聞報道によると、全国の子供を持つ家庭で、義務教育のための学用品や給食費が払えなくて、県や市の補助を受けている家庭は10%にも達し、中でも東京や大阪では25%にもなっているということです。始めはイラクかアフガニスタンの話かと思いましたが、これには驚きました。その点でも現在のアメリカの後を追っかけるのです。こんなことになったのは誰が考えても政府の責任です。政府はデフレを脱却した、物価は上がっている、と言って鬼の首でも取ったように喜んでいますが、私を含む、大多数の老人はこれに賛成は出来ません。

利子の付かない、なけなしの貯金で生きている人の生活は苦しくなるばかりです。日本人の大多数が中産階級という、ロマンチックな時代は過去のものになりました。この傾向は、もっとも進むでしょう。それにもなって利己主義が広まるでしょう。自分以外は金儲けの敵だからです。人々の間から“寛容”という言葉が消えて、生活はぎすぎすしたものになり、日本人の優しさはどこかへ行ってしまいます。

## 5. 政治

話を日本の政治に持っていきましょう。日本では本来の民主主義が効果的に進行することはないでしょう。と言うのは、選挙が何回行われても、有権者は本当に自分たちの欲していることを表現出来ないからです。国民の大部分は、選挙にはさしたる興味はありません。自分たちが本当に政治の主人だという実感がありません。政治は他人任せです。これは憲法についても同じです。憲法も簡単に改変されるでしょう。選挙があっても、候補者なり、政党の党首がかっこいいというような、理性でなく、感性で投票します。候補者にしても、豊富な経験や、しっかりした識見を持った人は稀です。自民党か、それに近い政党の独裁が続くでしょう。政治は一握りの扇動者によって牛耳られ、本当の意味での主権在民になることはないでしょう。政治家は失敗の責任を官僚に転嫁します。各省には最高指揮官としての大臣という政治家が坐っています。その権限は無限です。いくさに負けたとき、“おれは悪くない、部下が良くないから負けた。”という司令官があるでしょうか。しかし、政府がよほどの無茶をしても、デモやストは起きないでしょう。日本人はそのような反抗のエネルギーを失っています。日本が経済的に極度に疲弊して、明日の食べ物も手に入らない、という場面にでも陥らない限り、国民の態度は変わりません。

## 6. 国際情勢

ここらで国の外の情勢を見渡しましょう。日本の軍備拡張は着々と進行し、いつでもどこでも戦争が出来るようになるでしょう。元々日本人は戦争は嫌いではありません。そのことは、歴史を見ればよく分かります。憲法は改変されます。そして国民の中で前回の戦争の惨禍を覚えている人はいなくなり、戦争がやりやすくなります。

日本は東アジアの盟主の座を中国と争うでしょう。中国の経済力が日本を追い越す日が間もなく来ます。人口が日本の10倍もあり、民族的にも優れている中国には敵いません。考えてみれば長い歴史の中で、中国はいつも日本の先生でした。日本人の中国人に対する優越感には、全く根拠がありません。日本と中国の間には、島の領有や、天然ガス採掘などの紛争の種があります。全面的な戦争とまではいかなくても、小競り合いはしばしば起きますでしょう。アメリカはどちらに味方するとも分からない、曖昧な態度で、日中の対立を快く眺めているでしょう。アメリカはどちらかが優越して、東アジアが一つにまとまると、発言権が無くなって困るからです。中国に対抗して、日本の総理大臣は靖国参拝を続けるでしょう。これはアメリカにとっては天の恵みです。日本人はいつになっても、日本を守ってくれているのはアメリカだという信仰を堅く持っていて、アメリカにぺこぺこして、アメリカ軍の駐留をいつまでも許すでしょう。救いのない植民地根性です。

アメリカは経済的な世界制覇の野望を捨て去ることはないでしょう。しかし、中国やインドなどのアジアの新興国の実力がそれを阻止します。アメリカの得意なお題目の、民主主義と自由も色あせたものになります。いわゆる民主化は、即ち親アメリカ化と思っていますが、それは全く違います。世界中で新しい民族主義が勃興します。アメリカがそれらのすべてを抑える実力はありません。民族主義は宗教と絡んで、世界情勢を不安定なものにします。いつまでも、世界から紛争が無くなることはないでしょう。

(2006. 11/2 執筆)

(2012. 3/17 最終更新)

# 421-2. 乱流社会試論

## 1. 人間と欲求

人間とは何か？とう問いに正面から答えることは難しいので、ここでは人間を“欲求する動物”という角度

から眺めます。

人間の欲求には限りがないようにも見えますが、ここでは5つのものを取り上げます。それは食料、安全、便益、愛情、自我、です。これらを同列に並べるのには、いささか無理がありますが、ここで欲求論をやるつもりはありませんから、これらを片っ端から考えていきます。

まず“食料”です。人間は食べなければ生きていけません。世界中には飢えに苦しむ人々もいますが、いわゆる先進国では、戦争でもない限り、食うことに困ることはありません。しかし食べて病気になったり、死んだりするようなものは、排除出来るような機構を作る必要はあります。

次の“安全”は、盗まれたり、殺されたりしたくないという欲求で、これは法律や、道徳で確保されます。警察や、裁判所はもとより、莫大な金を費やして軍隊を持つのも、この欲求のためです。

次の“便益”というのは、耳慣れない言葉ですが、いろいろ便利な工業製品によって満たすことの出来る欲求です。例えば、自動車やテレビやコンピューターやロボットです。

“愛情”については、説明の必要はありません。標準的にはこの欲求は良い友人を持ち、良い人と結婚し、良い家庭を作ることで充足されます。

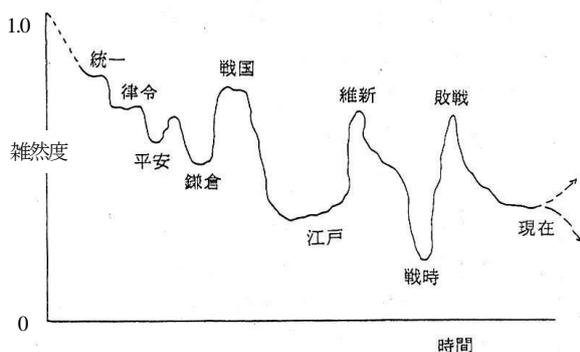
最後の“自我”は、平たく言えば、自分の言いたいことを言い、やりたいことをやる、という欲求で、これには基本的な人権として認められる面と、やや危険、もしくは無理として制限しようという面とがあります。この、ヨーロッパ人には強く、日本人にはやや弱いとされる欲求が、どのように重要性を増していくかということ、を、段々と見ていくこととなります。

## 2. 社会と個人

最後の1つを除いた、上の4つの欲求を満足するように人間が発明したものが“社会”です。個人として行動したのではとても駄目だとうことに気が付いて、まず家族という血縁集団を作り、次に地域社会、さらには国家というものを作りました。この歴史の教訓は、“徒党”を組むことによるのみ欲求が満たされる、ということです。農耕にしろ、狩猟にしろ、食料を獲得するための集団の利益は測り知れません。安全のための軍隊ほど見事な徒党はありません。また近代の工業生産は完璧な共同作業の成果です。“人は一人では生きられない”という言葉が実感となります。人々は集団への強い帰属意識を持ち、集団から閉め出されることは、即ち死を意味します。村八分です。一方で、社会はメンバーに忠誠を要求します。“社会のために奉仕せよ”“汝の国を愛せよ”といった具合です。そしてそれは個人に大きな犠牲を払わせることとなります。国の安全のために命を捨てます。また愛情が社会に拒否されると、心中することとなります。最後の欲求の自我は、強く抑制しなければなりません。

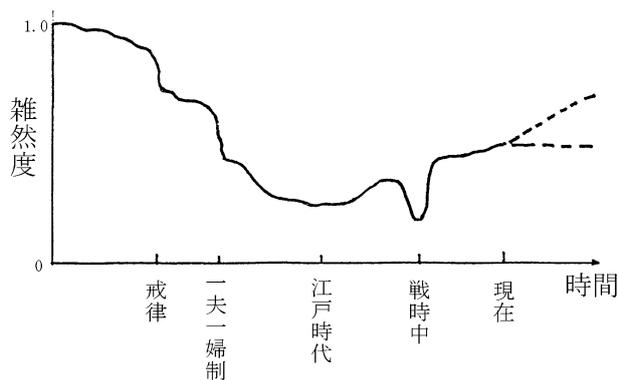
## 3. 社会の雑然度

少し具体的な話に移りましょう。社会を量的に記述するものを社会量と呼びます。これは物理量という言葉と似ています。この社会量の一つとして、雑然度という物を考えます。これは、どれほど強く乱れているかを表現します。



第1図 日本社会の雑然度

第1図は日本列島の上の社会の雑然度を時間の関数として表したものです。うんと遠い昔は全くの乱雑で、雑然度は1です。それから幾つかの小さな部族国家が作られて、雑然度は小さくなります。その興亡の後で国が統一されると、雑然度は小さくなります。神武天皇の即位です。それが少しの間続きますが、国内では時々争乱があります。蘇我と物部の争い、天智帝と天武帝の争い、といった調子です。平安朝は雑然度の小さい時期で、幕府が出来たり、それが倒れたりした後で、応仁の乱、戦国時代の雑然度の大きい時代となります。家康が全国を統一して、雑然度が小さくなります。



第2図 男女関係 雑然度

太平洋戦争の時代は極端に雑然度の小さい時代で、その後、戦後を経て現在に至ります。将来、雑然度がどう変わっていくかは神のみぞ知る、です。

第2図は男女関係の雑然度です。うんと昔は雑然度は1です。それが宗教的な戒律が輸入されて小さくなりました。江戸時代も大きくありません。最近、かなり大きくなっています。この雑然度は男女関係の自由さを現しています。

人々の間には雑然度の増大に対する本能的な恐怖感があります。雑然度の増大は社会の崩壊と解体に向かう事を意味し、それは個人の破滅につながるという訳です。道徳を教え込み、法律を強化して、何とか雑然度を小さくすべきだという声が聞こえます。

宗教も、その創始者の考えとは無関係に、雑然度を小さくするように働いています。それでは雑然度がゼロの社会が理想的なものでしょうか？いくらなんでもそれに賛成する人はありません。私たちは自我の欲求が全く認められないようなら死んだ方がましだと主張し、社会というものがそれほどまでの強制力を持つことに抗議します。ここで、自我というものが社会の雑然度を増大する強い力になることを認識します。原則として若い人は自我の主張が強く、年を取るとあきらめ顔になります。人が権力の獲得に走るのは、それによって自我の欲求が満たされるからです。

乱雑度を決めるもう一つの因子は、社会を取り巻く環境です。ある社会が外敵の侵略を受け、絶滅の危機に瀕した時は、雑然度を極端に小さくして敵に向かいます。このことは、軍隊では雑然度がゼロであることを要求されることでも分かります。また天変地異で食料が足りなくなれば、雑然度の小さい配給制度を実施せざるを得ません。この様なことは過去の歴史で何回もありました。歴史が繰返すのであれば、将来にも起きるでしょう。しかし人間は戦争の愚かしさを知っていますし、技術の進歩で極端な窮乏から逃れることが出来ます。昔なら大飢饉になったような異常天気にも、今のイネは耐えることが出来ますし、遠方から大量に運搬出来る強力な輸送機関を持っています。この様な情勢のもとで、やはり雑然度を減らすような努力が必要でしょうか。もし雑然度を少し増やしてもほかの欲求にさしたる被害がないのなら、雑然度を増やしても良いでしょう。雑然度の大きい社会、それが私の言う乱流社会です。

#### 4. 乱流社会の構造

乱流社会は誰かが構想して作り上げるものではありません。徐々に、また至る所で雑然度が増えていくのです。その例を幾つか挙げてみましょう。

第一は愛情の欲求です。古典的な倫理観によれば、男女は結婚して夫婦となり、子供を産んで、親は子を育て、子は親を敬い、また面倒を見ます。ところが現実はどうでしょうか。まず離婚が増えています。アメリカでは2組に1つ、日本では5組に1つと言われます。子は親を敬うどころか、家庭内で暴力を振るい、年を取った両親をほったらかして平然としています。多くの人々はこの状態を不道徳とし、学校でもっと道徳を教えるか、心理的な療法を探せと叫びます。しかしこの様な状態は、本当に許すべからざるものでしょうか。何としても昔の状態に戻さなければいけないのでしょうか。離婚の増えた最大の原因は女性の社会への進出と、経済的な安定にあります。それをもし悪と言うのであれば話はそれまでですが、男女の同権を良いとしながら、離婚を悪とするのは大きな矛盾です。親子の間のいざごは価値観の違いが原因です。これも決して新しい現象ではありません。ただ昔は親への反抗が家族の自滅につながっていましたが、今ではそうでもなくなったばかりのことです。古い形の家族主義は確実に崩壊に向かっており、雑然度の大きい乱流的家族像が構想されるべきです。

次の例は便益です。ロボットの発達は、今までの洗濯機や自動車などとは異質の便益を与えます。おまけに注目すべきは、このロボットは決して、少品種、大量生産ではなく、多品種、大量生産であることです。ここでは便益を受けたい人の意思、即ち自我が大きく取り入れられています。個性のあるロボットは機械という概念を超えており、ここでも雑然度は増大しているのです。

次に社会での階級について考えましょう。効率を重視する社会では分業を発展させ、支配する者と、支配される者との階級を作ります。そして階級の崩壊は、即ち社会の滅亡であると思ひこみます。技術の進歩は分業の必要性を小さくします。それは分業によって得られ、いわば隠し持たれているノウハウが、一つの情報として整理され、誰にでも利用出来る形になるからです。これは確実に階級制度を弱める方向に働きます。乱流社会では混合が激しく、人々は転々と職を変えます。一つの大学に40年も勤めたという美談は、信じられない神話になります。

乱流社会の経済は流動的で、上がったたり、下がったりします。例えば成長率が毎年決まって2%と言う社会と、長い間の平均では2%だが、年によって上がったたり、下がったりする社会を比べると、どちらが活力に充ち、将来性を秘めているのでしょうか。出来あがった社会では、人々は今までのペースを守るのに汲々として進歩がありません。乱流社会では人々は猛然と働いて、いつも新しい可能性に挑戦します。

最後に一つだけ注意します。乱流社会というのは雑然度が1という風に考えてはなりません。流体の乱流は乱雑ですが、その中に秩序のあることは良く知られています。乱雑と秩序という概念は決して対立するものではなく、共存するのです。乱流社会にも秩序は必要です。ただ乱流社会の秩序は、昔からのものとは違ったものになるでしょう。それをどのように考え実現していくかは、我々の次、またその次の人々に与えられた宿題です。

(2011. 8/21 最終更新)

## 4 2 1 - 3. 乱れ社会への接近

### 0. はしがき

我々の社会を将来どのようなものにすべきかを考えます。社会の変貌とか、進歩には自然なものもありますが、ある理想を掲げて、それに接近するという方向付けがある方が望ましいでしょう。私は、その理想社会を乱れ社会と呼びます。乱れという言葉は語感が悪く、そのままでは嫌がられるかも知れませんが、段々と親しみ深いものになるでしょう。ここで紹介される社会は、現在の自由、民主主義会の次に来るべきものです。

### 1. 乱れ社会の理念

将来の理想社会は一言で言えば、今よりもずっと自由な、好きなことが出来る社会です。自由というのは昔から人々の共通の理想ですが、今まではその自由が実現出来ませんでした。それはみんなが、あまり自由に振る舞うと、收拾がつかず、我々の生活の基盤が脅かされるからです。人々はそれを避けるために、お互いを縛り合っていました。しきたりとか、道徳とか、法律のような、いろいろと、人々を束縛するものです。社会には秩序が大切だという掟です。

細かいことは後に譲りますが、我々の持っている、色々な技術は徐々に、この束縛を不要のものにしていきます。歴史を考えても、昔は朝から夜間まで真っ黒になって働いても、やっと生きていける有様ですが、最近ではまずまずの働きで、程々の生活が出来るようになりました。次の時代では、働く時間はさらに短くなる筈です。それが乱れ社会です。しかし人々は、それに気が付いてはいません。人間は大なり、小なり、保守的で、今までの生活態度に、しがみつこうとします。私はこの一文で、その呪縛を解きたいのです。それが出来ることは、従来の秩序社会に対する、乱れ社会と呼ばれるものが実現することです。

### 2. 乱れ社会への接近

私の提案する理想的な社会では、あらゆる分野での国家の権力が弱くなります。別の言葉で言えば、小さな政府が実現します。法律は少なくなります。個人の行動に対する権力の干渉が排除されるのです。それでは極限の理念として、政府そのものを無くしてしまえばよいとも考えられます。いわゆる無政府主義です。私は、しかしこの理念には賛成しません。というのは、政府がどうしても果たさなければならない仕事があるからです。それは、経済的にも、身体的にも、精神的にも弱い人々に援助の手をさしのべることです。

乱れ社会は力任せに、一足飛びに実現するわけではありません。束縛は徐々に少なくなり、乱れは少しずつ

増えるのです。その乱雑化の進み方は、我々の技術の進歩と並行しています。と言うのは、我々の自由を許す程度が、技術の進歩に全面的に依存するからです。例えば食料は、農業技術の進歩がなければ十分に供給することが出来ません。技術が進歩すれば、少ない労働で、多量の食料を生産することが出来ます。生活に必須な、他の物資の供給についても同じことです。結局、我々の生活のあるレベルに維持するための労働は、段々と少なくなり、大きな部分の時間で自由な、非生産的な仕事を楽しむことが出来るのです。これが我々の言う乱れ社会です。社会の色々な分野での技術の発達、理想的な乱れ社会を作るのです。

人間が生きていく上で不可欠な、食料の生産について考えましょう。例えば、米の生産です。米を生産するための農作業は現在でも大変なものですが、例えば、100年前に比べると、ずっと楽になったことは、誰にでも分かります。農業技術の進歩が人間の労力を節約しているのです。あの腰の痛い田植えが、田植え機械に取って代わられました。出来た稲も稲刈り機によって収穫することが出来ます。要するに、農作業の総ての段階が機械化されたのです。この農業技術の進歩は、とどまることはありません。今に人間に代わって、ロボットが総ての農作業をやってくれる時期が来るかも知れません。技術の進歩を止めることの出来る人はありません。総ての労働は機械に取って代わられます。あの細かな心臓手術まで、ロボットに取って代わられるという予想もあります。

### 3. 理想的技術社会

以上では農作業のような力仕事について考えました。しかし技術進歩の神髄は、精神的な働きにあります。  
(2012. 10/16 未完)

## 4 2 1 - 4. 乱れ天国

### 1. 乱雑さの中に秩序がある

われわれのまわりにはそこら中に流れというものがあります。空の流れは風と言われ、水の方は川だとか海だとか湖だとかになります。その流れの一つに乱流という姿があります。この乱流を研究する学問は非常に重要です。

例えば大気の中の乱れを見ている天気予報は大気の中の乱流を研究します。あのチェルノブイリのような事故の時に、汚染物質が放出された時の拡散の現象や、空気の中の飛行機であるとか、あるいは水の中を動く船の周りの流れなど、乱流の研究は飛行機や船を作るときにも重要です。

それからもっと規模を大きく見ると、太陽系が出来たばかりのときは、ガスと液体であったろうと考えられています。この原始太陽系は、規模の大きな乱れた流れであったでしょう。その乱れた流れの中で地球やら火星やらが出来ました。誰も原始太陽系を見た人はいないんですけれども、そんな想像が出来ます。

それに生命の誕生にも非常に関係があります。原始的な生命は、何しろタンパク質が出来なければ、生命にならない。アミノ酸が適当に集まって、ちょうどいつながり方で、タンパク質が作られます。ではアミノ酸からどうやって蛋白質が出来るのか、それは乱流の中で出来たに違いないのです。いろんな種類のアミノ酸がくっつくチャンスを与えることが出来るのは乱流に限ります。

乱流に対する言葉は層流で、乱流というのはグシャグシャとしながら流れているけれども、層流では層をなして、糸を引くようにスーっと流れています。これは水道の栓を小さく開けたときに見られます。しかし大きく開けると、グシャグシャの乱流になってしまいます。ですから流量の少ないときには層流で、流量が大きいと乱流になるのです。どちらかと言えば層流は理解しやすいのですが、乱流はこみ入っていて分かりにくいのです。

その乱流の特徴は三つあります。

その一つは非常に乱雑なことです。乱雑なものの中からある姿、いわゆるパターンを見出すことが出来る。これは非常に基礎的な関係でして、乱雑であればあるほど、色々なパターンを見出すことが出来るのです。

乱流の二番目の特徴は、予知することが難しいということです。次に何が起きるか分からんぞ、というのが乱流の特徴の一つです。

三番目は混合作用です、乱流はかき回す作用があります。コーヒーに砂糖をそっと入れただけでは溶けないんですが、スプーンでかき回してやると乱流が出来て、砂糖とコーヒーがうまく混ざるといふわけです。

乱流の中には乱雑と、秩序が共存しています。なぜそうなるのかと言えば、空気にしろ水にしろ、その運動は力学の法則に支配されています。乱雑なのだけれども法則には従わざるを得ない、というこみ入った関係になっています。それが乱流の面白いところで、他の色々な社会現象との相似を考えることが出来る、非常に重要な点です。

## 2. 到来する乱流天国

乱流というものは色々なことに応用することが出来ます。その一つに、歴史の中に乱流という考え方を応用してみましょう。戦国時代は乱の時代であり、江戸時代は治の時代です。ですから歴史は治と乱の繰り返しです。

乱の時代には、人が人を殺したり、人をだましたり、人間的には好ましくない時代です。しかしその中で、いくつかの特徴があります。人間性と言いますか、人間の独創性が現れていると考えることも出来ます。

人間は追いつめられると大きな力を発揮します。ハングリー精神ということが言われますが、乱の時代には人間は追いつめられています。今までのしきたりとか、法律とかにしがみついても何にもなりません。そうすると、何とか自分の力で生きていかなければならないのです。新しく何かを考えないと生きていけません。乱の時代には創造的な気風が漲っているわけです。

それに反して治の時代になりますと、いくら頑張っても、大名の子は大名で、百姓の子は百姓です。それ以上にも、以下にもなりません。ならば何も目を血走らせて頑張る必要はありません。

乱の時代は大変な時代で、ぼんやりしていると殺されてしまいます。早く乱が無くなればいいと誰もが思います。そのために人間が発明したのが、天国あるいは極楽です。極楽というところは、もの凄くいいところです。寒くもなければ、暑くもないし、腹が減ることもなく、病気になることもありません。年もとらず、死ぬこともありません。そばには仏様がいて、天からは結構な音楽が聞こえます。お姉ちゃんは綺麗です。酒は飲めるかどうか知りませんが、キリスト教の天国も理想的な社会です。

そういうのを私は層流天国と言っています。これを昔の人は理想としたわけです。ところが、そんな層流天国が本当に結構なくめでしょうか。戦争があつたり、地震があつたり、ということがありませんから、毎日真っ白な新聞が出ます。とても退屈で、現在の我々は三日もいられないでしょう。特に若い人にとっては、理想郷ではありません。そこで乱流天国とまではいきませんが、乱流社会というものが将来現れる可能性は高いと思います。

## 3. 乱れ教育

乱流社会というものは、さっきの三つの特徴を備えています。例えば教育について考えてみましょう。現在の小学校から始まる教育は、集団生活に適応することを非常に重要視します。わがまま勝手な子供を集めて、前へならえと並ばせることに熱心です。しかし乱流社会では、もっと個性を伸ばすことに重点を置きます。集団の重要性を強調し過ぎると個性は伸びません。乱流社会の一つの特徴は、個人個人が勝手に自分を伸ばすことなのです。中学校あたりでも、個人としての気持ちのはけ口がありません。集団について行けない人は、出遅れ、立ち後れ、ドロップアウトと考えられてしまいます。

面白いことには塾が今大繁盛です。普通に考えたら学校に行った上にまた塾に行くのはオーバーロードですから、そんなところに行きたくないはずですが、案外喜んで塾に行っています。それは塾が学校よりも面白いからです。面白いというのは個人として扱ってくれて、集団として強制されないからでしょう。塾のような学校が一番いいという人もありますが、これは乱流的な教育が好まれる一つの例でしょう。

それから、教育で大きいのは受験地獄の問題です。これは学校が悪いというよりも社会が学歴偏重で、それが受験競争を生みだしているのですから、学校そのものとしては、どうにもなりません。

学歴偏重のない乱流社会が出来上がれば、受験地獄は自然に解消します。私は大学に長い間いたので、大学について考えてみます。大学は工学部だ、文学部だ、医学部だ、などと分かれています。その学部はまた物理、化学、機械、電気、情報などと分かれています。これは非常に有害です。高等学校を卒業して大学に行くぐらいの年頃では、大部分の人は自分が何に向いているのか、自分は何をしたいのか分かっていません。自分が何

になろうかという強固な決心で大学に進む人は、一割いるかどうか疑わしいのです。文学も出来るし、物理も出来るという人がありますし、あるいは途中で文学部をやめて医者になったという人もあります。ですから文学部の先生が工学的なことに口を出すとか、その逆などは結構なことです。お前はこっちのことに素人ではないか、黙ってる、などと言えば、新しいアイデアの芽がすみ取られてしまいます。

30年ほど前に、どうも大学は専門馬鹿を養成しようとしているんじゃないかと言われたことがあります。学部、学科の細分化は悪いところがあります。細分化しているから、社会に出てすぐ役に立つかという、そんなことはなく、会社に入ればまた一から叩き上げられて、やっとこさ一人前になるのです。だから大学の時代には、もっと自由に勉強するのがよいと思います。

ところで、こういう事を言うと、専門家を養成することが出来ないと言われます。専門家には経験や知識の蓄積があるわけですが、それらの蓄積は必ずしも個人の頭の中にある必要はありません。色々なデータバンクが発展すると、経験や知識の大部分がその中に入ってしまう。

こういう技術の発展が一方にあるわけですから、頭の固い専門家よりも、頭が柔らかで色々なことが考えられ、受け入れられる人が必要になります。

これからの社会では、専門家が何人かチームを組むよりも、クリエイティブな人間の方が大切なのですから、そういう人間を育てるような教育が大切です。

今では、例えば大学を卒業したときに免状を貰って、文学士でござい、法学士でございと言うものだから、これが受験戦争を引き起こすことになります。だから大学を卒業したって、資格なんか何もないようにすればいいのです。入りたいときに入って、止めたいときに止める。いくら年をとっても、社会に出た後でも、また大学に自由に入れるようにします。

日本の大学は、農業と同じように非常に保護されています。競争というものがほとんどありません。ですから勝手気ままにやっています。国立の大学は多く、私立の大学も財政援助を政府から受けています。魚屋さんや八百屋のおさんたちが出した税金で、愚にもつかない学生を教育しているのです。大学の援助は止めて、独立採算で乱流的にやってみるべきでしょう。

#### 4. 家族の姿

まず、現在の家族が大きく変わっていくのは、女性の社会への進出が大きな原因です。女性が社会で働き、経済的な独立が可能になって、女性は何のために結婚しなければならないのかという疑問を持つようになりました。結婚によって知らない人と一緒に生活しなければならず、相手の親、兄弟も煩わしい存在です。結婚などはまっぴらです。それに伴って出産の減少が始まりました。しかし男と女が仲良くするのはごく普通の感情ですから、これだけは時代が変わっても変わりません。しかし結婚してしまうと、たくさんの人とつき合えなくなります。結婚しないでいると、多数の人とつき合うことが出来るわけです。一度結婚してしまうと、自分の旦那以外の人とつき合ったら、不倫だとか不愉快なレッテルを張られて、えらい目に遭います。しかし結婚しなかったら誰と何をやったって、そういう目で見られることがない。もちろん結婚する人がなくなるとは言いませんけれども、結婚しない人の数というのは、今からだんだんと増えるのではないかと。あるいは一遍結婚して、離婚したままになっている人の数が段々増えるんじゃないでしょうか。

それは家族というものの乱流化で、今までは人間というのは、男にしろ女にしろ、ある年になったらまず結婚するのが当然であって、結婚しない人は異常であるという風に考えられていたわけですが、結婚したくないやしゃなくたっていいじゃないか、そういう状態が訪れるのではないのでしょうか。

ところが、家族というものの重要な役割は、子供を育てるということです。子供がない社会というのは、いつかはつぶれてしまいますから、望ましい社会にはもちろん子供がいる。子供の面倒というのを家族が見る、あるいは母親ないしは父親が見なきゃしょうがないというのは当然のことです。

それで、子供をどうするかということなんですけれども、子供の前にちょっと考えられるのは、年寄りのことですね。年寄りの面倒というのは、昔はずっと子供や親戚が見ていたわけですが、現在は色々な施設があり、またボランティアのような形もあって、家族だけが年寄りの面倒を見るのではないという風に変わりつつあります。この傾向は、もっともっと進むだろうと見るわけです。ですから老人の面倒というのは、社会が見るんだと考えてもいいわけですね。これは、近い将来必ずそうなる。

そうなると、家族が子供の面倒を見なきゃならないと決めつけることが出来るのでしょうか。年寄りの面倒を

社会が見るようになるんだったら、子供の面倒も社会が見るようになってもおかしくはありません。具体的なことは、私はよくわからないんですが、今までは母親が100%面倒見ていたのが、母親が50%面倒見ればいいということになるのではないかと考えられるわけです。そうすると、必ずしも家族というのが、がっちりしていないと、子供が育たないということはありません。この点は際どいところですが、父親がなくなつて、母親だけだつて、やり方によっては子供は立派に育つ。経済的な問題は別なんですけれども、育てるということが、そんなに親だけに課せられたものではないんじゃないか。つまり、家族というものは、今までのように百年二百年も続く必要はありません。

だけど、独りぼっちで暮らすのが一番いいと言っているわけではありませんから、結婚しない人でも、二人三人で一緒に共同の生活をするのは、ちっとも差し支えないし、恐らくそれも増えるでしょう。

それに、今までは子供が大きくなったら、親のうちから離れるということが原則的に考えられていますけれども、親と子供がずっと――子供はもちろん結婚していないわけですから――一緒に生活しているというところもあるでしょう。女同士、あるいは男同士、あるいは男と女が結婚してもいいし、親子で生活してもいい。生活のパターンというものが、非常に多岐にわたってくる。家庭なり、家族なりというものは、やはり乱流的になるだろうと考えられます。

## 5. 創造性重視の社会へ

それから、経済的な問題が前面に出るかもしれませんが、仕事について乱流学の方から――たとえば、現在の会社に勤めている姿を考えてみましょう。会社というのは、現在はかなり社員を縛っているわけですし、朝は何時まで来て、夜は何時までいなきゃならない。月曜から金曜までは、必ず来なけりゃならない。来ないと月給を減らすというわけです。

前に述べた小学校と同じですけども、会社というのは集団あるいはチームワークというのを重要視している。特に日本の会社は、チームワークの作り方が世界一うまいと言われています。これはやっぱり教育の成果だろうと私は思うわけで、子供のときからチームワークというものを徹底的に叩き込まれていますから、個性というものは没却してもチームのために働く。チームが働くときには、自分が嫌だと思っても我慢しなきゃならないと言われていまして、個性というか、自我といいますか、そういうものが極端に抑えられています。また抑えられていない、とチームワークはうまくいきません。

ところが、これからの社会で、そんなことでいいんでしょうか。日本の経済成長というのは、恐らくチームワークによって支えられてきて、日本の自動車はいい自動車だ、日本のテレビはいいテレビだというのは、そういうチームワークでつくられたイメージです。だが、今からもずっとそれで行けるでしょうか。

よく言われることですが、もっと独創的な、創造的なアイデアというものがないと、これからはやっていけないでしょう。今までの自動車にしろ、テレビにしろ、飛行機にしろ、それらはほとんど外国の人が発明をしたわけですし、その発明したものを、きちんときれいなものに仕上げるのが、日本人はものすごくうまいわけですが、日本人が発明したものであるというのは、今日本が売って儲けているものの中には、ほとんどありません。だから日本が、あるいは日本の会社が今からうまくやっていくためには、クリエイティブな人間がいなければならない。クリエイティブな人間というのは、チームワークがうまい人間とは、かなり違う種類の人間なんです。

クリエイティブな人間がいらないような会社というのは、恐らくだんだん旗色が悪くなるでしょう。チームワークだけでやっていける時代というのは、もう既になくなりつつあります。ですから、小学校のときからクリエイティビティを伸ばすような教育というのをやる。チームワークは恐らく悪くなるでしょうが、これからはクリエイティブの方を取らざるを得ないだろうと思います。

例えば会社員で言うと、与えられた仕事をやっていけばいい、無事に今日も過ぎました、という人ばかりがいるような会社というのは、競争に必ず負けてしまうでしょう。いい人、クリエイティブな人を採らなきゃならない。しかし、大学出の新卒が面接に来たときに、クリエイティブな人というのがわかるか、恐らくわからないでしょう。そうすると、クリエイティブな仕事をしているかどうかというのは、何年かやってみないとわからないわけですから、今のような採用の方法では、本当にいい人を採れないでしょう。

私は恐らく、クリエイティブな人がどこにいるかということ、目の色を変えて探さなければならない時代が近いと思います。新卒ではわからないから、何年かやっている人で、隣の会社に、ものすごくいいのがある

ぞ、というようなときに、その人を引っっこ抜かなければならない。ぼんやりして、何かいい人が来るだろう、なんてことを言っているような会社はつぶれてしまう。そういう風になって来ますと、流動性が非常に上がる、つまり今みたいに大学を卒業して勤めると定年までその会社に居座るのが通例である、ということがなくなって、あっちに行ったりこっちに行ったり、特に能力のある人ほどあっちこっちに行ったりする。これはアメリカなんかでよく言われていることですが、恐らく日本にも、そういう時代が来るでしょう。

クリエイティブな人に対して、たとえば朝八時半に来なきゃならない、夕方五時までいなきゃならない、という制限を課してみても、何にもならんというか、非常にマイナスの効果があります。チームワークのときには、それは大事ですが、クリエイティブな人は何も八時半に行ったから、いいアイデアが出るということはないわけですからね。そうすると、フレックスタイムというか、行きたいときに行って、行きたくなければ行かないでもいいという風なことを、どうしても導入しないと、クリエイティブな仕事というのは出来ないでしょう。結局、勤務形態が乱流化するわけです。ある人は夜中にいいアイデアが浮かぶし、ある人は朝方にいいアイデアが浮かぶ。また電車で居眠りしているときにアイデアが浮かぶという調子なんです。会社に行って、オフィスの机の前に座って、「ほらいいアイデア出せ、ほら出せ」と言われたって、そんなものは出ません。クリエイティブなものというのは、「あっ」というときに出るわけですからね。だからフレキシブルにせざるを得ないわけです。縛りつけてみたら、何にもなりません。

私は、クリエイティブな人というのは、いろいろ段階がありますから、ほんの少しの人ではないと思います。クリエイティブといっても物凄く大きな仕事もあるし、小さな仕事でも、やっぱりクリエイティブであるかどうかによって優劣が出来るわけですから、あらゆる人が、ある意味ではクリエイティブなわけなんです。ですから、フレックスタイムというのは、そういう点では役に立ちます。

もっと言うと、だったら何も会社へ行かなくてもいいんじゃないかというわけですね。それは在宅勤務という名前になっているわけですが、自分の家において、クリエイティブなアイデアを出している、あるいは考えている。それをコミュニケーション、つまり他の人とつなぐ必要がありますが、これは現在、通信技術が非常に進歩していますから、電話はもちろん、ファックス、あるいは電子メールとか色々ありますから、何も会社に行かなくてもいいということはありません。こうなると、仕事のために会社へ行く必要がないわけです。

あるいは別の面から言うと、たとえばこういうことを言う人がいます。「私は会社の仕事というのは、絶対にうちに持ち込まないんだ」、「会社は会社、うちはうちだ」として、それを自慢にしている人がいます。私は、これには反対です。と言うのは、会社の仕事をうちに持って帰って、うちでやればいいじゃないかということなんです。それは、かなり乱流的になっているわけです。会社の仕事をうちに持って帰らないと、実際会社は会社、うちはうちですから水と油のようになっている。いわゆる層流的です。

それを、会社の仕事をうちに持って帰ったり、あるいはうちの仕事で会社に電話かけたりしていると、普通だと、「何だおまえは私用電話をかけて」なんて怒られます。しかし、その分だけ、うちに帰っても仕事をしているんだということになれば、全部足せば同じことになる。そうすると、毎日職場に通う必要もないから、在宅勤務というのも可能になります。

これは何でもないことのように思うかもしれませんが、非常に重要なことを含んでいます。現在の女性が、仕事と家庭というものを両立するために、どれだけ苦勞しているかということは、はっきりしています。このまま行ったら、もう会社をやめなきゃならない。ところが、クリエイティブな女性が、子供が生まれたということのために会社をやめるなんていうのは、これは会社にとっても、社会にとっても、ものすごい損失です。

だから、在宅勤務を可能にする技術的な進歩というものが、女性の仕事と家庭の両立を可能にするのです。女性はうちにいて子供の面倒を見ます。子供の面倒は社会でもある程度は見ますけれども、母親の存在というのはやはり重要です。だが、子供が寝てしまったりした、その空き時間で仕事をすればいい。出来た結果は、ファックスや電子メールやテレビ電話でやり取りすれば、女性は家庭において、それだけの給料をもらって当然なんですね。

こうなれば、在宅勤務、フレックスタイムによって、女性が家庭と仕事を両立することが出来ます。女性のそれだけの能力、要するに人口の半分を占めている女性の能力が、社会に還元されます。社会に女性が貢献するということは、ものすごいプラスになります。

コンピューターとか通信手段の発展というものが、女性の社会への貢献を可能にします。それらは、かなり乱流的な勤務状態で、今までの人を見ると顔をしかめるような勤務状態だとは思いますが、それが結果的に社会に役に立つのではないでしょう。

## 6. 技術の発達が実現させる自由な社会

こう見て来ると、今のようなことを可能にしたのは技術だということがわかります。通信技術、コンピューター技術というものがあるから、それが出来るのです。社会の発展、あるいは社会の変化というものを、技術が支えているということは明瞭です。技術が将来どうなるかということのを抜きにして、社会なり、会社なりがどうなるかを議論したって、まったくのナンセンスです。

技術が社会を支えているというのは、簡単な例でも分かります。例えば洗濯機、冷蔵庫、掃除機などは、女性の家内作業時間を短くしたと言うか、解放してくれました。それから田植え機械などもそうで、昔は明日は田植えだとなると、ちょっと熱があろうが、腹が痛かろうが出て行かなくちゃならない。しなければ村八分をくいます。しかし今は、このような集団行動をとる必要はない。田植え機械という技術が、村の社会構造を変えました。技術の進歩は必ず社会に大きな影響を与えます。さっきのフレックスタイムなんかというのは、情報の流通や処理というものに大きな影響を与えました。

他の例で言うと、現在多品種少量生産ということが言われています。今までの技術は少品種大量生産であったわけで、決まったものをたくさん作るから、値段が安くなる。値段が安いから、これは嫌だなあと思ったって、それを買う以外にない。これがまた、少品種大量生産のメリットでもあって、確かにそれで我々の手に入りやすくなったんですが、本当に欲しいものを作ってくれないじゃないかという不満があります。車なら車の、あの格好が気に入らない、自分はこういう格好の車が欲しいという、いわば購買者、需要家の声が一層重視されるように、将来は恐らくなるでしょう。

ところが、現在までの生産システムだと、これにはなかなか応じられない。すべて手仕事になってしまいます。手仕事の時代に帰ったら、物の値段なんか、ものすごく高くなって、とても買えない。しかし将来多品種少量生産が出来るようになるというのは、これはロボットがいるからです。

ロボットがやってくれれば、安く出来ます。結局ロボットの手づくりですね。ロボットの手づくりというのは、コンピューターでコントロールされているわけですから、安くかつ速く、確実なものを作ってくれます。ロボットの発達というものは、需要家の方からこれを要求するという、今までのやり方をひっくり返すような効果を持っているんです。

こういう例を見ると、技術というものが、いかに社会というものを変えることになるか。また、技術というものが出来るので、乱流社会が支えられているということがよくわかります。

結局、自分が欲しいものが得られる。あるいは自分のやりたいことが出来るというのが、乱流社会の特徴なんです。だから、乱流天国というのがあったとすると、これは原則的にやりたいことは何をやってもいい。何も仏さんのそばでじっと座っているだけが能じゃない。オートバイで走ってもいい。(笑)

ただ、何でもかでもむちゃくちゃではなくて、最初の方で述べたように、乱流の中には、法則ないしは秩序というものが共存している。だから、最低限の道德、規制、束縛はどんな乱流社会になったって、消えることはありません。だけど、束縛なり、規範なりというのは最小限になっているわけです。それ以外のところは今までのように、学校はこんなものだ、やあ会社はこんなものだから、そんな風なしがらみ出来るだけ取っ払って、本当の意味の自由になるのが、乱流社会だということです。

## 7. 乱流社会に戦争はない

最後ですけれども、個人がどのような行動をとるか、個人の人生を考えてみますと、層流人生と乱流人生があります。結構な上流社会に生まれて、頭もよくて、一流中学、高校、大学を出て、一流会社へ就職して、最後には常務だか専務だか、場合によっては社長になって、やめる。息子はまた一流会社に勤めて、娘は一流会社の社員のところへ嫁に行ったということになると、これはもう、いわゆる順風満帆というやつで、苦労はあったかもしれませんが、すばらしい層流人生です。

ところが一方では、しよつちゅう挫折をしていて、会社に勤めたかと思うと上役とけんかしてやめてしまう。結婚したと思うと、奥さんは病気で死んでしまうとか、いろんな目に遭う乱流人生もあるわけです。

層流人生と乱流人生のどっちがいいかということになりますと、大抵の人は、「層流人生がいいに決まっている」と言いますが、それは、本当に生きるに値する人生なんですかね。たとえば、八十になって死ぬときに、「私は無事に一生を送りました」とか、「波風がなくて私は幸せでした。はい、さようなら」で、本当にいい

のでしょうか。

たとえば、芸術やら小説は、層流人生では出来ません。大部分の芸術家は、ベートーベンにしる、シューベルトにしる、あるいは絵かきにしる、みんな乱流的な人生なんです。人生のうちのある時代が乱流状態で、その乱流状態のときに、非常にいい仕事をします。明日から食う物が無いという状況を押し付けられながらです。我々みんなが芸術家じゃありませんけど、これからの仕事としては、よくある研究者や、設計者、あるいは放送関係のディレクターというような人は、乱流状態のほうがよく仕事出来るんじゃないか、芸術家だけの専売ではないのではないかと思います。

もちろん、人生を乱流状態に置かれたくないという、逃げ出したくなる気持ちは誰にでもあるわけですが、それを乱流状態に押し付ける。例えば学校が乱流状態になっていけば、個人がいくら層流状態に行こうと思ったって、これはもう乱流の中に巻き込まれてしまいます。そういう風にして、個人を乱流状態にある程度押し付ける。別な言い方をすると、ハングリーな条件に置くわけです。それで人の力というのを発揮させるというのが、乱流状態での人生に対する考え方でしょう。年をとって、七十にも八十にもなったときに、未だ乱流状態に置かれているというのは、気の毒だと思います。しかし、二十とか三十とか、生産的で、困難を乗り越えることが出来る年齢のときには、乱流状態に置いた方がいい。

乱流状態というのは、かなり個人的な状態なんです。人間には帰属意識というのがありますよね。よく言われる「寄らば大樹の陰」とか、「みんなで渡れば怖くない」とかですね。そういう風にやると、これは層流状態になってしまうわけです。これではろくな仕事は出来ません。だから、バラバラにして、その人間に責任を負わすというか、ある乱流状態の経験を与える。そうするとその人間が、しょうがないというわけで、何かひねり出す。この、ひねり出したということが、その人間の大きな人生の貢献、ないしは人生の仕事なわけです。

じいっとしては勤まらないかも知れませんが、要するに、平穩無事な人生を過ごした人は、大した生産をしないだろう。しかし、乱流状態に放り込まれた人は、自分の全精力、全能力を出して、乱流状態で活躍をしようとする。そういう状態に置かれた方が、本当の人生ではないかというわけですね。

現在の社会というものは、明日食う物がなくて、道端でゴロゴロ人が飢え死にするようなことは、少なくとも日本の程度に発達した先進国社会ではありません。だから、乱流状態でも、そんなによくよする必要はないのです。これがまた一つの救いになっているわけです。若い人を、よしよしと甘やかしていると、その人の能力が結局は出ない。ということは、その人が不幸せになるし、社会に貢献することもなくなってしまうのではないかと。個人の人生というものも、私は乱流的になった方がいいのではないかと思います。

それに乱流社会には戦争がありません。なぜかという、みんながいろんなことを勝手気ままに考えている、一億一億心の社会ですから、これは戦争になりません。世界中の国がみんな乱流社会になったら、指導者が「やっちなえ」と言ったって、こっちやあっちを向いているのですから、喧嘩になりません。だから戦争が起きない。男女は同権だし、そういう意味で乱流天国は結構だらけです。

(2012. 10/12 最終更新)

## 421-5. 乱流社会

### 1. 多様な生活形式

家族の崩壊      男と男      女と女      親と子

### 2. 完全な同権

分業は不必要      男女の同権      民族の融和

### 3. 仕事と個人の両立

自由な勤務形態      会社の流動化

### 4. 盛んな階級混合

人が人を支配しない      世襲無し

### 5. 選択教育の機会

学校の閉鎖      情報の無碍の流通      生涯教育

### 6. 本当の民主主義

直接参加      地方分権      票集め無し

### 7. 宗教の消滅

無宗教      超多宗教      宗教戦争の停止

### 8. 絶対平和

戦争への意思統一無し      軍備全廃

(2003. 6/10)

## 4 2 1 - 6. 乱れ社会を支える技術

### 0. はしがき

社会はきちんとしていて、乱雑なものなどはない方がよい、と根強く信じられています。乱雑さが進行すると、社会は崩壊に向かい、人々の生活は大変なことになる、という考え方です。しかし色々な分野の技術の進歩によって、乱れた社会でも生活はきちんといけるのです。

### 1. 生産

我々が必要とする物資や、情報を獲得するための共同作業の必要度は、技術の発達と共に減少しました。例えば米という食料を生産するための田植えという作業は、昔は部落の共同作業でした。その作業に参加しない人はいわゆる“村八分”を受けて、生きていくこともおぼつかなくなります。しかし今では、田植え機械を使うことによって、一人でも立派に米を作ることが出来ます。農民は自分の好きなときに田植えを、一人でちゃんと出来るのです。この点については秩序は不必要なのです。

高度の自動化      知能ロボット  
食料の工場生産      光合成技術      遺伝子操作  
多品種少量生産

## 2. エネルギー

化石燃料からの脱却  
太陽エネルギー

## 3. 情報流通

情報網 情報端末 巨大データバンク  
ニュース 知識 教育 医療

## 4. 交通 運輸

物資流通 旅行  
短距離 中距離 長距離

(2006. 11/2 未完)

## 4 2 1 - 7. 乱流社会を支える精神

### 1. 帰属意識からの脱却

自我の主張 弁解しない みんなで渡らず

### 2. 平等な制度

男女 階級 特権階級の排除

### 3. 公平な競争

FAIR PLAYの精神

### 4. 創造性

他人の真似をしない 情報の創り手

### 5. 寛容の精神

他人の自我の尊重 我慢

弱者へのいたわり

(2003. 6/10)

## 4 2 1 - 8. 植物の社会

今回の話題は植物です。動きもせず、声も出さない植物ですが、乱雑に成長したり、社会とも呼べるある種の群落を作っていることも知られています。それらについて考察します。

### 1. 植物の意識

植物には動物の脳や神経に相当するものではありません。しかしある種の意識を持っているように見えます。

### 2. センサーとメモリー

植物は自分を取り囲む環境を何らかの手段で観測します。それをセンサーと呼ぶことが出来るでしょう。またその観測結果を記憶しておいて、それを適切に処理して、自分の進み方を決めています。

センサーには色々な種類があります。すぐ気がつくのは、光、温度、湿度から風、重力があり、その他にも人間が気がつかないセンサーがあるかもしれません。

### 3. 環境順応

植物の成長に関する環境は好ましいものと、そうでないものがあります。植物が積極的に環境を変えることは出来ませんから、植物に求められるのは順応です。

### 4. 群落形成

植物はその成長と、子孫作りの当然の結果として、群落を形成します。

群落は同じ種類の植物だけで作られるのではありません。種の違った、大きい植物、小さい植物などが混ざり合った群落も珍しくありません。群落をどのようなものにするかについて計画なり、同意が形成されているのかは明らかではありません。しかし、役割の分担が了承されているのではないかという可能性があります。

### 5. 交配

植物が子孫を作り、繁茂するためには交配が必要です。これは巧妙に計画された乱雑の応用です。交配は虫媒、風媒などで行われますが、虫にしろ、風にしろ、何かの秩序を持って仲立ちをしているとは思えません。これはかなりの乱雑な過程です。この乱雑さが進化の原動力です。

### 6. 体内指令

植物に大きな変化が起きるとき、例えば開花、結実などが一本の木ではほぼ一斉に行われるところを見ると、それらについて何らかの指令があるところから発せられているのではないかと想いたくなります。例えば、みんなに関心が強い桜の開花が、一分咲きから始まって満開になるまでに1週間という短さです。

### 7. 栽培

植物は人間と干渉します。人間はずっと昔から食料として植物を栽培し、人間に適した品種改良をしてきました。最近では遺伝子の操作によって天然には作られないような種を誕生させ、成育しました。

(2005. 7/7)

## 421-9. 職業に貴賤有り

### 0. はしがき

今回の話題は職業です。職業に貴賤を付けてはならない、というのが昔からの教訓であったのですが、今は、昔は無かったような職業が増えましたから、それを見直すことも必要でしょう。ごく特殊の人を除いては、誰でも働かなければ生きてはいけません。社会にはどのような働き方があるのか、また人はどのようにして自分の働き方を決めるのかを考えてみます。10ほどの職業について考えます。

### 1. 価値基準

職業に貴賤を論じようとするれば、それは何らかの価値基準に基づいているのでしょう。各人の持つ価値基準は異なり、主観的なものですから、職業についての批評は、その人の価値基準を表すこととなります。私の職業批判によって、私の持っている価値基準を見て頂ければと思います。

### 2. 政治

まず政治家という職業から始めましょう。政治が職業として成り立つようになったのは国家が成立してからです。古い職業です。政治家というものは自分は働かないで、働く人々から取り上げたもので自分の生活を維持するという、ずるい人種です。江戸時代の武士階級はその典型的なものです。現在でも政治をしながら財を成す連中が居ます。これは政治屋と呼ばれる連中で、人々はすっかり騙されているのです。近代の民主主義では政治家はすべて選挙という洗礼を受ける事になりました。みんなが自由意志で投票する。この制度は理論的には理想的なものです。しかし現実には選挙には金がかかり、それを取り戻して、次の選挙に備える為に、当選したら何やら怪しい事をする事になります。それよりも、もっと悪いのは世襲です。夫や、父親が死んだ時に、その残された地盤を利用すれば当選は間違いない、という現実です。候補者を選ぶ有権者の基準が候補者の能力や識見でなく、もっと感情に動かされているのです。可哀そうだから投票してあげようというわけです。これではよい人が当選する可能性はありません。私も、どんな選挙でも、進んで投票したいような候補者にお目に掛かったことはありません。どうしてあんな人がと思う人が当選します。このことは小選挙区になってから、ますます悪くなりました。いい加減な投票をする人が政治を悪くし、人々を困らせているのが、我が国での選挙の現実です。何でもかでも選挙さえすれば民主的というものではありません。

### 3. 教育

教育が大事なものであることには誰にも反対がありません。日本が欧米の列強に肩を並べるようになったのは教育の力です。特に小学校、中学校の初等教育です。しかし最近ではこのことは怪しくなりました。それは先生の質が下がった、別の言葉では、いい人が先生にならなくなったからです。今の日本には“仰げば尊し、我が師の恩”というような雰囲気はありません。今の社会では先生という職業は月給を取って、適当にさぼっている、ぐうたらな人間の集まりだという認識しかありません。

教育の基本は教師です。どんな法律や組織を作っても、教師が駄目なら何ともなりません。いかにしても良い先生を獲得しなければなりません。その為の私の提案を述べましょう。まず現在の月給を50%程上げます。教師志望者は急増します。ここで厳正な口頭試問をします。教師に要求されるのは学力ではありません。教育に対する情熱です。それを調べる為の試問です。当然の事ですが、個人の心情や思想に立ち入ってはなりません。色々な考え方の人がいて良いのです。もともと教育というのは遭遇です。たまたま自分に強い影響を与える教師に出会った生徒は幸運なのです。教育はすべての生徒に平等に与えられるものではありません。人と人の出会いです。

予備校の評価は色々ありますが、私には予備校が整い過ぎているのが不満です。手を取り、足を取り、という言葉がありますが、教育には突き放した面が必要なのです。予備校で痒いところに手の届く世話を経験をした子供は、何でも指導をして貰えるのが当たり前で、世話をしてくれないのは怪しからぬ事だと思ようになります。自分で考えて自分らしく生きていこうと思わないようになります。これが予備校の最大の欠陥です。

## 4. 物作り

我が国には色々な分野に、ものづくりの優れた伝統が残されています。職人です。かつては、人々が必要とする道具はすべて職人の手で作られていました。現在では機械で物を作ることが理想とされます。しかし本当は手作りの、暖かいものを我々は欲しているのです。商品の大量生産、大量消費、大量廃棄というつながりは“儲けんかな”という商業主義に操られているのです。もっと物を大切にしなければなりません。それと共に、良い品物を作ってくれる職人を大事にしなければなりません。職人というものは短時間で、簡単に養成出来るものではありません。職人の確保には政府の協力が必要です。後継者の養成です。これは市場とやらに任せておいてはなりません。一度失われた技能は、決して回復をすることが出来ないからです。

## 5. マスコミ

マスコミは印刷技術の発展によって生まれた新聞、雑誌から、ラヂオ、テレビ、インターネットと発展して、情報を伝達する、世界を被う巨大な網組織に進化しました。世の中には人々の考え方を支配する様な情報が満ちあふれていますが、マスコミで伝えられる情報がすべて正確で、間違いのないものであるという保証はどこにもありません。

テレビなどで、“やらせ”とか“捏造”とかいわれますが、大なり小なり、それのない番組はありません。テレビジョンというものは見る人を喜ばせる為にあると心得ていれば、大袈裟に騒ぐことはありません。正確さは二の次で、面白ければいいのです。騙される方が悪いのです。新聞、雑誌、テレビなどが、すべて真実を伝えていると思うのは、とんでもない間違いです。大体、半分は嘘と思うのが常識です。この嘘には積極的なものと、消極的に、伝えるべき事を伝えなかったというのも含みます。人々の知る権利を守ると豪語しているマスコミが、全く伝えていない事柄が沢山あります。例えば、イラク戦争のことについて言えば、イラク人の犠牲は何人か、イラクの石油は誰がどのように支配しているのか、日本の自衛隊が残したのはどんなものか、自衛隊が使ったお金はいくらか等、誰でもが知りたがっている事柄がちっとも報道されていません。これでは知る権利も、へちまもありません。もう一つは能力不足です。自然科学や技術についてとんでもない間違い、あるいは誇張をすることがあります。これも嘘の類です。マスコミを職業とする人々は、もっともっと勉強して、正直であって貰いたいものです。

## 6. 会社経営

経済の基幹となる会社には大小様々がありますが、経営者という職業の人間は、古い考え方では、労働者を搾取する人々です。最近では労働の形が変わってきて、搾取という言葉は何となく、ふさわしくなくなりました。しかし会社の得た利益をどのように分配するかについては、働く人々の権利を守らなければなりません。アメリカあたりとは違って、日本の経営者は労働者に比べて法外な収入を得てはいないようですが、労働者との対立を避けることは出来ません。経営者は株主に対しても高い配当を維持していなければ、地位が危なくなります。法人税を軽くして貰って、その分を配当に回そうとするなどは論外です。株主は金を出して株を買うことだけで、働くこともせず利益を得ています。それが資本主義というものでしょうが、そのような、働かないで儲けるといふ形には納得しがたいところもあります。また資金を投入して、従業員ごと一まとめで会社を買収することもあります。これも賛成出来ません。まるで人身売買ではありませんか。働くサラリーマンの人権が守られているとは言えません。資金を運営するだけで、額に汗をしないで結構な生活を送っている人々を、私は軽蔑します。それは卑しい生き方です。

経営者に対立するものが労働者階級です。かつての労使対立は現在の技術の進歩によって形を変えました。即ち労働者というものがほぼ均一な肉体労働を提供するものではなく、職種によっては頭脳労働、対人折衝、コンピューター使用などという、ひとまとめになりがたい仕事に分かれてから、団結力を失ったのです。労働組合の無力化です。しかし、自分たちの権利を守るための労働組合の奮起を要望します。必要ならストライキもすべきです。

## 7. 法律

法律というものは社会の秩序を維持する為に欠くべからざるものです。しかし、法律は決してすべての人々

を幸福にするものではありません。人々の常識で悪いとされていることをした人を罰するのは当然です。他人のものを盗んだり、他人を傷つけたりが悪いということに反対する人はありません。しかし生活が複雑になると、ある行為が良いことなのか、悪いことなのか分かりにくくなる場合があります。その例が、いわゆる経済事犯です。それについては、どれが悪いことかがはっきりしません。インサイド取引とか、紛飾決算などは何故悪いのか、その理論的な根拠がありません。一般株主の利益という言葉が持ち出されますが、何故株主を守らなければならないのかは分かりません。彼らは決して生活に困ったりしているわけではないのです。裁判の結果にも呆れることも少なくありません。法律は弱い人々を救うためにこそ運用さるべきです。

## 8. 健康

人々の健康を保つのは医者です。最近の医学の進歩には驚くほかありません。特に我が国の医療保険のシステムは世界に誇れるものです。私自身も心臓のバイパス手術を受けましたが、一昔前では私の命はなかったでしょう。子供の時から病身だった私は、お医者様との付き合いは多かったのです。医者という職業は人の命を救う崇高な仕事です。アメリカあたりでは医者と弁護士は金持ちへの近道のようなのですが、我が国でもその傾向が出ているように感じます。しかしちょっとした手術や投薬のミスで患者を死なせると、医療ミスといって訴えられます。ミスを絶対にしない職業などはありません。よほどひどい失敗でない限り、訴えてはなりません。訴えられることを避けるために、危険の多い診療科の医師になることを止めるようになって、結局は自分で自分の首を絞めることになるのです。

## 9. 芸能

生活の余裕を表すものが芸能という職業でしょう。江戸時代の武士、商人、職人などはそれぞれの豊かさに応じて、分相応の芸能を育てて来ました。能狂言、歌舞伎、文楽、踊り、落語等です。西洋の芸能が流れ込んで来て、若い人はそれにすっかり虜になりました。もともと色々な種類の芸能が流行することは悪いことではありません。我々の生活を豊かにする伝統的な芸能を無くしてはなりません。NHKあたりの放送もありますが、もっとやってもいいのではありませんか。経済的に苦しい伝統芸能を未来につなげることも、政府の仕事です。積極的な振興策を期待します。

## 10. NGOとNPO

最後に最近出てきた職業として、社会奉仕の拡張としての継続的な無報酬労働の意義が重要視されるようになりました。NGOです。これは従来の、労働とお金との交換という考えを根底からゆさぶる革命的なものです。誰にも命令されずに、社会の、あるいは個人の役に立つことをする人達が現れたのです。まだ社会を揺さぶる程の影響はありませんが、これはどんどんと成長するでしょう。私はその人達を尊敬します。例えばアフガニスタンで医療や灌漑に奮闘している中村哲という人がいます。日本政府が及び腰なのに対して個人でアフガニスタンの人々のために貢献している、その姿には頭が下がります。

このNGOやNPOは、新しい経済活動の可能性を秘めています。現在の物やサービスの産出がすべて資本主義の枠の中で行われているのに対して、社会が必要とするものを供給する新しいシステムです。

私には株式を元にする資本主義が唯一、最善で、永劫に続くものとは思えません。資本主義というものは原則として、富める者はますます富み、貧乏な人は置いていかれるシステムです。それに代わる有力な組織がNPOです。NPOがもっと、色々な形に分化し、広がって、株式会社にとって代わる時が来るかも分かりません。即ち資本主義の終焉です。私は生きている内に、その時が来るのを見たいと思います。

### 11. 需要と供給

社会に全く需要のない職業を選ぶことは出来ません。それは自分の提供するサービスが社会的に全く無価値であることを意味します。逆に供給のない職業を空想するのも無意味です。社会が停滞して、新しいことが殆ど起きない時には、一番無難な選択は世襲です。需要が代わらないのですから、供給を変える必要がありません。父の職業を子が継ぎ、それを孫が継ぎ、と繰り返していけば良いので、農民の子は農民、武士の子は武士、という最も安定な形と言えます。この形は逆に社会の変化をくい止める大きな力として働きます。日本でも江

戸時代は大体においてこの型式が守られ、社会が安定していました。別な表現では、構造が秩序立っていて、乱雑が入る隙が無く、そのため社会にさしたる進歩も無かったのです。しかし環境条件の変化に応じて、この型式を保持することは害があって、益のないことが段々と分かって来ました。それを理解出来ないのは日本の国会議員だけです。天皇の位を職業と呼べるかどうか分かりませんが、万世一系が世界に冠たるものだという見当違いの自慢もあります。それが議員諸公の世襲礼賛につながります。

## 1 2. 職業の選択

職業とは別の言い方では、自分のサービスと他人のサービスとの交換ですから、本質的には物資の物々交換との違いはありません。もちろん広い意味のお金に換算することが出来ます。職業選択が成功したというのは、自分が喜んで提供したサービスが高い値段で買って貰えたということです。ここで重要なことを2つ注意しましょう。1つは喜んで、ということで、もう1つは高く、ということです。

若い人が学校を出たり、次の学校に進むときに、この2つを情報として集めなければなりません。喜んでというのは、かなり主観的です。まず自分が何に向いているか、自分が何をしたいのかが分からなければ話になりません。そのためには自我が確立する事が必要です。最近の若い人の中にはこの部分が欠けていて、自分が将来、何をしたいのか分からない人が居ます。それは小さいときから親や先生に、これをしなさい、あれをしてはいけませんと指図されて、それに疑問もなく従ってきたからに違いありません。勉強をするにしても、自分の弱点は自分で判断するのではなく、塾の先生が指摘してくれるのを待っているという有様です。それに慣れてしまうと、何でもが受け身になり、いつでも、どこでも指図を待っているようになります。これが教育の持つ負の面で、昔の職人が弟子に決して教えなかったというのは、良い教育であったわけです。

さてもう一つの要素、高く売れるかどうかですが、ここは乱雑な部分で、何十年も先のことの前測は天気予報よりずっと難しいのです。個人の能力を超えます。しかしいくら当たらないからと言って、誰かが天気予報や経済予測をしなければならぬように、職業予測をする必要があります。その予測は“パソコンがやれば就職に有利ですよ”というような単純なものではありません。もっと定量的なものです。私はそれは政府の仕事だと思います。政府はどこよりも情報を集めており、またそれを解析する人材も揃っているはずですが、当たらなかったからといって責任をとる必要はありません。予測を信用するかどうかは最終的には個人の責任なのですから。

(2012. 10 / 20 最終更新)  
(「ながれだより」 214号 2007. 4/1 に加筆)

## 4 2 2. 政 治

### 4 2 2-1. 政治の始まり

政治と呼んでよいものが、いつ始まったのかはよくわかりません。しかし人類は、集団生活をするのが有利だということ、何となく感じていました。集まれば利益も分け合いますが、不利益なこともあります。どのようにして近代の政治制度が始まったかについては、いろいろな説がありますが、ここに提出するのは一つの考え方です。

#### 1. 言葉と文字

人類の発展の歴史の中で、まず言葉というものが作られた頃のことを考えます。人類の集団では喧嘩と仲直りとの繰り返しです。人々の最大の関心事は、食べることと、子孫を増やすことです。この両方が、なめらかに行われれば、人々は安心して毎日を送れます。文字を中国から輸入するのは、ずっと後のことですが、簡単な言葉は作られていたでしょう。それによって、人々は自分の要求や意見を自由に述べるようになりました。

#### 2. 国の成立

この頃の人類にとって一番の関心事は、いかにして家族の生命を守るかということです。人間が自分の子孫を大事にするということは天性です。それが広がって、一族で家族を守るようになり、最初の親族集団が出来上がりました。この集団は協力して、天災や疫病から一族を守り、結婚によって作られた姻族を守るようになりました。

このような姻族集団が何代にもわたって発展、膨張し、所有地のようなものが、はっきりして、どこそかの誰という住居によって呼ばれるようになりました。外敵の侵入にも、団結して当たるようになりました。村の誕生です。村は、はじめは緩やかな結びつきでしたが、婚姻や外部からの敵の侵入などが元になって、結びつきはだんだんと強くなりました。国の誕生です。国が出来ると、それを外敵から守ることが必要になります。軍隊の誕生です。

#### 3. 指導者

村の人々が日常生活を送る上に、どうしても必要なのは指導者です。敵が攻めてくるときはもちろん、種をまく時期や、刈り取る時期についても、誰かが指導して、適切な指導をして貰いたいのです。そのための指導者が必要になります。指導者は権力を持つようになり、段々と強力なものになります。そして、やがてはそれが支配者となり、国の統一を守ることになります。日本の歴史では、その最初の指導者として、アマテラスを持って来ました。アマテラスの対立者としてスサノオの存在が、権力争いの存在を物語っています。その争いを兄弟喧嘩という、何となく柔らかいものにした手腕はたいしたものです。

#### 4. 世襲

指導者としての王が何となく決まったとして、次の問題点は王が死んだ時、どうするかということでした。一番簡単なのは王の近親者に相続させることですが、複数の子供があったとき、誰が一番適当なのかが分かりません。いわゆる相続争いというものは、歴史上もっとも古い内戦です。日本の歴史では、もっとも古い指導者はアマテラス大御神です。日本書紀は天皇家の世襲について、巧妙なトリックを考え出しました。まず、正当な祖先として、アマテラスという神様を考え出し、その弟としてスサノオを担ぎ出しました。そして、アマテラスとの間に喧嘩をした話を作り、相続の問題をなくしてしまいました。アマテラスの時代にもあったであろう、血生臭い相続争いの話を無邪気な、おとぎ話にしました。古代にも世襲争いの証拠は残っていたのですが、すべてをヒエダノアレの記憶力のせいという巧妙なやり方で乗り切りました。これも見事です。世界中に相続争いが血生臭く残っていますが、このアマテラスの話は傑作の一つです。

(2013. 6/3 最終更新)

## 422-2. 政治

### 0. はしがき

好むと好まざるとにかかわらず、政治は国民の幸福に直接に関係を持ちます。私達は生まれるとすぐ、日本という国の国民になります。このことに疑問を持つ人はありません。しかし落ち着いて考えてみると、国を作っているのは我々国民であって、神さまが作ったものではありません。それでは、我々は何故、何のために日本という国を作っているのでしょうか。教科書的に言えば、国の役割は我々に安全で、快適な生活を保障することです。それがやって貰えないのなら、国を作る必要はありません。ここでの議論は具体的な政策に関するものではなくて、政治を行うための制度についての基本的な考察です。それもほとんど国内の問題に限ります。

### 1. 民主主義政治の体制

イギリスで生まれ、世界中に広まった、普通選挙、代議制、政党政治は世界中のどこにでも通用する理想的な政治体制とされています。しかし本当にそうでしょうか。地域的には、世界中の人々のものの考え方は色々であり、歴史的には、この古い制度は技術の進歩に追いつきません。例えば政治についてのある情報が国中に伝わるのが、昔は何日も、場合によっては何ヶ月もかかりましたが、今では一瞬のうちに何でも分かります。政治というものは情報操作に頼っていますから、この変化は重大です。よその国のことはよく分かりませんが、我国に関する限り、現在の、いわゆる民主主義体制が最善のものとは思えない点がいろいろとあります。

まず三権の分立です。私は司法、立法、行政が対立して、互いに牽制し、影響し合いながら政治が進められていくという理想に賛成です。これは乱雑な関係で、望ましいのですが、現実にはそうはなっていません。今の日本では、国会で多数を押えた政党が三つの権力を独占するという非常に堅い、独裁的な制度になっています。選挙で多数を制した政党は当然のこととして立法権を握ります。そして議員内閣制と称して、この政党に属する議員が、行政府の大臣のほとんどの椅子を占めてしまいます。また最高裁判所の判事を含む司法の幹部もすべて多数党による任命で、国民には参加の権利がありません。これではどんな法律も作り放題、どんな行政もやりたい放題です。多数政党の党首は立法、行政の両方にわたって全権を握ります。この日本の制度は、大統領と議会が対立することもある、アメリカのやり方よりもずっと激しい権力の集中です。議員内閣制はイギリスでは円滑に運営されているのかも知れませんが、日本には向きません。例えば立法府の総理大臣から提出された法律案が議会で否決されることは殆どありません。それは党議拘束というものがあるからで、与党の議員は個人の意見とは無関係に、党が賛成している法律案には賛成をしなければならないからです。これでは議員はまるで鉛の人形です。行政府と立法府が対立するという理想的な図式は成り立っていません。

その原因の一つは、日本の国会では実質のある討論が行われないことです。大体日本人は冷静に、論理的に討議をする能力と訓練に欠けています。国会のやりとりを聞いていても、がっかりするだけです。野党からの際どい質問に対して、答える大臣は、いわゆる“顧みて他を言う”態度に徹しています。議論はかみ合わず、ただ空しく時間が経ちます。議論などよりも、裏取引で話が決まってしまうのです。

### 2. 政党の解体

政党は不可思議な存在です。政党を作るのは、志を同じくする議員が集まることによって勢力を拡張、共通の主張の実現に協力するという、表面上はもっともな趣旨ですが、これだけ社会が複雑で、乱雑になった現在、色々な政治課題について全く同じ意見を持つ議員が200人も300人もまとまって存在するというのは全くの虚構です。民主政治は政党政治だ、という議論があって、政党抜きでは政治は出来ないと思っている人達があります。そのために政党は必要以上に優遇されています。例えば政党に対して、選挙で金がかかるだろうからといって国の予算から助成金を出すのには反対です。政党が無くても民主政治はやれます。

政党と党員の関係については、基本的な矛盾があります。前回の選挙で、政党からマニフェストが出されました。しかし個々の候補者がこのマニフェストに100パーセント賛成ならば、選挙の時の候補者の個人的な意見の開陳はどんな意味があるのでしょうか。もしある政党の候補者個人としてはマニフェストとは別な意見を持っているなら、そのマニフェストを掲げることは背信行為です。この理論的矛盾を指摘する評論家は、ほとんどありません。選挙民にしても、候補者個人に投票するのか、政党に投票するのかで迷います。どちらに

しても投票する有権者は、だまされているのです。当選した本人にしても、自分個人が選ばれたのか、自分の属する政党が選ばれたのか分かりません。選挙では候補者個人に投票すると決めてしまう方が、ずっとすっきりします。

要するに、政党という矛盾だらけの存在は速やかに解体さるべきなのです。優秀な政治家は自分の主張を曲げて政党に属しているよりも、無所属となって個人の責任で議論をして、賛成、不賛成の旗幟を明らかにすればよいのです。

国会が二つあるというのも、立法を不必要に複雑にします。衆議院と参議院で、そっくり同じ選挙によって選ばれた議員が、同じような審議を繰り返しています。全くの時間と税金の無駄使いです。参議院は速やかに廃止すべきです。

### 3. 代議制の虚構

選挙をして議員を選んでいるのだから民主主義だ、という考え方はかなり危なくなっています。まず、選ばれた議員はその選挙区の人々の意見を本当に代表するのでしょうか。ある候補者なり、政党なりに投票した人は、その候補者の政策のすべてに賛成しているわけではありません。また落選した人に投票した人々の意志は完全に無視されています。いわゆる死に票です。このことは小選挙区制になって、ますます激しくなりました。

一方で、いろいろな選挙の投票率は確実に下がっています。それを国民が政治に関心を持たないからだ、と言う人もありますが、それがすべてではありません。選ばれるに値する候補者がいないというのも、有力な理由です。自分の選挙区に、自分に気に入った候補者がいないのに、何故投票しなくてはならないのでしょうか。棄権という意思表示を無視してはなりません。棄権率が大きい選挙の結果は無効にすべきです。

国民は3年か4年に一回の総選挙の時には、意見のある程度表明出来ます。しかし選挙が終わると、何の発言権もありません。これは、世の中がゆっくりと流れていたときにはよかったです。最近のように社会の変化が激しい時代には代議制は不完全な制度です。もっと頻繁に国民の声を政治に反映しなければ、民主主義とは言えません。

そこで正規の投票以外の方法で民意を聞く必要があります。ある程度有効なのは街頭デモです。それが何万人という規模になれば、政府も議会もそれを無視することは出来ません。これは乱雑な、自発的な民意の反映ですが、あるデモが国民大多数の要求であるという客観的な証拠がありません。

### 4. 二院制

敗戦に続いて改正された憲法の中で、最大の失敗は、民意の表現としての国会を二院制にしたことでした。ヨーロッパなどの主要国は二院制をとっていることと、戦前の貴族院の伝統を引いて、国会が一つしかないのは寂しい、という心理から、何となく作られたのが参議院でした。どのように議員を選ぶかが問題になりましたが、何となく、衆議院に準じるような形、はっきり言えば、衆議院と殆ど変わらないものになりました。即ち、誰でも立候補出来て、同じような選挙運動が出来るのです。こうなると、参議院の存在理由はいつも問われることになります。よその国にある上院の選挙あるいは任命手続きは、下院とは違っていることが普通で、下院と全く同じ制度なら、何のために上院があるのか解りません。果たせるかな、衆議院で過半数を制した政党も参議院では第2党に転落するという、いわゆる“ねじれ現象”が屢々出現して、政治の進行を妨げました。衆議院で賛成を得た法案が参議院で拒否されるという現象を、我々はどうのように理解すれば良いのでしょうか。また、衆議院で見逃された法案の不備が、参議院で修正されたという事例もあります。ただ、ねじれを解消するために、法案の何でも良い部分を変えるというのが精々です。この“ねじれている”国会の意見をどう解釈すればよいのでしょうか。全く馬鹿げています。

参議院は明らかに、憲法を作った人々の失敗です。戦前の貴族院を強く意識し過ぎたのでしょう。戦後の日本には、上院議員の候補になるような階級の人々は居ないのです。

### 5. 国民投票

民意の表明として、確実に効果的なのは国民投票です。地方では、原子力発電所の建設のような、その地方にとって重要な問題について住民投票が行われることがあります。国政ではやられたことがありません。

ここで国民投票のやり方について提案します。国の有権者全員が投票します。これは国会議員の選挙と同じ

ように大変なものと思われるかも知れません。しかし情報処理技術の進んだ現在では、わけのないことです。電話、ファクス、インターネット、Eメールを使い、その出来ない人は常設された投票所を利用すればよいのです。

まず投票の重要性を3つの段階に分けましょう。第1段階は世論調査です。新聞社やテレビ局が世論と称して調査することがありますが、調べられる人の数が極端に少なく、とても国民全体を代表しているとは言えません。性別、地域性、年齢層、職業などを考えると、1000人程度の無作為抽出は、ほとんど無意味だけでなく、時には有害なことさえあります。もっと客観的な、組織化された調査でなければなりません。この第1段階の投票は国民の意見を、正確に行政府と立法府に伝える為のもので、意見を持つ国民全体に投票権があります。ある政治課題についての適当な質問に対して、投票します。二重投票を防ぐための自己証明は運転免許証やら、住民登録票などでよいでしょう。投票しない人は意見の表明をしたくない人ですから、放っておきます。投票された結果は集計されて、行政の進め方の参考にされ、また立法府に提出された議案の票決に影響します。しかしこの結果は議員による票決を束縛するものではありません。

第2段階はもう少し強力です。投票のやり方はあまり変わりませんが、政府による政策や、国会での議決に対して強制力を持ちます。国民投票の結果を国会での票数に換算するのです。これによって少数議員の主張が成立するチャンスがあります。

第3段階は最強力で、政府の決定や、国会の議決を乗り越えます。現在ではこの種の国民投票は憲法の改定に対してだけ想定されていますが、これを拡張して、重要な案件については国民投票を義務付けます。例えば国会で賛成議決をしても、国民投票の2/3以上が反対したら、その議決を無効とします。この段階では国会の多数派と国民との直接対決の形になります。宣伝のための準備期間と、慎重な投票管理が必要でしょう。

考えられる国民投票の数は、さしあたり、年間で、第1段階が10-20、第2段階が5くらい、第3段階が2-3くらいが適当でしょう。

## 6. 政治家と官僚

行政府は大臣という政治家と、その下にある官僚によって運営されています。人によっては大臣は人形で、実力を握るのは官僚だと言います。そして政治家がもっとしっかりして、官僚を押さえ、彼らのやりたい放題を止めなければならないという議論があります。この問題は私の世界観によると、大臣は乱雑派で、官僚は秩序派です。例えば大臣は素人ですから、昔からのいきさつも知らないで、それとは無関係な考えを持ち出します。それは無茶なものかも知れませんが、面白い変化をもたらす可能性もあります。それに対して官僚は原則としては前例主義で、前例がありません、という強力な秩序維持派です。理想的な形は両方の健全な対立です。この対立は喧嘩とは全く違います。日本人は対立は悪いことだと思いがちです。そしてどちらが勝つかという結末だけに興味があり、押したり、押されたりという状態には何となく落ち着きません。官僚が勝つ、いや政治家が勝つと言って、囁くのが好きです。しかし政治家と官僚が勝ったり、負けたりする事によって、適当なところに落ち着く、これが理想的な姿なのです。

## 7. 将来展望

現在のスタイルの民主政治は、限りなく未来まで続くものではありません。ここで、政治のあるべき姿を述べてみましょう。

まず立法と行政の健全な対立のために首相の直接選挙を行います。国民は行政府の長として最適な人を首相として直接に選ぶのです。当選した首相は立法府とは独立に、広く人材を求めて、大臣を選任します。乱雑を重んじる大臣は、秩序的な官僚と対立しながら行政を進めます。行政府は、必要と思われる法律の成立を立法府に注文します。

立法を担当するのは国民の選挙によって選ばれた国会議員です。行政府からの注文に応じるかどうかは、乱雑な個人の議員から成り立っている立法府の判断です。何でもかでも賛成することはありません。

国民は立法と行政の双方に、国民投票によって直接に意見を述べ、また時には立法や行政を強制することが出来ます。これは乱雑部分です。将来はこの部分の力がどんどんと大きくなるべきでしょう。

司法のことは後に回しますが、政治についてはこの立法府、行政府、国民という3つの健全な対立が、本当の意味での民主主義の実践と言えるでしょう。

## 422-3. 司法

### 0. はじめに

国の三権の内、今回は司法についてです。人は一人では生きていけないことを悟って、社会を作ります。その中で、しきたりや分業がうまく働くと、人々はその社会を大きくして国を作ります。国が作られると法律が必要になります。これは国の中で、泥棒とか、人殺しとか、土地の奪い合いとかの紛争が起きたとき、白黒、正邪をはっきりするための基準です。私は法律には疎遠ですが、それが却って現在の常識や慣行にとらわれない、新しい提案を可能にします。

### 1. 法律の起源

人間の作っている社会では、その構成員の行動に何らかの制限を加える必要があります。しかし、人の物を盗んだり、人の命を取ったりしてはならない、それをする人は重い罰を受ける、と宣言出来るのは誰でしょうか。それは神様しかありません。有名なのはモーセの十戒です。知恵者のモーセは、エジプトから逃げて来たユダヤ人の社会が犯罪の続発で危うくなったのを救うために、神様を引合いに出して、この十戒を守らなければ神様のひどい罰を受けるぞ、と人々を脅迫しました。これで、神様は専ら悪いことをした人に罰を与えるだけの存在となってしまいました。そして、その呪縛は“神は愛なり”とイエスキリストが宣言するまで解けませんでした。

### 2. 犯罪と警察

石川五右衛門に言われるまでもなく、世の中から犯罪が無くなることはありません。これは人間が欲望を持っていることの当然の帰結です。我々が作っている社会が秩序だけで成り立っていることが理想のように見えますが、必ず犯罪という乱雑部分が存在します。昔から悪いことをした人を捕まえる組織はありました。戦前には日本の警察は世界一流で、家を留守にしても鍵を掛けない家は珍らしくありませんでした。それに比べて最近の警察はどうでしょうか。犯罪の検挙率はどんどん下がる一方です。警官の数が足りないからだ、と言われますが、私の見る所では、量よりも質の問題です。凶悪犯罪の犯人を捕まえることは刑事の仕事ですが、刑事も何となく易しい仕事にだけ熱心なような感じを受けます。殆ど解決したような事件を一生懸命に調べています。ニュースを見ていて、そんなことは程々にして、殺人事件を追っかけたらどうだ、と叫びたくなることは少なくありません。

最近の検挙率の低下は警察と地域住民との関係が悪くなったことに深く関係しています。人々は昔ほど積極的に警察に協力しないのです。これにはマスコミも大きな影響を持っています。マスコミは警察の不祥事を事細かに報道しますが、警察が人々に役立っていることはあまり報道しないのです。これは公平とは言えません。

### 3. 裁判の進め方

現在の先進国では、刑事事件の裁判の進め方は、ほぼ一定しています。即ち原告と被告、検事と弁護人の対決です。判事は両方の言い分を聞いて有罪か無罪かを判定し、判決を下します。審判は複数の裁判所で行われ、第三審の最高裁判所が最終の判決を与えます。この様な制度が、どのような理論的な基礎の上に成り立つのかについては、色々な論争があるようですが、裁判にも過誤という乱雑な部分がある事を認めて、それを出来るだけ避けるためのものでしょう。悪くないやり方です。

裁判の進め方で、私のような素人が納得出来ないのは、公判の冒頭で、被告に有罪か、無罪かを問い、原則としては無罪と答えるのを当然としていることです。被告本人が悪いことをした、と心の中では罪を認めてい

ても、罪を出来るだけ軽くするために、弁護士に説得されて、“無罪”と答えることはしばしばあります。これが引っかけります。罪を犯すことはある程度仕方がない、しかし自分でそれを認めて悔い改めるなら罪も許される、というのが洋の東西を問わず神の教えです。しかし敬虔なクリスチャンまでもが、平然と無罪を主張します。自動車で事故を起こしたとき、自分が悪いと分かっているにもかかわらず決して謝ってはならない、裁判で不利になる、とアメリカで教えられました。私はここに西洋のいわゆる合理主義の欺瞞性を見ます。人間の本性に反していることが正当化されているのです。悪かった、と自分の方から認める人の罪は軽くしなければなりません。それがかえって重くなるなどというのは呆れた話です。

裁判について誰でもが言う事は、時間がかかり過ぎることです。裁判所はこれを良いこととは思っていないようですが、抜本的な解決策が提案されたことはありません。“裁判なら3年、暴力団なら3日”という言葉があります、これは家賃を払わないで逃げた人から家賃を取り立てるのにかかる時間です。これで法治国家などと威張れるのでしょうか。裁判が長引くのは裁判官の数が足りないのが原因だと言われますが、もしそうなら、裁判官の方から人員増の年次計画を公表すべきです。それがもっともなものであれば、国民は喜んで賛成するでしょう。

日本で裁判について新しい試みが始まりました。裁判員の制度です。これはヨーロッパやアメリカでは珍しくはないのですが、日本では画期的なことです。プロの裁判官と国民から選ばれたアマの裁判員が一緒になって評決を行うというのです。私はこの制度に賛成です。六法全書でこり固まっている職業裁判官は、秩序の代表です。これに対して、民間の裁判員は法律のことをあまり知らないのですが、庶民の考え方を代表します。それは人によって違いますから乱雑で、その両方が対立するという、私にとっては理想的な形になっています。ただ心配なのは、平均的な日本人は自分の考えをしっかりと持っていないことです。また違った意見の他人と冷静に議論するという訓練にも欠けています。マスコミに強い影響を受けたり、理性よりも感情に流されたり、または会議でよくある、“皆さんが良いのなら私も結構です”という無責任なことになる恐れがあります。しかしこの制度が、逆に理性的な討論の訓練になる可能性もあります。この制度の健全な成熟を希望します。

#### 4. 判決への疑問

判決には死刑、懲役、禁固、罰金などがありますが、理解出来ないのは、屢々執行猶予というものが与えられることです。有罪であることを確認し、それに応じた刑を与えた後で、刑の執行を猶予し、猶予期間が無事に過ぎれば、刑は実行されないという奇妙なやり方が慣行になっています。その理論的根拠はどこにあるのでしょうか。与えた量刑が重すぎるからというのなら、裁判官が自らの過ちを認めている事になります。初犯だから手を緩めるのが適切と思うなら、何故軽い量刑をしないのですか。私にはこの慣行は馬鹿げているとしか思えません。

これに関連があるかどうか分かりませんが、刑事事件に時効という理解しがたいものがあります。たとえ犯罪を犯しても、ある時間が経過した後ではそれを罰しない、というのです。時間の経過が犯人に懲罰を与えているという考え方はあり得ますが、それなら、例えば時効の半分が経過してから逮捕された人にはそれなりの減刑があつてしかるべきではありませんか。理論的な説明の出来ない時効などは止めてしまうべきです。

裁判官も人間ですから判決で過ちを犯すことがあるのは当然です。それを強く非難することは出来ません。この過ちを救うために三審制があるのです。刑事裁判では検察の持っている資料を我々は知るべくもありませんが、起訴になるかどうかというとき、常識とやや違った結果になる事は珍しくありません。裁判が偏向していると考えることはありませんが、検事も人間であり、公務員ですから、出世を少しも考えない人は少ないでしょう。

民事裁判を経験した人から、裁判所は公平とは言えないという言葉が聞かれます。裁判が自分に不利な結果となれば不平が出るのは人間としては当然ですが、不公平の度合いがそれを超えることもあるようです。もともと裁判官達は文科系の出身で、一つの閉鎖社会に属していて、自分たち以外の社会の色々な事柄、例えば医療過誤、特許係争などには知識も経験もありません。全く畑違いの事案について判断を下しているのです。

一つの例を挙げましょう。ある会社の技術者が新しい製品の開発に成功して、その結果、会社が大きな利益を得たという場合に、その技術者にどれほどの報償が与えられるべきか、という問題です。裁判官は新しい製品の開発をした経験はありません。開発の全行程で多数の人の寄与や、収入に直結する販売の過程がどのように

進行したかの知識も皆無です。会社の得た利益の何パーセントがこの技術者の寄与と推定出来るでしょうか。誰が考えてもひどく難しい問題です。それにも関わらず、あっさりと判決する裁判官は無責任です。社会で発生するどんな係争でも現在の裁判官が判定出来ると思っているとしたら、ひどい思い上がりです。裁判官は社会情勢の変化や、技術の進歩によって判断出来ない事柄に遭遇しているのです。出来もしない判断を勝手にやることは裁判不信を招いて、社会に害毒を流します。

ここで一つの提案があります。それは司法府にしっかりした専門家集団を作ることです。これは裁判官が苦手とする事柄について補佐をする機関です。集団のメンバーは技術の色々な分野や、環境、医療、商業、金融などに分かれていて、それぞれに国内外の最新情報の入った大きなデータバンクを持っています。そして自分の専門分野については責任を持って裁判官を手伝います。従来の裁判では証人と称して、専門家に依頼して意見を聞いてきました。しかし証人の選定は恣意的であり、証人も無責任になりがちで、本当に実のある情報を獲得することは難しいのが現実です。

病気については医者が診断や処置を間違えた、と告白することもあります。しかし未だかつて裁判官が自分の判決は間違っていた、と発表するのを聞いたことはありません。間違いを認めては沽券にかかわると思っているのですが、正直な人間らしい裁判官がいることが、我々に裁判を身近に感じさせるのです。例えば上級審が下級審とは全く逆の判断を示した時に、下級審の裁判官の責任はどうなるのでしょうか。それは問われないことになっているのですが、これは世間の常識とは全く違っています。その裁判官が、会社の責任者の会社運営の過誤を追求する権利があるとは思えません。

## 5. 憲法裁判

我々が持っている最も重要な裁判は、立法府によって作られた法律が憲法に違反しているかどうかの裁判です。これによって、司法は立法と対抗して影響を与えることが出来るのです。立法の側は乱雑な発想を持っていますから、こうやればいーだろうな、という単純な思いつきのもとに法律を作ります。しかし、作られた法律が憲法に違反しているかどうか、よく分からない場合があります。法律を作るのは立法府の仕事ですから、作ること自体は悪くはありません。乱雑の中から立派な提案があり得ます。しかし裁判所は秩序立った考察をして、それを憲法違反と判定したら、その法律を無効とすべきです。これが健全な対立です。しかし今までにそのようなことがなされた例は殆どありません。

最高裁が憲法違反の判断責任を果たさなかったらどうなるのでしょうか。その最大の例が自衛隊です。憲法には“戦力は保持しない”と、はっきり書いてありますし、国民も憲法が出来たときには、我が国が今のように強力な軍隊を持って外国にまで進出するようになるとは夢にも思いませんでした。それがどうでしょうか。この事実上の軍隊に対して最高裁は全くの類かぶり、内閣が勝手に憲法解釈と称して、戦力をどんどんと増強していくのを座視しています。これはひどい怠慢です。その理由は、今の最高裁判事の大部分が自民党の推薦で任命されたからです。自民党は自衛隊が違憲だと思っているような人物を判事に推挙するわけはありません。三権の分立は完全に踏みにじられているのです。自衛隊のイラク派遣の問題でも、総理大臣が“これは憲法違反ではない”と答弁しています。行政府の長が憲法判断をするとは、とんでもない越権行為です。

総選挙の時の最高裁判事の国民審査が猿芝居だと思わない人は居ません。有権者は判断のしようがないからそのまま投票します。これは実際は棄権です。それを国民が賛成したと見るのは明らかな詐欺です。一つの提案をします。それは裁判官を選挙で選ぶことです。選挙のやり方は国会議員とは違って、国会の各派が候補者を選定します。定員の2-3倍程度の人を選んで、候補者の詳しい経歴を公報に掲載します。選挙運動などは無く、選挙したい人が投票をします。これで政府に反対の人も選ばれる可能性があります。

## 6. むすび

司法は隔離された聖域とされていて、政府攻撃に熱心な人達も司法に文句をつけることは滅多にありません。しかし司法府といえども人間で造られているのですから、決して完全無欠なものではあり得ません。司法に対する批判が、司法府を時代に遅れない、より良いものにするのです。

(2013. 6/2 内容確認)  
(「ながれだより」184号 2004.10/1 掲載)

## 4 2 2 - 4. 天 皇

### 0. はしがき

天皇についての論評は戦前、戦中は、きつい御法度でした。下々の人間が何かを言うことは畏れ多いことで、不敬罪で逮捕される可能性がありました。今ではもっと自由な言論が許されるようになりました。しかし日本人の間には何となく天皇について、ものを言うことを躊躇する雰囲気が漂っています。変なことを言うと右翼に襲われる、と忠告する人も居ます。けれども私には天皇や皇室の現在のあり方が理想的なものとはとても思えません。

### 1. 明治憲法

天皇の権能が明確に成文化されたのは明治23年に公布された、大日本帝国憲法です。その中で、天皇については

第1条 大日本帝国は万世一系の天皇これを統治す。

第3条 天皇は神聖にして侵すべからず。

と書かれています。第1条で天皇の権能は、天皇が日本という国を作った神武天皇の直系の子孫であることに基づくことをはっきりと述べています。第3条の侵すべからず、というのは、よく分からないところがありますが、天皇のなされ方、言われ方に対して、少しでも異議を挟んではならない、と解釈されます。

戦前には天皇が現人神（あらひとがみ）、即ち神様であることを信じていた人は少なくありませんでした。天皇の命令は絶対で、我々は天皇のために生き、天皇のために死ぬのだと教えられました。そして天皇家は万世一系で、3000年近くの間、国民を統治したと言われていました。しかし歴史をひもといてみるまでもなく、天皇が親政した期間はそれほど長くはありません。特に近世では幕府が権力を握って、天皇は形だけのものでした。徳川幕府が倒れて、明治維新で権力がやっと天皇のもとへ還ってきたのでした。

### 2. 戦争責任

若い人には分かりにくいでしょうが、戦争が終わってから間もなく、この戦争を始め、そして戦争に負けた責任者は誰だ、という議論が始まりました。戦争責任の追及です。ここで、はっきりさせなくてはならないのは、この責任には二つあることです。その一つは国内に対するもので、何百万という日本人が死に、何百万坪の国土が焼け野原になったことへの責任です。もう一つは日本軍が進出し、占領をしたり、戦闘をしたことで外国の人を苦しめたことへの責任です。最初は職業軍人がやり玉に上がりました。戦前に、腐りきった政治の改革を実現して歓迎された軍人に対して、今度は手のひらを返すように非難が集中しました。しかし庶民の声だけでは誰の罪が重く、誰は軽いと決め付けることは出来ませんでした。戦争の始まりというものは、物凄く込み入っているからです。そこで別の人達から、“一億総懺悔”という、責任は国民すべてにあるという、いささか怪しげな議論が始まりました。これは際立った犠牲者を出さないような陰謀です。一方で、連合国による極東軍事裁判が始まりました。これは主として、二番目の、外国に対する責任の追及です。勝者による敗者の裁きです。これが理不尽なことは誰の目にも明らかです。しかし人類はその長い歴史の中で、このことを繰り返してきました。負けた石田三成は勝った家康によって斬首されたのです。長い裁判ののち、戦争犯罪が確定して、いわゆる戦犯は絞首刑になり、決着がつきました。しかし明治憲法によって最高の権力者とされた天皇が罪に問われることはありませんでした。宣戦の詔勅に署名した天皇に何のお咎めもなかったのは、歴史の不思議です。最高位にある天皇も実は戦争を始めたり、止めたりする実力がなかった、などと、まことしやかに言いふらす人がいます。絶対の権力者と見える昭和天皇も、本当はお飾りだったと言うのです。もしそれが正しいのであれば、天皇の名のもとで徴兵され、戦線に送られて戦死した人々はどうなるのでしょうか。この何としても理解出来ない分かりにくさをそのままにした日本国民は、怠慢としか言いようがありません。

私は天皇に戦争責任がないとは思いません。確かに取り巻きの人々によって間違った方向へ導かれたかも知れませんが、判断力のない子供ではないのですから、天皇も責任の一端は負うべきでしょう。もっと具体的に言えば、例えば戦争を避けるための最大要件である、大陸からの軍の撤退を命令出来るのは、天皇以外にはありませんでした。天皇が御前会議などで、どんなことがあっても米英との戦争はやらないと宣言すれば、それ

を押し切って戦争を始めることは出来ませんでした。天皇が無能力者であったというのは天皇に対する最大の侮辱です。私は最小限の責任の取り方として、昭和天皇は適当な時期に自発的に退位をすべきだったと思います。それをしなかった本人と、させなかった内閣や宮内省の人々の責任は糾弾されるべきです。

天皇の戦争責任についてのこの曖昧な姿勢が、今日の中国、韓国の反日感情の基になっていると私は睨んでいます。ドイツが戦争の全責任をヒトラーに負わせたのに対して、日本では東京裁判で絞首刑になった人達は天皇の命令に従っただけではないか、という考え方が国民の中に強固に残っています。それが靖国参拝を正当化しているのです。

### 3. 人間宣言

終戦後のある日に天皇がマッカーサーを訪問して、戦争のすべての責任は自分にある、と言ったとか、言わなかったとか取り沙汰されています。マッカーサーはそれに感動して、天皇に戦争責任は無い、と言ったことになっています。しかしこの話は眉唾です。裁判で自分を有罪と認めた被告が無罪になることなどはありません。これは日本人の浪花節的な心情につけ込んだ作り話です。それに関係した一つの裏話があります。

私の古い友人に重光胖（しげみつ ゆたか）という人がいます。一緒に乱流を研究していました。彼は敗戦後に降伏文書に調印した重光葵（まもる）外務大臣の甥です。彼がおじさんから聞いた話です。日本に乗り込んで来たマッカーサー将軍は、最初は彼の命令による日本の直接統治を計画していて、重光外相に意見を聞きました。重光さんは、それも良いが、そうなる日本で暴動などの不祥事が起きると、それらはすべてが将軍の責任になります、それでもいいのですか、と言いました。この言葉にマッカーサーは恐れをなして、大まかな指令を出して、それを日本政府に実行させるという間接統治の形にしました。そして、すべての責任を日本政府に負わせることにしたのだそうです。その為天皇を温存して利用することにしたのです。

戦争が終わってから昭和天皇は国民に向かって有名な“人間宣言”を出しました。自分はただの人間であって、神などではない、という宣言です。明治憲法に代わる新しい憲法を作るとき、アメリカ軍を中心とするGHQ（最高司令部）は天皇の処遇について色々迷いました。日本に民主主義を与える以上、最も簡単なのは厳格な主権在民を打ち出して、天皇を無くしてしまうことです。しかし連合国がポツダム宣言で日本の降伏を要求したときに、日本政府が最後まで粘ったのは、国体の護持、即ち天皇制の継続でした。結局、降伏は無条件だということに落ち着き、連合国は何でも出来ることになりました。しかし国民の強い希望に反して、無理矢理に天皇制を壊してしまうと、国民は激しい恨みを抱いてしまうでしょう。これはとんでもない騒動の原因になりかねません。そうなったらアメリカ軍もひどい損害を受け、占領政治はめっちゃめっちゃになってしまいます。かと言って従来通りの天皇制にしておいては、本当の意味の民主主義とはいえません。烈しい議論の末、最後は国王のいるイギリスも民主主義の国とされているではないか、という主張が通って、最小限の天皇を残すことになりました。

### 4. 象徴天皇

日本人は現在の天皇の地位や役割について十分に理解していないようです。例えば天皇制という言葉が安易に使われます。“共産党が政権を握ったら天皇制は無くなってしまおうだろう”といったあんばいです。今の民主主義政治の時代に天皇制などという制度はありません。天皇の権限は一般の国民が考えているよりずっと制限されているのです。それは我が国が主権在民の原則を守っているからです。天皇は内閣や国会の指図に無条件に従いますし、逆に、承認の無い行為をすることは出来ません。

天皇については戦後の憲法の中で“国民統合の象徴”と定義されています。そして天皇の仕事として、いくつかの“国事”が挙げられています。どれも政治権力とは関係の無い形式的なものばかりで、あってもなくてもいい、三流の役者でも演じることの出来るものばかりです。天皇に思慮や判断は全く要請されていないのです。新しい憲法に天皇をどのようににはめ込むかについて、GHQはかなり苦慮しました。そしてどこかの知恵者が、この象徴という言葉を発明したのです。この言葉については、憲法が出来たときに色々な議論がありました。というのは、これは明治憲法の“天皇は神聖にして犯すべからず”というのに比べて、いかにも軽すぎるからです。憲法学者の議論は議論として、この言葉が国民に分かりにくい事だけは事実です。ただGHQは天皇を無条件に賛美することは許しませんでした。そしてまだまだ人気の高い天皇に実質的な権限を与えることを慎重に避けました。しかし正直に言えば、私は天皇が気の毒でたまりません。現在の天皇も自分が天皇で

あることをエンジョイしているとは到底思えないからです。天皇には自由というものが全くありません。いわゆる国事は政府からの命令です。例えば大臣が交替すると、認証式が宮中で行われますが、それが深夜になることもあります。しかし、天皇には“今日は疲れたから明日にしてくれ”という自由はないのです。このことは昔、強力な幕府が天皇の一举手一投足を縛り付けた状態にそっくりです。天皇の自由や人権は完全に無視されています。

今の天皇は従順なので、政府に反対されることはないようです。しかしいつか個性の強い天皇が現れて、だだをこねたらどうなるのでしょうか。政府と天皇の対立です。これこそ日本の歴史の中で頻繁に見られる、幕府と天皇の戦いに他なりません。例えば外国の要人を迎えた宮中の晩餐会で、天皇が政府の考えと正反対の発言をされたらどうなるのでしょうか。マスコミは無責任に“皇室外交”などという言葉を使いますが、本当に天皇による外交が具体化したときのことを考えると背筋が寒くなります。天皇の発言が不適切だからと言って、それを政府が訂正することはひどい不名誉ですし、天皇に罰を与えることも出来ません。現在の憲法では天皇はこれをする、あれをする、と決められています、それをしなかったらどうなるということは決められていません。不都合な天皇だからといって、退位を強制することは考えられません。国民が黙っていないでしょう。

天皇は自由な新聞記者会見を開くことは出来ません。考えを国民に伝えることは出来ないのです。庶民に与えられている自由な言論は天皇からは奪われています。歌舞伎を見に行ったり、銀座を散歩することも考えられません。軟禁状態です。しかも、もっとも悪いことに、天皇はこれをしてはならないということが明文化されていないことです。はっきり言えば天皇は象徴どころか、無権利のロボットです。皇室にかぶせられた、この怪しげな不条理な行動規制が、皇太子妃、雅子さんの神経衰弱の原因であることは確かです。

## 5. 将来像

もし本当に天皇を大切に思うなら今の状態を放っておくことは出来ないはずですが。正月や誕生日に宮城の中に入って日の丸を振るだけが能ではありません。

私の大胆な提案を紹介します。基本的に私は天皇には極端な善意も、敵意も持ってはいません。中立です。しかし今の人権を無視した、いじめ状態にも、天皇が反乱を起こす可能性にも我慢出来ません。一方では、天皇家は長い間続いた名家として、日本にとって歴史的に貴重な存在です。それを壊してはなりません。

天皇をもっと国民に親しいものにします。市中の散歩や、国民との話し合いの機会を多くします。そのために形式的だけで、何の実効もない天皇の“国事”のほとんどをやめてしまいます。議会の開会式だの、大臣の認証だの、勲章の授与などです。その中には憲法で決められたものもありますが、適当に省略すればよいでしょう。伝統の色々な宮中行事は、国民の宝として出来るだけ保持していただきます。そして暇な時間に好きな研究をして頂きます。生物学でも、考古学でも、数学でも、何でも構いません。必要な研究費を差上げます。皇居で面白い実験が行われているという話題は、ほほえましいではありませんか。

もう一つ、今の宮城はいかにも広すぎます。一部を公園や道路にします。あるいは東京から京都の御所に移って頂くのも良いでしょう。騒々しい東京よりも、古くて良いものの残っている京都の方がずっと天皇に似合います。要するに天皇家は歴史の古い家として保存し、天皇や皇族方には政治から遠く離れた立場で、悠々と生活をして頂くのです。憲法を改正して、天皇を国家元首にしようなどという鼻唄（ひいき）の引き倒しのような危険な考えには、私は真っ向から反対です。

(2011. 8/23 最終更新)

(「ながれだより」195号 2005.9/1を修正)

## 422-5. 外交

人が一人では生きていられないのと同様に、国も孤立していることは非常に不利です。自分の国で生産されたものやサービスを外国で作られたものと交換することによって、国民の暮らしを豊かにすることが出来るからです。

## 1. 国際競争

人の心の中には何とかして他人に勝ちたいという欲求があります。これは人間だけでなく、動物全体を支配する本能です。雄と雄が戦うのは自分と同じ遺伝子を持った子孫を殖やそうとしているのだ、という込み入った解釈もありますが、他人に負けたくないという素朴な本能と考える方が自然でしょう。最初は素朴な肉体的な争いですが、段々と複雑になり、知能的な争いとなります。さらに個人の争いではなくて、組織を作った対抗になります。最後には国と国の戦争にまで発展することもあります。

この競争は、一方では努力を強制するので、発展のもとになります。

## 2. 外交

政治は国内だけで行われるものではありません。外国とのつき合いは日本人の最も不得手とするところです。それには色々な原因があります。一番本質的なのは、やはり国民が論理的な思考と、秩序の立った議論が出来ないことです。その意味で日本人の発言は乱雑です。感情が先に立ったり、馬鹿にされはしないかという恐怖感があります。日本人同士はそのようなやりとりで十分に意味が通じるのですが、相手が外国人ではそうはいきません。外交は専門家のすることだという考え方もありますが、外交官は日本人の平均的な考え方を代表するだけです。その一つの例が北朝鮮との拉致の問題です。日本の圧倒的な世論は、北朝鮮はひどい、拉致問題を解決しろと怒鳴るばかりで、外交の常道である、何を強く押し、何を少し譲るかというやり方を全く理解出来ません。それをやろうとすると、日本の外交は弱腰だという合唱です。これでは拉致問題は完全な氷結です。

日本の外交で一番やりやすいのはアメリカに追随することです。これは思考の停止で、完全な秩序思考です。しかし“長いものには巻かれる”という格言は私の世界観には合いません。外交はもっと乱雑に、総合的には損をしないように進めなければなりません。外交を進めるときに、国益という言葉が屢々使われますが、国益の客観的な定義はありません。

## 3. 国際連合

国際連合というものが日本ではひどくもてはやされることがあります。アメリカにべったりを嫌う人も国連で決まったのなら従うと言います。しかしそれで問題は無いのでしょうか。国連は世界中の国の利害のからみ合うところです。国連で決まったことが金科玉条になって、思考を止めてはなりません。これならアメリカ追従と、さして違いはありません。

## 4. 貿易

外交は政治的なやりとりですが、お金や、物資の行き来が貿易です。世界の国々はみんな、沢山輸出したい、出来るだけ輸入したくないと思って、努力します。それが当然の努力です。世界のどこでも通用する外貨を貯めておけば、いつでも国家危急の時、必要なものを買取ることが出来るからです。

## 5. 戦争

自分の意志を通すために、殺人を敢えてするのが戦争です。世界中でどこの民族でも、宗教でも、人殺しを容認することはありません。

(2013. 6/2 最終更新)

# 4 2 2 - 6. 憲法論争 1

## 0. はしがき

自由民主党は昨秋<sup>2)</sup>に獲得した絶対多数を恃(たの)んで、憲法の改変を企んでいます。去年暮れには改変の素案も発表されました。この改変には賛成と反対があります。私はどちらかと言えば反対の方ですが、ここでは中立な立場に立って考えてみます。

憲法は大切なものですが、絶対に変えてはならぬというものではありません。社会の移り変わりにつれて、変っていくのは当然でしょう。今の憲法は成立してから60年も経っているのですから、ある程度改変しても、早すぎるとは言えません。ここでは、今の憲法をより良いものにするにはどうするべきか、を考えてみます。今回は憲法周辺の色々な問題を挙げて議論します。具体的な憲法そのものの内容については次回で提案します。

## 1. 憲法の権威

まず、この国で憲法がどれほど大切にされているかを考えます。憲法が良い、悪いに拘わらず、それが守られているか、ということです。一番良い例は軍備です。言うまでもなく、現在の憲法は、我が国が軍隊を持つことをはっきりと禁じています。しかし現状は世界の中でも10本の指に、いや、ひょっとすると、5本の指に入るほどの強力な軍備を持っています。あれは軍隊ではない、自衛隊だという言い訳が、いかに空々しいものかは、世界中の誰でもが知っています。日本には軍備を持たないという憲法があるというのは嘘だろう、と思っている外国人が少なくありません。これが日本人が嘘つきだという評判のもとになっています。誰が見ても、憲法の建前と、現実の軍備とは並び立ちません。この食い違いの根本原因は、日本には憲法が守られているかどうかの厳しい判断がないからです。ある法律が憲法違反かどうかを判断する仕事は、主として最高裁判所に委ねられているのですが、それが機能しないのです。世界には憲法裁判所と銘打った司法府の機関を持つ国がありますが、日本では自衛隊の問題について、違憲かどうかを裁判所で真剣に議論されたということは聞きません。それには無理からぬところがあります。最高裁判所の判事は政権を持つ自民党の推薦で、議会の多数決で承認されて任命されるのですから、軍備増強を推し進める自民党にたて突くような人物が任命されることは、絶対にありません。国政選挙の時に行われる、判事の国民審査が完全に形骸化していることは誰でも知っています。その意味では司法の独立などというものは無いのです。今の憲法を作ったときに、現在のような強力な軍備を持つようになると想像した人は、一人もありません。この有様では新しい憲法を作っても、それが守られる保証はありません。いわゆる解釈とやらで、どんどんと歪められるでしょう。こうなると、憲法改変の議論そのものが空しくなります。

## 2. 憲法遵守の保証

それではどうすればいいのでしょうか。私の提案はまず、我が国にも憲法裁判所を作ることです。現在でも政府にも、議会にも法制局があって、ある法律案が憲法に違反していないかどうかをチェックしていますが、これは行政府と立法府に属している、ただの意見具申機関であって、強制力は持ちません。必要なのは、行政府と立法府から独立した憲法裁判所なのです。司法府としては、ある法律が議会で成立したときに、訴えを待たないで、自主的に、それが合憲か違憲かを判断し、違憲と判定されたら、その法律の施行を無効とする権限を与えます。憲法の遵守はそれぐらい重大なものなのです。

ここで、この憲法裁判所の判事をどのように選ぶかという重大な問題が起きます。今のやり方は全然駄目です。私の案は、判事、検事、弁護士などの法律の専門家に適当な選挙権を与えて、立候補、または互選で、行政府、立法府の影響の入らない選挙をして選ぶのです。これでこそ、この判事達が本当に国民の意見を代表することになります。議会で成立する法律の数は多いのですから、あまり小さいものについては程々に省略しても良いでしょう。もし新しく裁判所を作るのがひどく大変ならば、現在の最高裁判所に、はっきりと違憲審査を義務付け、判事の選び方を変えなければなりません。

## 3. 国際関係

今の憲法には国際関係が適当に取り入れられていません。国際関係は憲法が作られた頃と今ではすっかり変わりました。我が国では国際連合がひどく大事にされて、憲法に合わなくても、国民が不満に思っても、国際連合で決まったのだからという理由で、法律が無理矢理に作られることがあります。現在の国際連合はそもそも

---

編者注<sup>2)</sup> 本稿の初稿執筆は2006年8月であり、「昨秋」とは、2005年秋を指す。

も60年前の戦争の結果として作られたものです。日本やドイツは戦敗国として冷遇されていて、戦勝国は安保理で常任理事国として拒否権を持っています。この不均等は簡単には解消されそうにもないことは、ご存知の通りです。どの国も自分が獲得した特権を手放したくはないのです。ご存知のように、日本の懸命の努力も何の結果も生みませんでした。それとは別に、中国やインドのように人口の多い国が、人口がその1%にも満たない国と、総会で同じ一票しか与えられていないのも不公平です。しかし、この点の改善もいつまで経っても、望むべくもありません。要するに各国の利害が錯綜する中で理想的な国際機関を作る事は不可能なのです。我が国はこのように不平等な国連から一步退いた態度を取るべきです。即ち、国連の決議に対しても独自の判断と態度をとるべきだ、ということです。

国際問題についての第一歩は、各国は自分の国の中の紛争は独力で処理するという原則を確立すべきです。国内で激しい対立が起きても、内戦が始まっても、よその国はそれに巻き込まれてはならないのです。いくら国連の決議でも、聞いたこともないような国に軍隊を送ってはいけません。それが他国の干渉を招いて、国内問題解決の自主的な努力を駄目にします。このことは明治維新の時の日本を考えれば分かります。あのときは、日本国内は内戦状態でした。戊辰戦争です。国内は大きく乱れ、イギリスやフランスなどは官軍と幕府軍のどちらかを助けて、利権を獲得しようとしていましたが、日本人はそれに乗らず、自分たちだけで内戦を克服して、立派な独立国を作りました。

しかしここで強調したいのは、人道援助は積極的に行うべきだということです。食べ物が無かったり、薬が足りない時には余裕のある国が助けの手をさしのべるのは当然の義務です。日本もそれを惜しんではなりません。日本の外交下手には定評がありますが、日本人は相手を敵か味方かに簡単に割り切って、それに応じたやり方しか出来ない不器用な人達なのです。もっと広い気持で外国と付き合いしていくことが必要です。このことは隣国である韓国や、中国にも当てはまります。仲良くしなければいけないのに、靖国参拝などで無用の刺激を与えています。“自分がやりたいからやるんだ、文句を言うな。”では、外交とは言えません。お互いに我慢をし合うのが仲良くやっていく基本なのです。

#### 4. アメリカ

ここでどうしてもアメリカと日本との関係をはっきりする必要があります。一般の日本人の持つ感触は、アメリカは日本の同盟国であって、アメリカ軍は日本を守ってくれるために日本に駐留しているのだというものです。しかし、そのような素朴な解釈は全くの間違いです。日本を守るためにアメリカ青年の血を惜しげなく流してくれるわけではありません。アメリカは世界戦略の一環として日本にある基地を利用しているのです。このことは、今回のアメリカ軍の再編成計画でも、はっきりと現れています。

今のところアメリカはイラクを持てあまして、余力がありません。しかしイラクが何とか片づく、と、また新しい戦争を始めたくなるでしょう。今度も相手はアラブの国です。イランが有力な候補です。イスラムに対するアメリカの敵意は決して無くなりません。

もう一つのトラブルのものは中国です。アメリカの対中貿易赤字はまだ増えるでしょう。為替の不平等、圧倒的な安売り、品質の向上と、中国の競争力は強まるばかりです。貿易摩擦は弱まることは決してありません。アメリカのいら立ち、いつかは頂点に達します。中国の近海で何かの突発事故が起き、軍事的な小競り合いが始まる可能性が大きいのです。全面的な戦争に拡大することはないでしょうが、アメリカが中国を攻めると、中国は日本にあるアメリカ軍の基地をミサイル攻撃するでしょう。アメリカの前線基地だからです。その何発かは基地の外に着弾して日本人を殺すことになるでしょう。このとき日本人や日本政府はどのような態度を取ればいいのでしょうか。アメリカと一体となって、中国を攻めるのでしょうか。そんなことをすれば犠牲者は増えるばかりです。その時になって、どうしてこんな事になったのかと悔やんでも、追いつきません。安易に基地を提供している当然の報いです。

私の意見は、出来るだけ早くアメリカ軍に日本から撤退して貰うことです。誰が考えても、外国の軍隊が60年もの長い間、独立国の日本に駐留していることは異常です。日本はアメリカの属国ではないのです。もし外国から侵略される可能性が出て来たら、自分で力を尽くして戦うのか、自主的に降伏するか、が常道でしょう。犠牲を払って最後まで守ってくれるとは思えないアメリカ軍に、いつまでも頼っていると、とんでもないことになりかねないのです。

## 5. マスコミ

ここで、日本人の意見の形成に絶大な影響力を持つマスコミに触れないわけにはいきません。今から70年前の戦前にアメリカと戦争するという世論を作り上げたのは、当時のマスコミであったことは疑いのない事実です。その頃はテレビは無く、マスコミは新聞と週刊誌とラヂオとニュース映画でした。それらの影響力は大変なものでした。マスコミはアメリカがいかにかに日本の中国での”聖戦”を邪魔しているか、いかにかにアメリカ社会が腐敗しているか、いかにかにアメリカ軍が弱いかということ、手を変え品を変えて宣伝に努めました。始めはそんな記事を馬鹿にしていた人々も段々と意見が変わって来て、それを信じる方に傾いていきました。現在の北朝鮮についての宣伝と全く同じです。こうなると、アメリカ撃つべしという世論の形成が完了しました。ごく自然に宣戦布告に流れていったのです。それに正面から反対した人を私は知りません。一部の軍人が戦争を始めたのであって、国民の大部分は戦争に反対だったという記述は、当時の日本社会の実情を知らない全くの嘘です。あの頃と比べると現在の、映像を伴うテレビの影響力は比べものにならない強さです。議員の選挙の時にも、外国の内情の紹介にも、テレビが映像を流し、コメンテーターは無責任な発言をして、国民の意見はいとも簡単に操られます。いわゆる脱北者の伝える北朝鮮の内幕といった報道は、その一例です。何か具合の悪いことがあって逃げてきた人が、北朝鮮の内幕として正直な報道をするわけはありません。金さえ貰えば何とでも誇張し、面白おかしい話を作ります。それをテレビで見た人の心の中には、北朝鮮に悪い印象がどんどん膨らみます。何とかの内幕という話題は人々の好奇心をくすぐりますが、こんなものは公正な報道とは言えません。

日本人は他人の言い分に、はっきりと反論することを逡巡します。会議などでも、他人の意見に“反対するわけではありませんが”という枕言葉を置いて、そろそろと自分の意見を述べます。これは他人に正面から反対することは失礼である、という日本人の文化に基づいています。このような文化の中で、強力なマスコミの宣伝をそのまま放っておいて良いのでしょうか。報道の自由や、知る権利ということが声高に叫ばれますが、私は日本のジャーナリストが本当に自由で、公正な報道をしているとは思いません。民放テレビは明らかに視聴者に媚びています。面白い番組を作って見て貰わなければなりません。見る人の数が減るとスポンサーが逃げたてしめ、放送局の経営が危なくなります。そこでニュースも、正確さ公平さよりも、面白くて素人受けの内容になってしまいます。このことは特に外交問題で、はっきりしています。日本人はアメリカにはペコペコしますが、東洋の国々には威張りくさっています。マスコミは、政府が中国や韓国などに対して少しでも譲るような気配を見せると、屈辱外交、土下座外交などとヒステリックに騒ぎ立てます。何故アメリカに対しても土下座外交という言葉を使わないのでしょうか。これも、強いものには、おべっかを使い、弱いものをいじる日本人の文化です。こんな事では報道の自由を主張する資格はありません。マスコミは戦前の先輩と全く同じ道を歩いています。NHKは政府の干渉の前に自主規制をしているので、政府の施策に強く反対することはありません。日本の視聴者は、金儲け主義と偏った自主規制に、もて遊ばれているのです。このままでは、選挙や国民投票で、優れた憲法が作られる可能性はありません。マスコミには思い切った改革を要求します。

(2011. 8/23 内容確認)

(「ながれだより」207号 2006/9/1 掲載)

## 422-7. 憲法論争 2

### 0. はしがき

自由民主党が衆議院で絶対多数を押さえて<sup>③</sup>から、憲法改変が現実味を帯びてきました。その改変の目玉は戦争を禁じた憲法第九条です。自民党が古典的な軍隊を整備して戦争をやってもいいと思うのは勝手ですが、民主党も何となく軍備是認のようにも見えます。こうなると国民の意見だけが頼りです。ただし軍備について議論をしている議員諸公が、来たるべき新しい戦争についてどれ程の知識と見識とを持っているかは疑問です。

編者注<sup>③</sup> 本稿の初稿執筆は2006年9月であり、ここでは2005年秋の衆議院選挙結果を指す。

## 1. 何を守るのか

国民の生命と財産を守るのが政府の義務だ、だから軍隊を持つことが必要だ、という議論が横行しています。一見もっともなようですが、あの精強を誇った日本陸軍と海軍がもろくも敗れて、国民を守れませんでした。とすれば軍備は何の役に立つのでしょうか。自民党の人々は、相手はアメリカだ、強過ぎた、だから守れなかったんだ、と言うでしょうが、それなら相手がどこなら守れるのか、という疑問が持ち上がります。

“守る”というのは、具体的には何をどうするのかわかりません。戦争をして、国民にどれほどの犠牲が許されるのか分かりません。それなのに、守る、守ると言っても、信用は出来ません。国民が一人も死なないような戦争などはありません。

## 2. どこと戦うのか

国民の命を守るのなら、攻めて来るのはどこの国なのかを知らなければなりません。いわゆる仮想敵国です。もちろん仮定の問題ですが、どこと戦争するかによって、防御態勢も変わります。防衛の全部をアメリカ軍に任しているのなら、そんな心配は要りませんが、それなら軍隊を持つ必要もないはずですが。仮想敵を持たない軍備は、地図を持たない旅行と同じです。戦前の日本では、陸軍はソ連、海軍はアメリカ、というはっきりした仮想敵国を持っていました。一部の人が、いくら戦争が好きだからといって、将来にわたっても日本の方から戦争を仕掛ける事はないでしょう。とすれば、攻めて来るのはどこの国でしょうか。

北朝鮮が一番気になります、しかし北朝鮮には日本海を越えて兵隊を送って、日本に攻め込む實力はありません。その作戦の為に海軍力と、補給船団が全く不足しています。攻撃があるとなればミサイルでしょう。現在でも何発かのミサイルは、日本本土に届く實力を持っています。6月にはテポドンが飛んでくるかも知れないという、アメリカから出たデマで、大騒ぎがありました。もう既に酸素と水素の燃料を注入したらしい、などとまことしやかに伝えられました。ここで基本的な誤りがあることに、テレビも評論家も気が付いていないのです。液体燃料のミサイルは戦争の役には立ちません。えっちら、おっちら燃料を注入している所を衛星から見られるようでは、奇襲攻撃の意味は全くないからです。日本を攻撃するミサイルは固体燃料で、深く掘った穴や、移動している発射台から突然に発射されるものなのです。

ところで日本の自衛隊に、このミサイルを防ぐ力があるのでしょうか。北朝鮮で発射してから東京に届く時間は5分から10分と言われます。一発ずつゆっくりと撃ってくれるのならまだしも、数発のミサイルを、そのデコイ（模擬弾）と共に日本に向けて一斉に撃ってきたら、そのうちの何発かは、ラッシュアワーの駅や、原子力発電所に命中するでしょう。大混乱です。原子爆弾を使わなくても、何万という人が死にます。今の自衛隊はその防御には何の役にも立ちません。ミサイルを打ち落とす能力はゼロなのです。ミサイル迎撃の技術開発と称するものが宣伝されていますが、今の自衛隊はそれについての組織的な研究開発を全然していません。兵隊さんや、機関銃や、戦車など、役に立たないものばかりに熱中しています。アメリカが迎撃ミサイルに成功したと称して、日本にそれを売り込もうとしています、それはほとんどない詐欺です。

現存の技術では近距離から攻撃するミサイルをすべて打ち落とすことは出来ません。北朝鮮から遠いアメリカ本土のように、発射されてから届くまでに30分以上にもなる場合にだけ、ミサイル迎撃が現実味を帯びるのです。現に韓国ではミサイルを防ぐことは出来ないと結論して、何もやっていません。予算を付けさえすれば迎撃が出来るというのは全くの嘘です。何発かのミサイル攻撃で日本全国がパニックになったところで、北朝鮮は日本への要求を示して、承諾しなければ、また何発かを撃つぞと脅すでしょう。その時に日本政府と日本人がどんな反応を示すのでしょうか。北朝鮮のミサイル基地を攻撃することは可能でしょうが、すべての基地を完全に壊滅することは出来ません。

次の可能性は中国です。中国が経済的に成長して、日本と覇権を争うようになると、強い摩擦が発生して、それが武力衝突につながるかも知れません。東シナ海のカス田開発権の問題もあります。中国は北朝鮮よりずっと脅威です。ミサイル技術は数段も上です。中国は海を越えて、部隊を送って日本侵略を試みる能力も持っていますが、日本を屈服させるにはミサイルで、通信や交通や電力などを破壊すれば十分です。ミサイルで破壊された原子力発電所からは放射線が飛び出して、原子爆弾の爆発と同じ効果を持ちます。日本が報復のミサイル攻撃をしてみても、広大な中国の領土には大した損害を与えることは出来ません。アメリカ軍は日本防衛のために本気で立ち上がる可能性はありません。イラクであれほど手を焼いたのですから、もっと広大な中国を相手にする勇気はありません。アメリカは日本の国土が破壊されるのを内心では拍手するでしょう。日本の

生産力が落ちるとアメリカは俄然有利になります。早い話が、トヨタの自動車生産が止まれば、ゼネラルモーターズは息を吹き返すのです。これらの考察から得られる結論は、日本はミサイル攻撃に対しては自らの力で守らねばならぬということです。

### 3. 役立たずの自衛軍

このように考えると、今のままでは憲法第九条を改変して、自衛隊を自衛軍に変えてみても国民を守るためには何の役にも立たないことが分かります。兵隊さんが何万人いても、戦車が何千台あっても、働きようがないのです。これが国土が狭く、人口密度が高く、高度に情報化、工業化された我が国の決定的な弱点です。現在の日本人は、政治家を含んで、殆どの人が戦争というものを知りません。60年以上も前の戦争のことを年寄りに聞いたり、本で読んでいただけです。そして、アメリカが兵隊を送ってイラクを征服したのをテレビニュースで見ただけの経験です。イラクへの攻撃と、日本への攻撃とは全く違うのです。ここで前の戦争を思い出します。日本海軍はアメリカとの海戦は日本海海戦のように、大艦隊と大艦隊との激突、大砲の撃ち合いで勝敗が決まると信じて、その艦隊の中軸としての巨大戦艦を建造しました。大和とか武蔵という、いわゆる大艦巨砲主義です。しかしこの信仰は日本の飛行機隊がマレイ半島沖でイギリス海軍虎の子の、プリンス・オブ・ウェイルズとレパルスの2隻の大型戦艦を撃沈してから、怪しくなりました。自国の飛行機隊の戦果で、大型の戦艦は役に立たなくなったことが分かったのです。急いで航空母艦に力を移しましたが、これも飛行機に次々に沈められました。一隻だけ残った巨大戦艦大和の、沖縄での悲惨な最期は、この大艦巨砲主義がいかに時代遅れであったかをはっきりと示しました。戦局を支配するのは飛行機であるという、開戦前には夢想もされなかった事実が突きつけられたのです。私は次の日本を巡る大きな戦争の主役は古い武器ではなく、色々な形のミサイルであることを信じています。現在の防衛関係者が、このことをしっかりと理解しているとは思えません。軍人はえてして、古い殻から抜けられないのです。まして現在の防衛関係者は、失礼ながら、かつての日本軍ほどに超一流の人物を揃えてはいないのです。日本を守るには、10万人を超す兵隊さんなどは無用の長物です。大砲も戦車も要りません。戦闘機さえ無くてもいいのです。

### 4. 新しい防衛システム

現在の憲法に謳われている、軍備の不所持と、戦争の放棄とは古い形の戦争を想定しています。これは無理からぬことで、60年ほどの前に、戦争の形にこれほどの変化が起きることは想定されませんでした。その意味で、第九条についての議論は全くの的はずれです。

ここで新しい防衛システムの構想を描いてみましょう。

まず日本は世界のどこにも兵隊を送りません。アメリカの要求であれ、国際連合の決定であれ、外国の軍隊がある国に乗り込んでお節介をしたら、ろくなことがないからです。私は完全な民族自決を支持します。外国からの干渉をやめて、民族は独立して、自分たちの政府を作るのです。これで日本の軍隊を外国に送る必要はなくなります。日本には兵隊さんは要らないのです。災害救助は必要です。それには軍隊と全く違う組織を作ります。

次に、外国の軍隊が日本の国土に足を踏み入れることを許しません。日本の国土で地上戦を行えば、日本人の犠牲を避ける事が出来ないからです。日本人を犠牲にして、日本人を守るという考えは全くのナンセンスです。私はここで、次の戦争の帰趨を決めるものは、高性能なミサイルと、ミサイル迎撃ミサイルであることを宣言します。その為に日本は、このミサイルの性能向上に全力を注ぐべきです。そのミサイルはすべて防御のための、短い射程で、高速で、高精度のものです。アメリカがピンポイントと称して、イラクで精度の悪いミサイルを使ったのに比べると格段に優秀なものです。北朝鮮と日本、中国と日本の近い距離を考えると、迎撃ミサイルの開発は非常に難しいのです。しかし日本を守るには、どうしてもこの技術を完成しなければなりません。そのためには、軍事費のすべてをつぎ込むべきです。私はこの迎撃ミサイルが必ず成功するという自信はありません。しかし日本人の生命を守るには、これ以外の選択肢は無いのです。

日本は海で囲まれています。ですから陸兵によって直接に攻撃されることはありません。

その点で、私の考えは陸地を接するヨーロッパ諸国の防衛思想とは全然違ってきます。

日本全土にハリネズミのように濃密なミサイル基地を展開します。この基地は3種類の分野を含んでいます。対海、対空、対ミサイルです。敵が海から来れば陸対海のミサイルで撃沈します。飛行機が空から来れば陸対

空のミサイルで撃墜します。これらは打ち上げられた人工衛星からの情報と連携して、完全にコンピューター制御されており、二重、三重に作動が保証されているものです。このようなネットワークを作ることは、現在の技術水準でもさして難しくはありません。最大の眼目は対ミサイルのミサイルです。これには相当の努力と経費が必要になります。

古典的な陸、海、空の3軍は必要ありません。昔のような人間対人間の戦闘をしないからです。戦争の悲惨さの始まりは、戦闘にかり出された兵隊さんが戦死することです。ミサイル戦争では個人が銃の標的になることはありません。

## 5. 憲法の条文

私は戦争のことを強く描きすぎたようです。しかし本当は外交技術で、どの国とも戦争をしないで、国民の生命、財産を守るのが理想です。私は政府にそのための努力を尽くすことを強く要求します。しかし残念ながら、日本の外交技術の稚拙さと、国民の好戦的な雰囲気を見ると、外交努力だけでは頼れない気がしてきました。日本人は何があっても外国と友好的につきあうのだという信念を持ってはいません。何かあると直ぐに愛国心が突出して、憤慨ばかりが先に立ちます。北朝鮮からミサイルが飛んで来ないようにするには、北朝鮮に食料などの経済的な支援をするのが一番です。しかしこんなことを主張したら、売国奴というレッテルを貼られてしまうのが落ちです。このことは最近の韓国、中国との関係でもよく分かりました。私は残念ながら日本人は好戦的で、将来とも、厳格に現在の憲法第九条を守っていけることには絶望したのです。戦力を持たない、とはっきり書いてある第九条があるのに、なし崩しに自衛隊が出来、外国にまで進出しても、国民の間には、さして強い反対もありません。もう戦争はいやだと言っている人が、自民党に投票するのです。これではどうしようもありません。憲法第九条をそのままにしておいても、解釈とやらで戦争に進んでいくのは目に見えています。最高裁判所までもが、それを後押ししているのです。絶望は深まるばかりです。それなら思い切って日本が負けないような条文に変えた方がよいでしょう。我々の子、孫、またその子に、この前の敗戦のような惨めな思いをさせたくはありません。軍隊関係について新しい条文の提案をしてみましょう。

“我が国の軍備は敵の攻撃に対して、国民の生命と財産を守る為だけに限定する。軍が他国の領土に進出することはないし、我が国が先に宣戦布告をすることはない。”

というものです。そして軍備は、短距離の高精度ミサイルに限定します。この条文が憲法裁判所によって厳格に守られる事が私の精一杯の希望です。

(2013. 7/29 内容確認)  
(「ながれだより」208号 2006.10/1 掲載)

## 4 2 3. 経 済

### 4 2 3-1. 経済—来世紀への想い

今度は経済の問題を議論します。私は経済の専門家ではありませんが、どのような分野でも非専門家の意見を尊重しなければなりません。

経済について、いつも話題になるのは景気です。アメリカの空前の好景気に対して、日本では惨憺たる不景気です。その不景気ももっと続く、底を打った、いや上向いている、と議論が賑やかです。今年度のGNPの成長率は1.5%だろう、いや1%にとどまるという論争もありますが、まず不思議なのはGNPがそんなに高い精度で“測定”出来るのかということです。GNPをどうやって測定するのか、詳しくは知りませんが、物理的な測定の常識としては、何を測るにしても、1%の誤差での測定は、かなり難しいのです。ましてGNPのような複雑な対象がそんなに細かく測定出来るわけはありません。GNPの発表には誤差の推定は加えてありません。このような信用出来ない値について一所懸命に議論するのは無意味であり、一喜一憂するのは馬鹿げています。誤差の範囲内での議論は何にもならないという初歩的なことが、政治家にも経済学者にも分かっているのです。GNPが好転して景気が良くなったと言っても、自分の実感で生活が豊かにならなければ何にもなりません。また好景気というものが資源やエネルギーの浪費と一致している現在の資本主義で、景気、景気と騒ぐのは犯罪的ですらあります。

景気をよくするとすべての人が幸せになるということが、無条件に信じられているようですが、それは違います。経済についての何らかの変化は、ある人々には有利に、他の人々には不利に働くのが当然です。誰にでも歓迎される変化などというものはありません。例えば私のような退職老人にとっては、不景気は歓迎です。ささやかな預金の金利が低いのは困りますが、その他は結構だらけです。物価が上がる心配はないし、どこへ行っても空いているし、サービスはよいし、といった按配です。我々の税金を使って景気をよくすることは、止めてもらいたいものです。

来世紀には情報技術の進歩による経済構造の変化が次々と起きます。それは、いろいろな分野での流れの変化と呼ぶことが出来るでしょう。

まず重大な変化が、物を売り買いする商業の面で起こります。商業というのは自分では何も生産しないで、他人の生産品を買い取り、自分では消費しないで、消費者に売り渡して、その売買の差額で利益を得るという古い古い職業です。商人が物の流れを制御していると言っても良いでしょう。その流れを可能にするのは、生産地と消費地とが遠く離れているとか、消費者が商品についての十分な知識を持っていないとか、安価に大量に仕入れて小分けにして売るとか、などのいくつかの条件があります。しかしこれらの条件は技術の進歩で消滅していき、商業というものがだんだんと成り立たなくなりつつあります。日本では元売り、大卸し、卸し、小売、などといった古い流通機構が残されています。しかしインターネットを始めとする豊富な情報の流通と、緻密な輸送手段の発達によって、古風な商人の存在価値はだんだんと無くなりました。生産者と消費者とが直結されるのです。まず、昔懐かしい個人経営の小売店の消滅です。次には百貨店の倒産です。その後はスーパーストアの不況です。国際的に大型の取引をしている商社も不調です。商売というものが全く無くなることはないでしょうが、物資やサービスの流通の主流は直接取引となります。簡単に言えばインターネット取引です。中継業とか媒介業は衰退に向かいます。

同じ衰退は銀行にも及びます。銀行はものを売りますが、お金の中継業です。即ちお金の流れを制御しているのです。預金者からお金を預かって、それを資金を必要とする事業者に貸して利息の鞘を取るのです。事業者が事業の内容や、将来計画などについて詳細をインターネットで公開すれば、お金を運用したいと思っている人から直接に借りることが出来ます。銀行はいわゆる利益の壟断をすることは出来ません。

情報技術の進歩は情報自身を商品とする情報産業をも直撃します。新聞社は情報の流れを制御する仲介業に他なりませんが、現場の特派員の獲得した情報が直接に読者に届くようになれば、新聞社の存在理由はありません。音楽や映画についても、CDやDVDを何百万枚も売る代わりに誰かが一枚持っていれば、それをネットで流すだけで楽しめるのですから、音楽産業は商売になりません。本や雑誌の出版界も大変です。例えば本はどこかに一冊あれば、それを読みたい人に流せば十分です。恐らく本を読んでもくれるサービスも出来るでし

ようから、好きな小説をインターネットで読んで貰えば本を買う必要は無い訳です。

ここで、21世紀での我々の働き方について考えてみましょう。最近失業率が上がってきたことに心配する向きがあります。何となく、失業率はゼロであることが理想で、またそれは必ず実現出来るはずだと思われていますが、本当にそうなのでしょうか。失業は色々な原因で発生します。もともと働くということは直接、間接に、もの、サービス、情報を生産したり提供をすることであり、その生産量はそれを受け取る需要と見合っている筈です。従って需要が少ないと働く必要が無くなり、失業が発生します。需要の減少はあらゆる業種で等しいわけではありません。ある業種では激しく減り、またある業種では需要が供給を上回ります。それに伴って失業と産業構造の転換が起こります。失業がゼロではこの転換が起こらず、産業がいつまでも停滞します。

失業発生のもう一つの要素は生産性です。技術の進歩によって一人あたりの生産性は不断に向上します。この供給面での生産の増大が需要を上回ると、ここでも失業が発生します。人間の欲望には限りがないと言われるますが、私達の現在の生活には大した不足はなく、来世紀になっても需要が急増するとは思えませんから、失業率は増える一方です。残念なことです。我々技術者が失業を増やすために働いているのです。

失業の増加とは反対に、男女の結婚年齢の上昇、あるいは全然結婚しない人の増加で、産まれてくる赤ん坊の数がどんどん減っています。これを少子化というようですが、この言葉は全く不適切です。“少”にはすくないという意味と同時に、若いという意味があります。漢和辞書を見ても、少子とは若い人のことだとはっきりと書かれています。少年とか少女という使われ方を考えれば当然です。明らかに間違った使い方の少子などと言わないで、出産減少といえれば十分に正確なのです。とにかく若い労働人口は確実に減っていきます。それを補うために移民を受け入れようという意見がありますが、私は反対です。はっきり言えば、外国から日本に出稼ぎにやってくる人たちのレベルは決して高くはありません。手助けにはなりますが、犯罪や、日本人とのトラブルが増えます。長い間、単一民族であった日本人には、外国人を要領よく迎える用意がありません。移民受け入れは将来に大きな禍根を残します。私の提案する対策はロボットです。いろいろな種類のロボットを開発して労働力の不足を補います。そのために単純作業の繰り返しのロボットだけでなく、もっと複雑な作業も出来るようにロボットを改良しなくてはなりません。

日本にはろくな天然資源がありませんから、我々が生き延びるためには輸入した原材料を加工して、それを輸出して、さやを稼ぐほかありません。輸出するためには品質と価格で競争して相手に勝つことが必要です。そこで競争力という考え方が出て来ます。競争力を付けることは、我が国にとって死活の課題です。競争力がないと外国資本が経済を抑え、経済的な独立が不可能になります。しかしこのような古典的な輸出入の関係は崩れ始めました。国内資本と外国資本との区別がはっきりしなくなったのです。例えば自動車産業では、日産も三菱もマツダも外国資本に抑えられました。このように経済が国境を越えてひろがり、つながります。21世紀には国という特定の地域に限定された経済はありません。世界は政治的にではなく、経済によって、離れがたく結ばれていくのです。このようになると、経済での利益、不利益が複雑にからみあって、第1次、第2次世界戦争のような大規模な戦争は不可能になります。その点では結構なことです。

経済や政治の世界では公（おおやけ）と私（わたくし）とは、はっきりと区別され、その両方を混同することは厳しく禁じられてきました。しかしここへ来て、それが怪しくなりました。例えば、そごう百貨店の問題です。我々の税金で直接にそごうを救うことはやめになりましたが、間接的にはもっと沢山の税金を注入することになりました。そごうはどこから見ても私企業です。これに公的な資金を提供することは、疑いもなく公私の混同ではありませんか。自由主義の競争社会という神話はどこへ行ったのでしょうか。このようなことは銀行が潰れかけになってから始まりました。銀行が潰れると経済が混乱するという錦の御旗を押し立てて、税金で銀行を救済しました。銀行はやはり、れっきとした私企業です。銀行は努力すれば回収出来る債権も不良債権と称して、税金をあてにします。これは精神の荒廃にはかなりません。以前に、金貸し業者のえげつない借金の取り立てが非難されましたが、今の銀行はその逆です。債務者が払えませんか、ああそうですか、これは不良債権だ、というわけです。後ろには何兆、何十兆円という政府の資金が控えているのですから、気楽なものです。融通が利かないで、気位の高かった銀行マンの誇りはどこへ行ったのでしょうか。“恥を知れ”と言いたいところです。

このように銀行をやっつけても、問題の解決にはなりません。それではどうすればいいのでしょうか。あくまでも自由主義経済を押し進めるのであれば経済の混乱を覚悟して、銀行が潰れるのを見過ごすことです。しかし私にもそれを主張する度胸はありません。銀行が潰れば、銀行から金を借りて経営している会社が次々

におかしくなって、大変なことになる。それを放っておくことは出来ません。銀行を救済するのは仕方がないとしても、銀行がやたらに貸し出しを増やし、そごうがどんどんと借金をして、その挙句に破綻した。それを国民の税金で尻拭いをするというのでは納得出来ません。なぜ、はじめに放漫な経営を止められなかったのか、という当然の疑問が出ます。そごうのような不始末を見逃して、国民の金を無駄に使うことになった政府の責任は重大です。これは事業予算の不正使用と同じです。もし何にも仕事をしない建設会社に建設省が1000億円を支払ったと聞いたら、怒らない人はありません。そごうへの援助はこれと全く同じことです。自由な資本主義経済は民主主義の象徴の一つとされていますが、その経済体制には上に述べたような矛盾が明らかになりつつあります。自由主義経済人は市場の働きを信仰して、政府の干渉に悪態をつきますが、潰れかけた銀行が公然と公的資金を受け入れているではありませんか。景気が悪いから政府が何とかしてくれということも、自由主義の放棄に他なりません。

このような国内の自由主義経済の崩壊と時期を同じくして、21世紀の経済に大きな影響を持つ大事件が発生します。それはアメリカ経済の壊滅です。現在のアメリカは空前の好景気を謳歌しています。株価は高止まり、消費は過熱しています。しかしアメリカの経済は決して盤石ではありません。近いうちに必ずバブルがはじけます。その結果、アメリカだけでなく世界中の経済が恐ろしい混乱に巻き込まれます。ここで日本の経済は国外からの強烈なパンチを食らうことになります。アメリカに対して行っている日本からの莫大な投資が紙屑になる危機です。それが実際にどんなものになるのか、私には想像も出来ませんが、日本のバブル崩壊の10倍も20倍もの大混乱でしょう。この事態を従来、競争を基調とする自由主義経済の手法で収拾することは出来ません。競争は混乱を助長するだけだからです。経済を落ち着かせるためには政府の強力な指導が必要になります。政府は全力を振るって将来計画を作り、それを産業界に強制しなければなりません。それは強力な規制という形になるでしょう。場合によっては、規制を乗り越えた統制が必要になるかもしれません。この考え方を進めると経済の計画化と、私企業の国有化に近付きます。政府主導での計画経済は社会主義的ですが、それをしなければ、この経済の混乱を抑えることは出来ません。強い規制は最初は国内でも強い反対を呼びますが、結局は誰でも賛成せざるをえないでしょう。この過渡的な状態は無限には続きません。いつかは緩められる時がくるでしょう。しかし我々はこのピンチから多くのことを学びます。決して20世紀の経済の再現は許されません。ほころびだらけで、バブルの発生を含むような自由主義経済は引導を渡されて、新しい経済体制がスタートすることになります。それは成熟した社会の、計画を伴う競争です。

(2000. 10/1 「ながれだより」 136号掲載)

## 4 2 3 - 2. 経 済

### 0. はしがき

政府のやることで国民に一番影響のあるのは経済政策、即ち主にお金のことです。ここでは、国の現在の経済状況を私の考え方で、どのように解釈するかということと、将来にどのような展望があるかを述べます。

### 1. 官と民の対立

経済のことでいつも聞かされるのは、自由主義経済という言葉です。しかし経済のニュースには必ず政府がからみます。完全に自由な経済など、どこにもありません。ここで疑問が出てきます。即ち、政府が経済について手を出すのに、どのような理論的根拠があるのか、ということです。政府は時には、経済を市場に任す、と言います。しかし国民は、景気を良くするのは政府の責任だと心得ています。憲法でも、国民に最低限の生活を保障するのは政府に責任、となっています。それでは、政府は何をすればよいのでしょうか。

社会主義の計画経済では政府が100%の主導権を握り、次々に命令を出して経済を運営します。これは非常に分かりやすい、秩序的なやり方です。しかし、分かりやすいということが最善とは限りません。社会主義を貫こうとした国の経済は、どれも不調になってしまいました。それに反して、自由主義国のやり方は違います。そこでは政治家と官僚を合わせた、いわゆる“官”は、市場を中心とする“民”と対立した形になってい

ます。私はこの、互いに牽制しながら進んでいくという方式の方がずっと国民のためになると思います。秩序と乱れの合奏です。しかし政府がどこまで手を出せばよいのかは簡単には分かりません。誰も教えてはくれませんし、計算で答えを出すことも出来ません。“官”があまり手を出し過ぎると、秩序重視が行き過ぎて、自由な発想が無くなっていますし、“官”が手を拱いていると、経済が混乱します。“官”は計画的で秩序立っているのに対して、“民”の方は乱雑で、“官”の思うようには進みません。“官”は自分たちの考えの方が良いと信じていて、権力を持っていますから、手出しをしたくなります。ここで強調したいことは、官の方が秩序を、民の方は乱雑を代表し、その両方が、程良く対立することによって、堅実な進歩を続けられるということです。経済が複雑になればなるほど、“官”と“民”との健全な、程よい対立が最善の結果をたらすと思います。

## 2. 経済の成長

一国の経済の好調さを示すのがGNPの増加率です。それがプラスであればその国は発展していると思われ、マイナスは不調です。政府も、民間も成長率を大事にします。この成長率を構成する要素の中で一番重要なのは個人の消費動向です。大雑把に言えば、国民が沢山消費するということが経済の好調に繋がっています。こうなると景気が良いというのは、物資やエネルギーを出来るだけ浪費するということになります。しかし、この浪費が称賛に値するものでしょうか。それは、地球上に無限に存在するわけではない物資やエネルギーを減らし、生活の環境を悪くすることに他なりません。このようなGNPを経済発展の指標とするのには、私は反対です。それに代るものとして、国民の生活充足度を数量化するアイデアを持っていますが、詳しいことは別の機会に譲ります。

スケールを小さくして、社会で一つの会社がどのように成長するのを見てみましょう。まず最初は、ほんの少人数で何かをする小さな集団を立ち上げます。これは例えば、家の裏のガレージに大学の同級生が3人集まった、というような小さなものです。何をどうすればよいのか分からず、将来どうなっていくのかも分かりません。儲けたり、損をしたりします。潰れてしまったりもする、乱雑なものです。しかし何とか少しずつ成長すると、役割分担が出来、新しい人を雇ったりして、段々会社らしくなります。やがて、株を上場するようになると、はっきりした秩序が出来上がります。これが、はじめ乱雑だった集団が秩序のある会社になっていく過程です。大きな会社になってしまうと官僚的になって、しきたりや前例が幅を利かすようになり、創業当時の縦横、自在な活力が失われてきます。これが乱雑さと秩序の存在について考えさせられる一例です。会社は発展するためには、きちんとしていると同時に、何としても乱雑による活力を保持しなければなりません。

## 3. 市場

経済活動の中で最も大切な場所は市場です。貨幣とか、資本主義などという言葉が無かった頃から、市場は存在していました。平城京にも平安京にも、“市(いち)”がちゃんと存在しています。地方にも六日市とか二十日市とかの地名が残っています。歴史の始まりから物々交換は自然に発生しました。自分のところで余っている物を、足りない物と交換する事によって、人々の生活が成り立っていたのです。市場に何かを強制することは出来ません。市場は乱雑な世界です。

市場が円滑に機能すると、経済に安定感が生まれます。そこから市場万能の信仰が生まれました。何でもかでも市場に任しておけば、“神の白い手”が、誰も知らないうちにより結果を招いてくれる、政府などが余計なことをしないで貰いたい、というのです。しかし今では、そのような素朴な信仰は通じません。市場原理が働いて決まる筈の、物の値段が市場だけでは決まらないのです。何かを売り買いするときは、売手は良くない品を出来るだけ高く売ろうとし、買手は良い品を出来るだけ安く手に入れようとします。そのためには双方とも、品物について詳しく知らなければなりません。いわゆる目利きです。しかし現在では、技術の進歩によって、それがひどく難しくなっています。例えば野菜が売買される時、野菜の新鮮さは見れば分かりますが、その野菜の栽培にどれほどの農薬が使われたかは、見ただけでは分かりません。土地を取り引きするとき、表土の下に毒性の強い薬品が隠されているかも知れません。売り手が黙っていれば、騙されてしまいます。商品の内容をはっきりさせる為の規制が必要です。これは市場では出来ません。政府の責任です。

## 4. 経営と労働

経済界の色々な分野で大きな会社が出来てくると、経営と労働との対立が重大な問題になります。経営側は労働者を安い賃金で長い時間働かせようとするし、労働側はそれと正反対の要求を持ちます。戦争の後にアメリカの指導があって、沢山の労働組合が作られ、それらの連合体も出来ました。労働者の権利が高らかに謳われ、要求を貫徹するためのストライキも、しばしば行われました。乱雑な個人が団結して、秩序のある力になったのです。日本のサラリーマンの給与が着実に上がっていったのは、この労働組合のお陰です。

その労働組合が、昨今はめっきり力を無くしてしまいました。賃上げ要求も殆どせず、雇用を守ることも出来ません。会社側の提案に賛成するだけです。組合員の数も減るばかりで、組織率は20%を下回っているそうです。これではストライキどころか、デモ行進さえ出来ません。組合に入っても何の利益もないということになれば、組合費を払いたくなくなるのは当然です。社員個人の業績を判定して賃金に反映するという、労組分断作戦を展開した経営側の全面的勝利です。しかし労働側と経営側の健全な対立を取り戻さなければなりません。経営側も組合の弱体化を喜んでばかりは居られないのです。組合の要求は経営陣のさらなる努力を促して、経済の力強い発達につながるのです。

## 5. 経済予測

誰でも近い将来の経済の動きを知りたいがります。早い話、将来が分かれば、安心も出来ますし、物や株を売ったり、買ったりして、儲けることも出来ます。現在では株の値段の予測が非常に重要です。ある会社の経営がうまくいっているかどうかを知るには、株の値段を見るのが一番です。また、株式市場の株の平均価格が経済発展の指標になります。経済に関係している人はもちろんですが、国民のすべてが株価の上り下がりに一喜一憂します。

そこで、経済評論家の意見を聞こうということになります。評論家は色々なデイトを集め、自分なりの分析をして、予測をします。しかし、昔から天気予報と株の予想は、当たらないものの代表です。専門家と言われる人々の予想が、まっ二つに分かれることも屡々です。天気予報のためには気象学があり、経済には理論経済学がありますが、そのどちらも完璧ではありません。その最大の理由は、経済にも天気にも、乱れがちらちらするからです。推測通りに、必然的に経済が動くなら苦労はありません。しかし経済の動きが乱雑であるところに、経済の発展の原動力が潜んでいるのです。

## 6. 銀行

社会にある色々な企業の中で、昨今の銀行は特殊な地位を占めています。金貸しというものは、元々は金を貯めた人が金の必要な人に貸し付けて、利子を稼ぐという素朴な商売でしたが、今では金融が経済全体を支配するようになりました。銀行というものは何も生産するわけではなく、よそ様のお金を左右するだけの、本質的にはつまらない商売です。金を持っている人は自分で運用する代わりに銀行に任せて、銀行から利子を貰います。金が利子を生むという、この図式が資本主義の原型です。金に余裕のある人は乱雑に存在し、銀行はそれをまとめて、貸し付けるという秩序化の仕事をしています。預金者と銀行の利害は常に対立しています。預金者は高い利息を求め、銀行はその逆です。貸出金利については今度は逆な対立があります。この健全な対立が経済を円滑に回転させるのです。しかし昨今は預金の利子が極端に低く、預金者が利益を得ないという、歪んだ形になっています。これでは健全な資本主義とは言えません。

日本の企業の中で、この50年ほどの間に銀行ぐらい色々な目にあった業種はありません。以前の銀行は大蔵省の強い監督と、その代わりの手厚い庇護を受けました。その意味では気楽な商売と言えたでしょう。しかし、銀行にも自由競争の波が押し寄せて来て、寒風の中に放り出されました。その時期に担保に取っておいた土地の値段、持っている株の値段の暴落に見舞われ、貸出先の焦げ付きが重なって、大きな銀行も次々に経営不振に陥りました。金融システムを安定に保つためと称して、政府は国民の税金を使って危ない銀行を国有化し、それを法外な安値と信じがたい程の優遇措置を与えて、外国資本に売り渡しました。そうかと思えば、別な銀行は、あっさり潰してしまうという、権力に任せて、法則性のない勝手気ままなやり方をしました。これは明らかに度を超えています。国民に多額の負担を強いる政策なのに、こんないい加減なやり方は許せません。政府はあくまでも、はっきりした基準を守った秩序派で、節度を守らなければなりません。銀行というものは元々は私企業ですから、こんなやり方、は憲法で保証された私有財産の侵害になる可能性もあります。また政府と銀行、さらに言えば、政府と経済界とは健全な対立状態を保つべきで、どちらか一方が大勝ちして、一方

を支配してはなりません。

銀行が潰れると、その影響の大きさはほかの企業の比ではありません。と言うのは、日本の経済がひどく銀行に頼っているからです。何か事業を始める時、開業資金から運転資金に至るまで、すべてが銀行からの借入れです。銀行が手を引くと、その途端に破産となります。この過度の銀行依存は、一つには税のしくみによっ  
ています。借金をしていれば税が安くなるのです。こんな体質を変えて、銀行の役割を軽くする方へ誘導するのが政府の役目です。

## 7. 将来展望

私は経済の専門家ではありません。私には経済の細かなメカニズムについての知識も、経験もありません。しかし、マクロな経済では私の言う、秩序の“官”と、乱雑な“民”の健全な対立のみが、よい結果を生むことを信じています。現在の経済には色々な欠点や、矛盾がありますが、しかし、この資本主義が全面的に社会主義、共産主義に変わっていく可能性はありません。それは政府による強い統制は非能率を生むという、しばしば言われることに加えて、統制が経済を過度に秩序化して、乱雑によって生まれる独創の芽を摘んでしまうからです。政府による秩序の保持と、民間の乱雑が程良く拮抗しているのが、理想的なのです。民間は自由に、乱雑に、激しい競争をします。新しいアイデアや製品はその乱雑競争の中から生まれます。政府は、法律や規制によって、不正の監視と公正な競争を保証します。一方では、国民に最低限の生活を保障します。別の言い方では、民間の競争は必ず勝ち組と負け組を生んで、貧富の差を大きくします。政府は、それが大きくなり過ぎないように策を施すべきなのです。

銀行について言えば、銀行がまるで経済全体を支配しつつあるという姿は間違っています。しかもその銀行が、政府の支配下にあるということは許せません。これでは金融社会主義ではありませんか。政府は経営の悪い銀行が潰れるのを放っておくべきです。これは大手術です。それによる混乱は相当のものでしょうか。しかし、この混乱を自分たちの力で乗り越えてこそ、日本の経済がさらに力強く発展するのです。敗戦という未曾有の大混乱を経験した日本人に、この混乱が乗り越えられない筈はありません。

## 8. NNW (国民純福祉)

GDPに代わる指標を考えてみましょう。その前に現在のGDPなるものが何を表現しているのかを吟味する必要があります。それは、基本的にはある国の経済力という、はっきりしないものの定量表現のようですが、一人あたりのGDPというときには、国民の個人収入の平均のようにも見えます。

経済というものが多次元のベクトルであるとして、その中の分野の一つ一つをベクトルの成分のように考えるのが便利でしょう。成分として考えられるのは、次の通りです。

### プラス面

移動の利便 情報の取得 健康 教育 余暇 福祉 老後 環境 貯金  
金利 健保

### マイナス面

犯罪 事故 天災 税金 貧富の差 財政赤字 政府権力

価値基準は個人によって違います。即ちこれらの成分を測定する物差し、あるいは重みをどのように取るかには客観性はありません。

### NNW Net National Welfare (国民純福祉)

プラス要素	政府消費	個人消費	政府資本財サービス	個人耐久消費財サービス	余暇時間
	市場外活動 (主婦)				
マイナス要素	環境維持経費	環境汚染	都市化に伴う損失		

全部を加えて貨幣額で表示。

(2013. 6/1 最終更新)  
(「ながれだより」179号 2004. 5/1に加筆)

## 424. 人間 (前編)

### 424-1. 隣人

#### 0. はじめに

昔から言われているように、人は一人では生きていけません。赤ん坊の時は母親を始め、父、兄姉などの世話を受けているのは当然ですが、ここでは物心が付いてから自分の周りの人と、どのように交わっていくかを考えてみます。他人の経験は分かりませんので、どうしても自分の経験が中心になり、私記的なものになりますが、勘弁願います。

#### 1. 友達

幼稚園に行くようになると、まずぶつかるのが友達です。どんな子供と友達になるかは、完全に偶然で、選び方は乱雑です。お前はこの子と友達になれ、と命令することは出来ません。また誰と友達になるかについて自分の意見を述べることはありません。友達同士のつながりも強かったり、弱かったりの乱雑です。友達を作れない子は孤立します。友達作りは一つの技術です。自分の周りにはいる人は乱雑で、誰を選べばよいかは分かりません。日本人は友達を作ることを非常に大事にします。お母さんは子供の友達が出来ないと、不安で不安で、たまりません。教育相談で、なぜうちの子には友達が出来ないのでしょうと、真剣に訴える母親がいます。

#### 2. 小学校

小学校に上がると、子供と先生の関係が作られます。幼稚園にも先生は居ますが、園児の年では先生の善し悪しは意識されません。どの先生にぶつかるかは偶然で、いい先生に恵まれることはあまり期待出来ません。

現在の教育制度は一斉、画一的で、同年齢の子供を集めて学級を作り、同じ事をみんなに教えます。このシステムは効率的で、誰もこれに抗議する人はありません。しかし本当にそれがベストなやり方かどうかには疑問があります。学校から離れたとき子供達は同じ町内の友達をつくり、学年を忘れて遊びます。あまり年が離れると具合が悪いのですが、何も必ず同学年でないと遊べないということはありません。この縦のつながりは大事なことです。この遊びによって年長者から学ぶことがありますし、年少者をいたわるという習慣が作られます。これを学校に持ち込むことは出来ないのでしょうか。同じ年齢の子供を集めて教育するのは教える側の便宜であって、教わる側にとって最善ということはありません。小学校も高学年になると、同年齢でも科目によって学力にはかなりの差があり、一斉授業が最善ではありません。伝えられるところでは、江戸時代の寺子屋では年令によって区別をせず、殆ど個人教育であったということですから、やろうと思えばやれないわけはありません。例えば数学の良く出来る5年生は、6年生のクラスに混ざっていてもよいのです。

#### 3. 喧嘩

子供が大きくなると自己主張が芽生えて、自分に気に入らないことがあると、怒るようになります。それは自分が生きていく上で、どうしても必要な本能です。自分を怒らしているのが、彼または彼女だということがはっきりすると、相手に向かって喧嘩を売ります。

始めは言葉で喧嘩するのですが、それで埒があかないとなると、手が出て殴り合いになります。このときに体力の優劣がはっきりします。それで誰が強いかが段々分かってきて、上下の関係出来上がります。がき大将の誕生です。がき大将は強いだけでなく、子分の統率力も要求されます。がき大将を頂点とする派閥は幾つも出来ます。私の兄は小粒ですが、しっかりした強い、がき大将でした。私は病身で、体力もなかったのですが、兄が同じ学校にいる限りは、誰もが手を出さないでいました。こういう関係をバックを持っていると言いました、時には派閥同士の集団喧嘩に発展することがあります。やくざとか暴力団の始まりです。よその学校と「決闘」をすることがあります。この程度の乱雑は人間社会では必要なのでしょう。何もしないでおとなしいばかりの子供というものは、気味が悪くなります。

#### 4. 先生

学校での生徒と先生との関係には微妙な所があります。先生は生徒を褒めたり、叱ったりします。その先生の行為がいじめの原因になります。褒められてばかりいる子は、先生におべっかを使っているといっていじめられ、先生の叱り方によっては、それがまた、いじめの原因になります。誰でも内心は先生に褒めて貰いたいのです。しかし、必ずしもそうはいきません。先生の気に入って貰えるようにだけ行動するのが嫌になるからです。しかし、この褒められたい気持ちは大人になっても決して消えることはありません。それは世界には驚くほどの数の色々な“賞”があることで分かります。国際的にはノーベル賞、フィールズ賞、映画のアカデミー賞を始めとして、国内でも天皇陛下に頂く、いろんな勲章から、学会、芸能界、文学界などに数え切れないほどの賞があり、それを貰った人の感激ぶりは怖くなるほどです。自分が自分を褒めればいいのに、何故、他人に褒めて貰うことにそんなに執着するのか、私には理解が出来ません。

#### 5. いじめ

小学校でクラス単位で行動するようになると、必ずいじめが起こります。最近これが大きな問題になって、自殺する子供まであらわれましたが、いじめを完全になくすことは出来ない相談です。それは本能として、自分を守り、他人より優れていると思いたいからです。生命を維持するためには他人を自分より弱い、劣ったものにしておかねば安心出来ないからです。今の人間はそのようにして生き残った人々の子孫ですから、その本能は強いのです。喧嘩は個人と個人の争いですが、いじめは多数の個人への攻撃ですから、その意味では卑怯です。子供は小高い積まれた山を見ると、必ず駆け上がります。自分は高いところにて、友達を見下したいからです。私の父は海軍の士官でしたので、私は小学校の時に何回も転校し、そのたんびにいじめられました。その理由は主に言葉が違っていることでした。子供の言葉には方言が強く、時には何を言っているのか分からないことがあります。こちらからの言葉も奇妙なものに聞こえたことでしょう<sup>(4)</sup>。傑作だったのは、いじめっ子が私に“くらっそう”と叫んでいるのに、私は何を言われているのか分からないで、ぼんやりしていました。後で分かったのは、その言葉は、“食らわすぞ”即ち、殴るぞ、という意味だったのです。そんな調子ではいじめられるのが当然です。それでも親切な子が一人いて、何やかやと、かばってくれるのに助けられました。小学校の3年生でした。今にして思えば、この子は勇気のある、有難い人間でした、クラスはこの世の中の縮図です。色々な、つらい目に遭いながら子供達は成長していくのです。大人になれば勤務する会社などでひどいいじめに遭うのですから、子供の時の経験は役に立ちます。

#### 6. 家族

自分で物が考えられる年頃になると、家族を意識するようになります。その中でも強烈なのは母親です。なんといっても子供を育てる責任者は母親です。父親が育児に参加しないと非難されることがありますが、特別な場合は別として、母親が育児の中心になるのは自然でしょう。普通のうちでは父と母が居るのですが、我が家では父が長い航海に出ることが多く、殆ど母子家庭でした。母は父の役割もしなければならぬと決心していたらしく、厳しい教育でした。子供は自分が赤ん坊の時に親がどれ程の苦勞をして育ててくれたかを覚えていませんから、親の存在をただ鬱陶しいものだと考えます。親と喧嘩をして、親を殺してしまったという悲劇が発生することにもなります。

#### 7. 親友

生涯の親友と呼べる人を獲得するのは高等学校から、大学に行ってからです。何となくうまが合うと、深い交際になります。誰を選ぶかということは全くの偶然で、そこには秩序はありません。その意味では、乱れが支配しています。良い親友を持つことは人生の幸せです。しかしあまり深くつきあうと、気まづくなります。孔子も“君子の交わりは淡きこと水の如し”と説いています。しかし、良い友人は兄弟よりも、一生の宝です。大切にしたいものです。

(2013. 5 / 17 最終更新)

---

編者注<sup>(4)</sup> 筆者は小学校生活の一時期を、広島から佐世保へ転校して過ごした。

## 4 2 4 - 2 乱流行動学

### 1. はしがき

現在の社会には、若者の犯罪、家庭内の暴力、夫婦の離婚の増加、など、個人の行動による色々な問題が起きています。これらをどう考えたらいいのかを追うことから、行動学がスタートします。

乱流という形容詞をかぶせたのは、まず流れという言葉で、連続的な取り扱いを意味します。従来この種の問題には、対立的な概念が使われて来ました。例えばタテ社会とヨコ社会、父性原理と母性原理、西洋的と東洋的といった按配です。この様なやり方は事柄をきわだたせるには便利ですが、時には何でもかでも対立に押し込んでしまう危険性があります。またこのやり方は、定量化には全く不向きです。これに対して連続的なやり方は、白か黒かではなく、定量的な扱いを目指します。

次に、乱流は乱雑と秩序を含みます。乱流の中の乱雑と秩序の微妙な絡み合いが、社会のモデルとして有効なのです。

私はここで、客観的な行動学の組立を示し、一方では主観的な提言をします。

### 2. 行動の統計と形象

行動学を定量化するには、まず行動統計を取る必要があります。これは個人の行動を客観的に分析して数量化するもので、結果は統計量として表現されます。これには多くの労力がかかり、またどのような統計量にするかを考える事が必要です。ここでは乱雑度を考えることにします。しかし、私たちの行動をすべて統計量だけで表すことは出来ません。

もう一つの重要な表現が形象です。この点でも乱流と非常に良く似ています。私たちは行動にどのような形象があるかを子供の時から習います。たとえば高い木に登ると、落ちて怪我をするという形象があります。だから怪我をしたくなければ木に登らないことだ、という具合です。いろは歌留多という物があります。犬も歩けば棒に当たる、とか、商売は牛の涎、とかいう形象が並んでいます。中には全く逆のものがあります。“君子危うきに近寄らず”と“虎穴に入らずんば虎児を得ず”というのです。どの形象を選ぶかは個人に任されています。

歴史の中にはたくさんの形象があります。私たちが歴史を勉強して得られる最大のものは、行動形象の知識でしょう。例えば歴史の中には数多くの戦争があり、戦争の形象を研究する戦史学というものがあります。そしてそれが、現実の作戦を決定するときの貴重な指針となります。歴史上の人物の伝記を細かに調べるのも、やはり行動形象を集めるためでしょう。数多くの形象が集まれば当然のこととして、それらを整理、分類することが必要になります。これを行動形象学と呼びます。これは統計と違って、完全に客観的に行うことは出来ません。どれを重く見るかによって、結果は変わって来ます。

### 3. 行動の理性的選択

私達が何かの目的を設定して、行動を起こそうとしたとき、まず頭の中に形象が出現します。要するに脳の中に保存されている幾つかの形象の中からあるものが引き出されてレジスターの中に置かれます。一つの目的に対応する形象は一つではありません。例えばお金が欲しいとき、宝くじを買う、猛然と働く、銀行に強盗に入るなどがあります。また、誰かにいきなり殴られたとき、殴り返す、じっと我慢するという形象があります。そしてその中のどれかを選んだとき、その後続く私達の実際の行動は、形象のうちどれを選ぶかによって決まります。その選び方には理性的と感情的とがあります。

理性的選択の第一段階は客観的なものです。ある形象が法律や、道徳や、しきたりによって禁じられていないかどうかを調べます。私達はどのような形象が罰の対象になるかを知っています。道徳は完全に客観的とはいきませんが、ある時代、ある地域ではある道徳律によって行動が制限されています。しきたりはいちと漠然としていますが、やはり個人の行動を縛ります。例えば葬式には黒い服で出かけなければなりません。日本人はこのしきたりに敏感です。しきたりにはずれると恥をかく、他人に笑われる、というわけです。これは異端に対する不寛容な精神構造のせいです。そしてこれは、基本的には自分の行動の選択を主観的には行わず、他人のせいにするという自主性の無さとして、軽蔑の対象になります。このことは国際間の問題にも広がって

て、日本政府は自分で何かを打ち出さないで、わけの分からない、国際社会の行動というものばかりを気にしています。

ある社会に存在する行動の客観的基準というものがどのようにして出来上がり、また、その社会に対してどのような影響を持つかという事を研究する、いわば行動基準学とでも言うべきものが成り立つと思われまふ。当然のことですが、この行動基準は従来の社会の仕組みを維持する事を目的としています。行動基準として有名なのはモーセの十戒です。政治的に迫害され、経済的にも困窮して、エジプトから逃げ出したユダヤの人々の群をまとめた社会として維持するために、知恵者のモーセが持ち出した十戒のお陰で、社会が崩壊しないで済みました。社会が崩れる最大の原因は経済的なものですが、一見、精神的と思える行動基準が、実は経済を破壊する行動を厳しく禁じているものである例は、沢山あります。このことは社会の経済状態が変わると、少し遅れて基準が変わることにもなります。

日本人に少なく、欧米人に多いのが理性的で、主観的な選択です。自分がこれをやると決めたら、どうしてもそれをやるという形の、強烈な自己主張です。多くの人の自己主張が衝突して、どうにもならないときに必要なのが、道徳と法律です。それらが禁じない限りは何をやっても良いわけです。これが法律の重視とともにプライバシーの尊重という形になります。この間の消息のモデルとして、乱流が役に立ちます。客観的な制約、即ち行動基準は秩序であり、主観的な選択は乱雑です。現実にはこの両者が共存し、微妙に干渉する事は乱流とそっくりです。

本来、完全に主観的な選択の範囲にあるものに秩序を強く持ち込む人があります。毎日同じ時間に、同じ食堂へ行って、同じ席に座り、同じものを食べていた小説家がいたそうですが、これなどはその典型でしょう。日本では主観的な選択の乱雑度が大きいと、それだけで非難の目で見られます。友人一同がレストランで食事するとき、一人が天井を選ぶと、大抵の人が、私も、私もと同調します。その中で一人だけ、私は親子どんぶりだと発言し、これが何度にもなると、“あいつはどうして逆らうんだろう”と言われ、悪くすると村八分になります。これは些細なことですが、規制が自主性を失わせ、独創性の芽を摘む一つの例です。

考えてみると行動判断は、どこまでが主観で、どこまでが客観かは、はっきりしません。それらは連続で、主観と客観は極限概念と考える方が良いでしょう。

#### 4. 行動の感性的選択

理性的に、ある行動を選択したとしても、それが実行に移される前に、もう一つの感性的選択を通過する必要があります。目的を達成するにはこれが一番いいと分かっているても、“気が進まない”とか、“やりたくない”と感ずることもありますし、逆にこの行動は止めた方がいいと分かっているても、“どうしてもやめられない”ということがあります。この様な感性的な選択は、現実には理性的選択に劣らぬほどの重要性を持っています。場合によっては理性を失って、感性だけで行動を選ぼうとする事もあります。喧嘩がその例です。

両方を比べてみると理性的選択が秩序的で、論理を持っているのに対して、感性的選択は乱雑で、予期しがたいと言えまふ。例えば経済学では、人間は常に利益を求めて理性的に行動する者と定義されていて、感性的な面は無視されています。これは、感性的な選択は乱雑で扱いにくいということで、切り捨てられているのです。現実の人間はいつも、理性と感性の間で揺れているわけで、夏目漱石の、草枕の中の“理に働けば角が立ち、情に棹させば流される。”という文章はこのことを表現しています。しかし嘆いてばかりいても仕方ありません。私達は両方の妥協点を見出す努力をします。この時、個性というものがはっきりと現れます。

感性を抑制して、理性的な行動をする人を賞賛することがあります。これは自分にはとてもそうは出来ないう賞賛の気持ちと、一方ではこの様な行動こそが社会に貢献するもので、自分もその恩恵にあずかっているという感謝の気持ちからでしょう。しかし、そのような人の一生が本当に幸福であったかどうかには疑問の余地があります。幸福感というものは完全に主観的なものだからです。余計な心配だと言われるでしょうが、一般的には、感性を押さえることは、よい結果を生みません。

一方では理性を放棄して、感性的選択を大切にする人もいます。芸術家にはこの形の人が多いのですが、世の中のしきたりとしては決して許されないう恋をして、ついには心中でその恋を完成した西鶴の世界は、感性的選択の極致ともいえまふ。そこまで行かぬ普通の人は、あるいは欲求の不満を抱きながら、あるいは罪の意識にさいなまれながら“迷える子羊”の生活を送っています。

## 5. 行動に、もっと乱れを

ここで一つの提案をします。感性をもっと大切にしようというのです。感性は乱雑なものですから、人間の行動がもっと乱れたものになります。となると、しかめ面をして、すぐに反対する人があるでしょう。しかし、表現を変えて、もっと規制を緩やかなものにしようと言えば、賛成が増えます。勉強がいやな子は無理に受験勉強をして大学に行く必要はないし、夫婦の間でどうにもならない溝が出来たら、さっさと分かればいいという、ごく当たり前のことです。しかしこの様な感性的選択によって、私達は非常に大きな不利益を被り、また社会の崩壊にまでつながるのではないかという不安があります。昔は確かにそうでした。しかし、現在の社会は強い技術で守られており、少々のことではビクともしません。それでも心配だという人のために、行動社会学とでもいうものを始めたらどうでしょうか。これは個人のある行動が、社会全体にどのような影響を及ぼすかという事を調べるものです。社会がひ弱で、人々がかろうじて生きているようなときに、若い人が働かなくなれば、社会はいっぺんに潰れてしまいます。また、女性の社会への進出が認められていない社会では、離婚は、女性にとって死の宣告になります。しかし現在の社会は、ずっとしっかりしています。行動社会学が十分な成果を上げれば、みんなも安心して感性的選択をするようになります。そしてこれこそが、技術の社会への貢献なのです。

世の中には、謹厳実直と言われる行動をする人がいます。そして、このような人が尊敬的になっています。沢山の人が、その人の行動を真似します。しかしなぜ、そのような行動が貴重なのでしょうか。社会の平穏を保つために、その種の行動が必要なのだとされるでしょう。しかし今では、もっと自由に、思いのままに振舞っても、社会が崩れる心配はありません。明らかに、我々は、もっと自由な倫理を必要としているのです。

(2013. 7/26 最終更新)

## 424-3. 遺伝と進化

### 0. はしがき

今回は遺伝と進化の問題を取り上げます。遺伝の研究はメンデルから始まったと言われていますが、最近になって、分子遺伝学が目覚ましい進歩を遂げました。それでもまだ分からないことは多いようです。遺伝とか遺伝子の研究と言えば複雑な分子構造のかたまりで、私のような素人には手も足も出ないのですが、ここでは遺伝という現象をどのように考えることが出来るかという、いわば、遺伝について一つの論理的なモデルの構築を目指します。別の角度から見れば、遺伝には秩序と乱雑、必然と偶然とが絡んでいることは誰でも認めることです。そこで乱れ学を基礎にして、新しい理論を提案します。文章の所々に断定的な記述がありますが、それは私の意見であって、客観的に認められたものではないことをお断りしておきます。

### 1. 遺伝要素

親から子への遺伝は基本的には情報伝達の一つに他なりません。父と母との遺伝子がどのような割合で、またどのような機構で、生まれてくる子に渡されるのかということは、未だはっきりしませんが、そこには一定の法則は無く、強い乱雑さが働いていることは確かです。同じ両親から、男と女はもちろん、違った外観、性質を持った子供が生まれます。そして世代が続くにつれて、更に色々な子供が生まれます。親がどのような子供を産もうかという選択の自由は全くありません。その意味では、神様が“サイコロを振る”のです。それによって生まれる赤ん坊に数多くの変化が出来、人間の社会が賑やかになります。遺伝に厳格な一定の法則があるのでしたら、人間社会は味の無い、退屈なものになるでしょう。乱れの重要性がここにあります。

遺伝を利用してよりよいものを作り上げることが出来ます。植物では美味しい米として有名な“こしひかり”などもあり、動物では走るためだけに作り上げられた“サラブレッド”という傑作があります。最近では遺伝子の操作によって、人間に都合の良い植物も開発されていますが、私は人間が過度に自然の摂理に立ち入ることには反対です。

赤ん坊が両親から受け継ぐ遺伝情報の一つ一つを遺伝要素と呼びましょう。遺伝子とか、遺伝質という言葉もありますが、これらの言葉は色々な意味に使われますので、誤解を招き易いのです。ここでは、遺伝子は無数に近いほどの沢山の遺伝要素から成ると言っておきましょう。

まず、要素を二つに分類します。肉体的要素と精神的要素です。肉体的の方は、背が高い、色が白い、などと、見ただけですぐ分かるものから、胃腸が弱い、心臓が強い、癌になりやすい、などと、見ただけでは分からない要素があります。

一方、精神の方は、気が強い、おしゃべり、弱気などから、絵が上手、抽象的思考に秀でている、などがあります。この両方の要素がはっきりと分かれているかどうかには疑問があります。昔から“病は気から”という言葉があります。しかしこの点では個人差があります。強い気持ちで病気を抑えつける人もあり、病気のためにすっかり気力を失う人もあります。ここでは、肉体と精神の遺伝要素には弱いつながりがあるに違いない、とだけ言っておきましょう。

## 2. 遺伝要素群の形成

遺伝要素の集まりを考えてみます。要素は基本的には乱雑に、独立して存在するのですが、非常に屢々幾つかの要素が集まって、ある構造を持つことがあります。これを要素群と呼ぶことにしましょう。これは乱流の場合の秩序運動とよく似ています。この遺伝要素群の考え方が、私の遺伝の議論の核心です。要素は材料であり、要素群はそれらを纏めた作品です。要素群には、大きいものや小さいもの、緊密に結集したものや緩いつながりのものがあります。ここで要素群の大きさと強さを定義します。秩序を持つ要素群は、それが対象とする事柄によって大きさが違います。最も大きい要素群は、体の全体像を決めるものです。手が2本、足が2本、そこそこの背の高さ、体重などで、それらを決めるための群は沢山の要素から成り立っています。そして、両親からのこれらの伝達は完全で、決して間違ふことはありません。これを強い要素群と呼んでもよいでしょう。極端に強い外力が働かなくてはこの強い要素群を変形したり、破壊することは出来ません。以前にサリドマイドという薬の影響で、手の短い赤ん坊が生まれたことがありますが、これなどはよほど強力な破壊作用を持つ薬だったのでしょう。大規模な要素群は体の全体像を支配し、中規模な要素群は目や鼻のような体の部分を決定し、小規模な要素群は内臓の微細構造を規定します。これらの要素群は別々に存在するのではなくて、階層的な構造を持っています。それを遺伝情報スペクトルと呼びましょう。横軸は要素の支配する規模で、縦軸はそれを構成する要素の数です。このスペクトルで遺伝情報の統計を記述することが出来ます。このスペクトルは乱流のスペクトルに似ています。スペクトルは個人に固有のもので、同じスペクトルを持つ人が現れることはありません。

これらの要素群はお互いに情報を交換し合って、矛盾しないように統合されています。これは形象（パターン）の形成です。クラスタリングと呼んでもいいでしょう。この形象は遺伝子を分子毎に分析する、化学的なやり方では捉えることは出来ません。

強い要素群は間違いなく子に伝えられますし、子が成長しても壊れることはありません。しかし、弱い遺伝要素群は親から確実に渡されるかどうか分かりません。また成長につれて変質する可能性があります。例えば若いときに正常であった細胞が、成長につれて癌化することがあります。精神面では“十（とお）で神童、十五（じゅうご）で才子、二十（はたち）過ぎれば唯の人”という早熟、早老がありますし、かと思えば“大器晩成”とあって、年をとるにつれて才能が大きく開花することもあります。

## 3. 子は親に似るか

赤ん坊が生まれたときに必ず始まるのは、この子が父に似ているか、母に似ているかという議論です。あそこは父に似ている、ここは母に似ていない、と際限なく続くのですが、それらは外見上のことで、体や脳の中がどうなっているかは、知るよしもありません。成長するにつれて、精神的な遺伝が明らかになります。ここでの精神的という言葉は才能だけでなく、精神活動のすべてを含んでいます。例えば、綺麗好きとか、我が儘とかいうものなども含みます。

ある両親からどのような子供が生まれるかということは、偶然に支配されます。子供がどの部分を父から、どの部分を母から受け継ぐかは全くの偶然のように見えます。しかし両親と全く違った子供が生まれることは

ありません。即ち、この遺伝の過程は“制限された偶然”なのです。ここで偶然度という考え方を導入します。ある過程が全く必然的に進むとき、偶然度をゼロとします。1 + 1 = 2 という過程では偶然度はゼロです。しかし、たまに行ったニューヨークの街角で、卒業以来初めて旧友に会った、というのは大きな偶然度です。それをほぼ偶然度1と考えましょう。1から偶然度を引いた数が必然度です。乱雑という言葉は場の状態を表すもので、偶然というのは過程を表現する、全く違った概念ですが、両方は親戚関係です。世代間遺伝の偶然度は0.5付近でしょう。それで、場合によっては片親にそっくりだったり、両方の平均を取っているようだったり、また、どちらにもあまり似ていなかったりするのです。

遺伝要素は混合によって際立った結果を生みます。例えば美しい少女は、どのようにして誕生するのでしょうか。美人であるには沢山の要素が必要です。顔が適当な大きさと形をしている、目がぱっちりとした涼しい、鼻が程良く高い、口がひどく大きくない、皮膚が白くて滑らか、等々です。これらの要素が揃って、秩序化した時に美人が生まれます。元々これらの要素は独立ですから、必要な沢山の要素が揃う可能性は高くはありません。美人がどこにでもいるわけではないのです。しかも親が同じ遺伝要素群を持っている必要はありません。偶然の重なりによって作られた多数の要素群が美人を作るのです。

#### 4, 進化の機構

世代間遺伝を繰り返しているうちに、遺伝要素群がある方向に強く変化して、必然度を大きくするようになることがあります。同じ親から生まれた子も、兄は浅黒く、弟の方は色白という組み合わせも珍しくありません。この皮膚の色を支配する遺伝要素群は弱くて、ちょっとした偶然で、変わってしまうのです。しかし例えば黒人種と呼ばれる人達には黒い子供しか生まれません。これは皮膚の色を司る遺伝要素群が何かの理由で非常に強くなって、黒い皮膚が必然的に現われるようになった為です。集団的遺伝です。人類の長い歴史の間にはこのような遺伝要素群の強化、あるいは弱体化が、屢々起きたに違いありません。しかしすべての変化を進化と呼ぶには、いささかの逡巡を感じます。それはこれらの変化によって、必ず良い方へ進むとは限らないからです。集団的遺伝が、必ず目的的に行われるという証拠はありません。さっきの皮膚の色にしても、暑い、太陽の直射光の強いアフリカに住む人々にとって、黒い方が有利であるかどうかは分かりません。遺伝子群は外部からの乱雑な刺激によって乱雑に変化する可能性を孕んでいます。しかしその変化が必ずしも好ましいものとは限らないのです。場合によってはその集団の絶滅につながります。例えば大きな謎である、恐竜が絶滅した原因としては、環境の変化に対応する有利な遺伝子群の形成が、たまたま行われなかったということが考えられます。ここで指摘したいのは生物のあらゆる形態と機能が、生存と生殖の便宜のためだけにあるのではないことです。右の写真は、浅瀬に住む“潮招き”という蟹の写真です。すぐに分かるように、振り上げられた、はさみはもう一つの、下の方にある小さなはさみに比べると、ひどく大きいのですが、そのアンバランスが、どんな効果を持っているのかは、よく分かりません。よほど害にならなければ、何の役もしないそんなものがあっても、一向に差し支えないのです。

一方では要素群が分解して、別の形の、強い遺伝要素群が作り上げられたこともあったに違いありません。それは変化する環境に対する順応性と考えられます。例えば気温の低下に対応して、体毛が増えるという単純なものから、体内の熱が逃げないように、皮膚構造を決める遺伝子群が変化することがあります。要するに遺伝子群の変化は乱雑で、生存に有利な方にも、不利な方にも変わりうるということです。さらに昔の祖先には思いも及ばないような科学的才能が、世代間の遺伝を繰り返して、遙かな子孫の代になって開花することがあります。改めて雑然や偶然の働きに目を見張る思いです。

動物の進化という言葉は、その動物が、より安全に生存、生殖出来、より高級な仕事が出来ようになることを意味しています。その進化がどのようにして起きたのかについては長い論争の歴史があり、関連した本も沢山出版されています。ここではそれらを紹介する余裕はありませんから、私の結論だけを述べます。



遺伝子群は外界からの刺激によって、常に乱雑に変貌していますが、それに選択を加えて好ましい方向性を与えるのは、人間の願望と意志です。そしてその結果を保証するのは、環境への適応です。人間はいつでも、今よりは良くなりたいたいという願いを抱えています。肉体的には、より速く走る、より強い力を出す、などです。それはより多くの獲物を捕まえたり、より広い畑が耕せるという生活上の優位につながります。また精神的には、情報を交換するために言葉を作りたい、数を数えたいなどという願があります。これらの願望によって体内の遺伝要素が願望を満たす方向に組織化されて、要素の群を作ります。例えば、色々な音を出せるように口の構造が変化し、人間の発する音を分析出来るように耳と脳とが変わっていきます。このような組織化がないと進化はありません。そして変化した結果が環境に受け入れられると、変化が固定されて強い遺伝要素群になって、子孫に伝えられるのです。遺伝子群は不断に乱雑に変化しています。これをそのままに受け入れたのでは、一方向への変化、即ち進化はありません。単純な適者優勢の原理だけではないのです。これが私の考える進化の機構です。

(2013. 8/17 最終更新)

(「ながれだより」186号 2004.12/1を修正)

## 424-4. 教育

裸で、頭の中も空っぽで生まれた赤ん坊が、人間になるためには教育が必要です。このことは、どんな時代になっても変わりはありません。しかし、何をどのように教育するかについての考え方は時代と共に変わり、固定したものはありません。今回は小、中、高校レベルの、いわゆる初等教育について考えます。そして思い切った提案をします。

### 1. 初等教育の理念

親のお陰で、少しずつ言葉が分かり、喋ることの出来るようになった子供に、どのようにして教育を与えるかについては、沢山の議論があります。最大の論点は詰め込むか、放任するか、です。子供の新鮮な脳は新しいものをどんどん吸収しますから、子供のうちに有益な情報を詰め込まなければならないという、詰め込み主義の人がいます。これは秩序派です。一方では反対に、何でも経験して勝手に吸収すれば、そのうちのどれかは将来の為になるはずだ、という放任主義者がいます。これは乱雑派です。私の主張は後の方です。子供は何かの折に強い感銘を受けて、それが一生を支配する事も珍しくはありません。この出会いは偶然で、雑然の中から選ばれるのです。親といえども、それを用意することは出来ません。子供を乱雑な、色々な目に遭わす必要があるのです。“可愛い子には旅をさせよ”というのはこのチャンスを与える必要を説いています。秩序立った、よく用意されたカリキュラムだけが、最善、最高の教育だと思うのは誤りです。

### 2. 初等教育の歴史

江戸時代の寺子屋や藩校に続いて、維新の後に明治政府は初等教育の為に、義務教育の名のもとに、小学校の網を国の隅々まで張りました。それは文字通り画期的なもので、あっという間に文盲が無くなりました。世界的にも自慢出来る仕事です。しかし一方では、この義務教育は当時の中央集権政治と結びついて、文部省による画一教育が、がっちり固まりました。教科書はすべて国定で、天皇の名で教えられました。驚くべき統制です。私も小学生の時、先生の授業のやり方に対して異を唱えたら、先生は“私は天皇陛下に命じられて、君たちを教育している。私に反対することは陛下に反対することだ。それでも良いのか。”と一喝されて黙ってしまった経験があります。

戦争に負けて戦前の教育に反省が加えられたとき、平等が強く前面に押し出されました。教育の機会均等です。差別はそれがどんなに小さいものでも毛嫌いされました。人間は全く平等に作られている、生まれや、親の財産によって子供を差別すべきではない、という崇高な哲学の所産です。私はこの考えに半分賛成で、半分反対です。賛成な点は、親の持つ何かの特権によって、子供を差別してはならないという点です。反対なのは

子供のすべてが同じように作られていると考えることです。小さい頃は分かりませんが、小学校も高学年になると、子供には明らかに得手、不得手がはっきりします。それは殆ど遺伝的なもののようです。数学が得意な子、文章の上手な子、体操が優れている子などがあります。数学でいい点をとる子供の方が、体操が上手な子より優れているとは、決して言えません。そのような比較は明らかに不当です。子供の持つ個性を認めないで、画一に教育するのは間違いです。早い話が、あるクラスで数学を教えているとき、何人かは、そんなことは先刻承知している、今更教えて貰わないでもいい、と言い、何人かの生徒は、先生の言っていることは何がなんだかさっぱり分からない、と言うでしょう。そんな子供達を一斉に教えることは、効率の悪い話です。おまけに、分からないと言う子供を“おちこぼれ”と称して差別することは犯罪的でさえあります。

### 3. 義務教育の放棄

明治政府が初等教育を重要な国民の義務として国民に強制したことは正しいと思います。当時は教育など要らないと思っている人もありましたし、生活のためには子供も働かさなくてはならない社会構造もありました。しかし義務という言葉で縛られると、無理をしても子供を学校にやるようになり、これがその後の我が国の発展の基礎になりました。

しかし時代は大きく変わりました。今では義務という言葉が無くても、自分の子供を勉強させなくてもよい、と思う親は日本には居ません。現在の社会の中に生きていくための、最小限の教育がどんなものか知らない親はいないのです。適当な費用で、その教育を引き受けてくれる学校があれば、義務などと言わなくても、親は進んで、そこに子供を通わせるでしょう。政府が義務教育という形で初等教育を独占して、何を教えなさい、何は教えなくても良いなどと統制する権利も、必要ありません。子供に画一的な教育を与えるのは国の責任だ、などという考えは、全くの時代錯誤です。

私はあえて提案します。ここらで義務教育という考え方を放棄することです。それによって政府による初等教育の独占という、悪い体制が破壊されます。子供が不登校になったり、いじめをしたりする根本的な原因はこの独占にあるのです。子供は嫌いなことを教えて貰わない権利を持っています。私の信念は、子供は誰でも必ず何かの優れた素質も持っており、それを見出して伸ばすことこそが教育の神髄です。無理矢理に画一的な教育を押し付けてはなりません。

### 4. 集団教育からの解放

時代が進んで、多くの子供が教育を受ける、いわゆる普通教育が要望されるようになると、個人教育ではとても追いつかないことが分かり、多人数対象の教育、即ち学校が作られました。よく組織された学校では一人の先生が何十人もの子供を教えることが出来る、効率の高いものです。しかし一方では子供が自分の受けたい教育を選ぶという、乱雑な機会が失われました。ここで私はもう一つの提案をします。それは集団教育からの解放です。

歴史的には昔の教育は個人教育でした。子供の教育は親の責任で、親か、または親代わりの人が一対一で教育をしました。今でも残っていますが、親父の遺言で“他人に迷惑をかけてはならぬ”“株には手を出すな”などというのは、この個人教育の最高のものです。東洋では儒教が教育の基盤を作っていましたが、どこに重点を置いて子供を教育するかは、教育者に任されていました。また、教育を受ける方は教育者を選ぶ自由があり、選んだ教育者の考え方に強い影響を受けました。この意味で、その頃の教育は個性的であり、社会全体から見ると画一化されていない、乱雑なものでした。昔は先生は神聖な職業で、優れた先生が沢山居ました。しかし残念ながら現在の先生は、デモ、シカの月給取り先生で、尊敬に値する先生はすっかり減ってしまいました。今の学校教育は子供の欲求を受け止めることが出来ません。詰め込もうとすると登校拒否が増え、ゆとり教育を掲げると学力低下が起こります。はっきり言って、にっちもさっちもいかないのです。こうなると、革命的な変更をするよりほかありません。

### 5. 個人教育システムの構造

私は学校というものを廃止して、個人教育を提案します。そのためには膨大な数の先生が必要になると思うかも知れませんが、それは違います。個人教育は、主としてインターネットで行われるのです。技術の進歩で、教育を受けるには必ずしも学校という場所へ行かなくてもよくなったのです。このことは、既に外国語会話の

練習などでは始まっています。これをもっと拡張して、コンピューターで個人の特徴に応じた教育を与えるのです。それによって、自分の将来に殆ど役に立たない数学や英語の勉強に悩まされることがなくなります。そして小さいうちから個人の才能をいくらでも伸ばすことが出来、若いうちに創造的な活動をすることが出来るようになります。

具体的な構想について述べましょう。まず現在の6-3-3制度から脱却します。初等教育に12年が必要としても、それを小、中、高の3つに分ける必要はありません。8年で止めても良いし、15年かけても一向に差し支えはないのです。少し年をとって、また勉強を始めてもいいのです。カリキュラムは低年齢用はまとまった、秩序的なもので、年齢が上がるにつれて個人の選択の自由を拡げた乱雑なものになっていきます。

子供は自分の部屋でディスプレイに向かい合って、双方向通信で自分のレベルに合った授業を受け、先生の質問に答えます。先生はその答えをもとにして生徒の進捗を知り、次の授業をします。勉強が好きで、勉強に向いている子供は、どんどんと授業をこなしていきます。それほど好きでない子供も、将来の社会生活に必要な勉強だけは、こなすべきでしょう。

県や市が必要な講義を準備します。これはかなり大きいデータベースとなります。そこから静止画や動画を豊富に提供することが出来ます。現在の教科書のインターネット版と想像してください。大きな違いは、先生と生徒がいつも一対一の会話をしていることです。先生は生徒の進捗に応じて、速くもゆっくりでも、授業を進めます。知能ロボットが先生を助けます。簡単な小テストの採点などはロボットがやってくれ、生徒の進捗を報告します。場合によっては、ロボットが先生に代わって授業することも出来ます。授業が進むにつれて子供個人の得意や好みが分かりますから、細かい授業設計をすることが出来ます。インターネットの技術はもっともっと進歩しますが、現在の程度でも十分にやれます。優れた先生の作る授業は評判を呼び、録画されて、沢山の生徒がアクセスします。勉強がある程度進んだ、と判断されたときが初等教育からの卒業です。実社会に出てもいいし、専門の学校に行ってもいいし、大学に行ってもいいのです。偉くなるためには、いい大学に行かなければ、という考え方は捨ててしまわなければなりません。

このような教育は沢山の長所を持ちます。その一つは、子供が、自分は何が好きで何に向いているかを、自分で不断に考え、先生に相談出来ることです。現在の、大学を出ても自分が何をやりたいのか分からない人間が沢山いるというのは、押し付けられた義務教育の欠陥です。

もう一つは生涯教育です。社会に出た大人が、学力として欠けている部分を自覚することがあります。そんなときに、現在では本を買ってきて読むか、カルチャースクールを探すのですが、よほどの努力と、時間を割かなければ勉強は出来ません。しかし、このインターネット学校では、自宅で朝早く起きたり、夕食の後で先生を呼び出すことも出来ます。

## 6. 子供園

子供が自宅に閉じこもって、一日中ディスプレイと睨めっこをしているという形は、好ましくはありません。子供は友達が欲しいし、友達と遊びたいのです。この遊びは社会に出る準備であり、人格の形成に大きな影響を持っています。そのチャンスを与えるために、“子供園”とでもいうものを作ります。それは公立でも、私立でもいいのです。ここには学年もなく、勉強の競争もありません。色々なスポーツをしたり、絵を描いたり、合唱団を作ったり、芝居をしたり、何かの話題について討論会を開いたりします。昔から子供達が学級や学年を超えて、何となく遊びのサークルを作って、年長者が小さい子供の面倒を見るという形が自然に出来上がっていました。子供の中から湧いて出るアイデアを尊重し、出来るだけ余計な干渉をしません。サッカーの好きな子はクラブを作って、よそのクラブと試合をやってもらいましょう。公立では公務員の専門コーチが居て、必要な指導をします。私立では特色のある子供園を作ってお客を呼びます。ここは子供達が自分で作る子供の社会です。

## 7. 高等教育

最後に高等教育、即ち大学レベルの教育制度にも触れておきます。戦後の教育改革で、旧制高等学校以上の教育機関はすべて大学になりました。曰く芸術大学、曰く体育大学、などです。これらは画一が好きで、頭の硬い文部省の小役人がしたことですが、これは大学というものの持つ特性をひどく歪めます。大学は学問を教えるところです。芸術が学問と言えますか。絵を描いたり音楽を作曲することは結構なことで、これらは学問

と肩を並べる優れた仕事ですが、絵を描いている人を学問をやっているとは言えません。芸術と学問の教育は自ずから違います。一般の大学などの枠を離れて、自由に絵や音楽を学べる場を作るべきです。体育大学も同じことです。これが私の好きな乱雑化につながります。なにも大学という名前で、高級なもののように装う必要はありません。この様な名前付けは、大学以外の学校に対する差別につながります。

最近はまだ、法科大学院というものが現れました。これは法律の実務を行う人を養成するところで、研究を主とする大学院とは全然違います。これでは、折角出来上がろうとする大学院のイメージを台無しにしてしまいます。法律学校と言えれば良いではありませんか。大学院に入っている人は偉い、只の学校ではつまらない、などという偏見は潰さなければなりません。

もっと進んだ研究をやりたい人のためには、大学院を用意します。そこでは、いくつかのグループで今の大学院に相当する研究を行います。

(2013. 6/7 最終更新)

(「ながれだより」187号 2005. 1/1 に加筆)

## 4 2 4 - 5 人生の中の乱れ

今回取り上げるのは、人間の一生に関係した、どちらかと言えば個人的な問題です。我々の一生には色々な問題がありますが、今回は乱雑と秩序という考え方で人生を見ていきます。

人生をどのように送るかについては、昔から数え切れないほどの教訓があります。その中で最も賛成を得られそうなのは、人生の目的は幸福(しあわせ)になることだ、というものでしょう。しからば幸福とは何かということになると、意見が分かれます。幸福論などという、しっかりした本もありますが、幸福についての他人の説教を聴いてみても、自分が幸福になれるとは限りません。もともと誰でもが賛成するような、幸福の秩序的な定義を求めるのは無理です。幸福は乱雑に散らばっているものです。自分が、これが幸福だ、と思えばそれでよいのです。他人に幸福だと思って貰う必要はありません。

### 1. 誕生

“おぎゃあ”という声と共に人の一生が始まります。この赤ん坊の将来がどんなものになるのかは、誰にも分かりません。赤ん坊は生まれたばかりでは、泣く、眠る、オッパイを飲む、排泄をするだけで、それ以外には何も出来ません。しかし赤ん坊は無限の可能性を秘めています。いわばポテンシャルを親から貰ってきたのです。

子供は親を選べません。精神的な特徴も親から受け継いでいます。頭がよいとか、人に親切とか、物事に積極的とかという性質が遺伝かどうか、分からないところがありますが、全く無関係ではないでしょう。しかし、子は親にそっくりではありません。遺伝の過程に程々の乱雑さが入り込むからです。

もう一つは、どのような家庭に生まれるかということが子供にとっては全くの偶然です。それが裕福な家なら、経済的には楽な生活が保障されますし、自民党の代議士の長男であれば、将来の議員も確実です。一方では、経済的に苦しい家庭の子供は刻苦精励の大切さを学びます。それでは、人生の色々な時期を追ってみましょう。

### 2. 成長

子供の成長は、親から貰った遺伝子に全面的に依存します。小さい子供は親から受け継いだ通りに、大きくなるのです。それでは子供としての成長期は、いつまで続くのでしょうか。幾つになっても子供っぽい人もあり、早々と老成する人もあります。

赤ん坊が物心ついて来ると、まず発見するのが自分の周りの家族です。生まれたばかりの赤ん坊は天衣無縫な乱雑で、空腹であろうが、排泄であろうが、眠りであろうが、気に入らなければ泣きさえずれまいのです。やがて母親とはもちろん、父や兄や姉とも、うまくやっていかなければならない、何でも自分の思うままには

ならない、と悟っていきます。これが最初の精神活動であり、他人との干渉です。

母親が外で働いていると、幼児は保育園に預けられ、そこで社会的な生活が始まります。その衝撃の強さは相当なものです。今まで、いつもそばにいた母親がどこかへ行って、帰ってこないのです。ここで順応のうまさに差があることが分かります。この順応は、成人の後には人付き合いとなるのですが、ここにも持って生まれた才能、即ち遺伝が大きく関係します。幼稚園あたりになると、がき大将とその子分という関係が、はっきりします。

ここで、今から60年も前に、ある人から聞いた話を思い出します。それは戦争中のことで、その人は海軍の優秀な戦闘機乗りで、撃墜王と呼ばれた人です。その頃は教官として、若い戦闘機乗りの指導に当たっていました。その人は戦闘機乗りとして、いくつぐらいの年齢が一番熟しているかということをお話しました。その頃の戦闘機の戦いは、いわゆるドッグファイトで、空中で上になり下になりながら、後ろについて敵機を撃墜しました。中世の一騎打ちにそっくりです。3次元の空中で、しかも性能に制限のある飛行機を操るのですから、抜群の方向感覚、スピード感覚、それに冷静な状況把握が要求されます。その人の話によると、肉体の発達は25歳あたりがピークのようなことです。しかし実戦には経験が必要なので、それを加味して両方を総合すると、27歳あたりの人が盛りだろうと言いました。私はその話に強い感銘を受けて、今でもよく覚えています。この27歳という年齢は、ほかのスポーツにもあてはまるでしょう。もちろん、これには個人差があります。しかし、人間の成長に対して一つの指標を与えます。

### 3. 病気

人体をむしばむものとして第一に挙げられるものが、細菌やウイルスによる伝染性疾患です。感染症とも呼ばれるチフスやコレラを引き起こす病原菌は、そこら中に漂っているのです。そして、どこからか人体に入り込むこれらの病原菌の活動が毒素と呼ばれ、人体の秩序ある活動を阻害します。人体はそれに対抗して、秩序を維持しようとし、抗体を生産し薬の助けを得て、この毒素と戦い、元の秩序を回復することもあります。子供の時からこれらの菌にさらされていると、抵抗力が段々と強くなります。

10年以上も前にインドネシアでコレラだか、チフスだかが流行していると言われ、日本政府は訪問を差し控えるように、と注意を出したことがあります。騒ぎが収まって私がインドネシアを訪れたとき、“流行はどうだった”という私の質問に対して、現地の人は“病気になったのは日本人だけさ”と答えました。インドネシアの人々は幼いときから細菌にさらされているから抗体が出来上がっていたのに対して、清潔な環境の中で育てている日本人は菌に対して弱いのです。笑えない皮肉でした。どちらが最後まで生き残るのでしょうか。

アレルギーによる不快感は、人体の過剰反応として理解されていますが、伝染病に似ています。近年の花粉症は昔は無かったもので、環境や食料の変化による抵抗力の低下がその原因ではないのでしょうか。子供の時に受けた色々な菌やウイルスが免疫を作るワクチンのような働きをしているのでしょうか。病といえ、すぐ、医者よ、薬よ、と騒ぐだけが本当によいのでしょうか。

#### 臓器不全

感染に依らない大病は心筋梗塞、脳卒中などの臓器不全です。これらは死亡原因では大きな部分を占めていますが、どうして起きるのか分かりません。遺伝の影響が大きいとも言われています。日常に血圧が高かったり、糖尿病であったりするものが大部分ですが、発症がそれらによっていると、はっきりと分かるわけではありません。血糖値が大きくても必ず病気にかかるとは限りません。その逆になることもあります。このあたりに乱雑が入り込む余地があります。

#### 癌

世界中の人類の生命を奪う恐ろしい病気、それが癌です。精巧に見事な秩序で作られている人体が、遺伝情報に反して、異常な細胞を作り始めることがあります。これが癌の初発です。胃癌、腸癌、肺癌等があり、癌にならない臓器を探し出すことが難しいほどです。その中でも乳癌は、遺伝経路が確認されたと言われています。しかしすべての癌が遺伝で説明出来るわけではありません。遺伝情報の再生の中に乱れが発生したのか、情報は正しいのにその通りに細胞が出来なかったのか、どちらかは分かりません。また、その乱れがどのような機序で起きるのかは分かりませんが、異常細胞は烈しく増殖して、その部位の器官の機能を妨害します。しかし、癌の成長の初期には健全な細胞が機能を肩代わりしますし、機能の失われ方が小さいので、症状としては表れません。この潜伏期を線型成長期と呼んでも良いでしょう。臓器の機能が殆ど失われないからです。癌

がある程度成長すると、症状として自覚されます。これは明らかに乱雑化の始まりです。薬や放射線によって癌細胞を人工的に攻撃することも出来ませんが、それは必ずしも成功しません。副作用ばかりが目につくこともあります。栄養を吸収して、十分に成長した癌細胞は分裂して、人体の色々な部位に転移し、その機能を破壊します。そしてその破壊がある限界を超えると、生命を維持することが出来なくなります。この癌という病は、人体の秩序を乱雑に変える代表的なものです。

#### 4. 思春期

幼稚園や小学校に行くと、社会的な付き合いの方法を覚えます。日本の教育の特徴は友人関係の重視です。これが拡大すると、友人がいないと生きていけないほどになります。これが、いじめによる自殺の原因となります。友人にいじめられ、仲間に入れて貰えないと、生きていく価値を見失うのです。これに関連しているのが、教師の画一化の強制です。“みんながやっているのに、あなたは何故同じ事をやらないのですか”というわけです。この強制は議論を必要としない当然のこととされます。一方で、創造力を養おうというスローガンと平気に並立されているという矛盾があります。それに対する反抗の強い子と、弱い子があります。前者は自立志向の強い子で、後者は体制順応型の子です。自我を確立した反抗型の生徒は乱雑の代表として、邪魔者扱いにされます。

この時期の子供に大きくのしかかるのが受験です。評判の良い学校に入ることが出世の唯一の道だ、という信仰はまだ衰えていません。早いところでは幼稚園から入学試験があり、小学校、中学校、高等学校と繰り返されて、最後の仕上げが大学の入試です。勉強なり教育なりは、すべてこれらの試験で支配されます。立派な個人の完成という教育の理想を唱える人は、物知らずの戯言といって馬鹿にされます。

発育の過程で最も大きな事件は性の目覚めです。小学校の高学年あたりになると、そろそろ異性の存在が気になります。それが性の目覚めです。動物として当然の、次世代を生産することが可能になるのです。このとき、男女を問わず、精神的に不安定になります。これが思春期です。遺伝子の中に異性を追いかけてよ、という指令が書きこまれているのです。多くの人は、感情を抑えることでこの時期を乗り越えますが、それがうまくいかない人がいます。情緒が大きく揺れ動き、悩み、自らを閉じこめて暴力的になり、社会にも親などにも反抗します。客観的には優れた地位にあり、あの人、と思われる人がとんでもない性犯罪を犯すことがあります。自分を制御することが出来ないのです。最後には人を殺すような重大な法律違反を犯したり、自らを殺すような極端に走ることもあります。これは人生の乱雑時期と呼ぶことが出来るでしょう。いわゆる“シュツルム・ウント・ドラング”時代です。しかし、この時期は恐ろしいほど創造的な時期でもあります。いわゆる早熟の天才は驚くほどの良い仕事を残します。このことは洋の東西を問わず、歴史に残されています。人間を動物の一種だと見れば、この時期は生殖シーズンの始まりです。動物の個体は生殖と保育の義務をはたしたあとは、間もなく死んでいっても良いのです。しかし人間は医術というものを発明して、恐らくは遺伝子によって予定された寿命の2倍以上も長生きすることになりました。その長い一生を設計するには、本能を抑えて、社会的な訓練を受けねばなりません。女性は恐らく15歳頃から子供を産めるのですが、現在の社会では、それでは子供を育てていくことは出来ません。また道徳が乱雑な性交渉を制約します。

#### 5. 結婚

ある年齢になり、成長した男女がお互いを求め合うのは動物の本能として当然で、これは遺伝子の中に、しっかりと組み込まれています。恐らく人類が出来上がった頃には自由自在に性行動をしていましたが、歴史のいつの頃からか、結婚という形を取るようになりました。それは親子の関係から特別な感情が生まれて、一緒に住みたいという欲求が強くなったからと、生活のやりかたが変わったからでしょう。

結婚というものは本来、分業の宣言でした。力が強く、運動能力も優れている男が外に出て、狩猟などで食料を獲得する。場合によっては攻めてきた敵と戦います。女は家の中で、出産、授乳をはじめ、言葉などの社会生活に必要な教育を子供に授ける、という具合です。しかし考えてみると、見ず知らずの他人であった男と女が一緒になって生活をするというのには無理があります。生活の糧を獲得する手段が体力でなく、知力であるような社会が出来てくると、この分業は女性を差別し、貶める根源であるように解釈されました。分業が必要でないなら、結婚という形式には理論的な根拠がありません。愛し合っている男女が一つの屋根の下で一緒

に暮らすのはもちろん自由ですが、結婚を永続させるような色々な法律には存在理由がありません。男女が子供を作る前にまず考えることは、自分たちが年を取った時に面倒を見て貰おうという、功利的なものです。しかし老人の面倒は社会全体で見るべきものだ、という考えが支配的になり、それに応じたシステムが出来上がれば子供の必要が無くなり、大変な精神的、肉体的、経済的な犠牲を強要される子育てからも解放されます。現在の日本は、この筋書き通りに進んでいます。しかし子供のいない社会がいつまでも存続するはずはありません。この考え方は明らかに滅亡への行進です。

## 6. 加齢

成長はある年齢で止まり、精神も年をとっていきます。それを耳障りよく表現するのが加齢という言葉です。生まれたときに親から受け取った遺伝要素そのものは成長しても変化することはありません。変化するのは要素が組み合わさって作られる群です。このことは前に議論しました。群には離合集散があります。その原因は二つです。

一つは環境です。生まれたばかりの赤ん坊はまず両親や、兄姉という環境にさらされます。次に幼稚園や学校で先生や友達に揉まれ、環境に順応することを強要されます。社会に出ても、自分の主張ばかりをしていたのでは生活してはいけません。欲しいことを我慢することも学びます。これが遺伝要素群の変化に結びつきます。

もう一つは個人の頑張りです。環境が受動的なのに対して、これは主体的です。肉体的にはもっと速く走りたいと思って練習を重ねると、筋肉や、脳からの指令が足を速く動かすように協力して、それに都合の良い秩序立った遺伝要素群を形成します。群を作る素材は親から受け継いだ遺伝要素です。乱雑から都合の良い秩序が作られれば、優れた要素群になり、天才と呼ばれるようになります。天才は努力の結晶だと言われるのは、このことです。良い要素を親から受け継いでも、努力がなければ大成しません。反対にいくら努力をしても、必要な要素を受け継いでいなければ天才になることは出来ません。

もう一つ考えられることは、個人の体の中で次にどのような組織を作るかという時に、乱雑が入ってくることです。遺伝情報という与えられた設計図の通りに新しい組織を作る能力があるかどうか、という問題です。年齢を重ねることによって、遺伝情報の命ずる通りの組織を作る能力も低くなります。これらの原因で個人は時間的に変化していくのです。その極端な例が癌の発生です。もともと設計図にはなかったような馬鹿げた細胞を作ってしまうのです。これは乱雑の結果です。

誰でも、いつも、もっと豊かな毎を送りたいと思わない人はいません。豊かさの実感は人によって違います。しかし殆どの人にとっては、豊かさは地位と金です。地位が高いと、いやな人間にこき使われることがあります。お金があると大抵のことは出来ます。そこで、それらを獲得するための競争、即ち出世戦争が始まります。会社に就職すると、他人より早く、課長、部長、重役と梯子を登って行くことが人生の目標になります。

人生の青春時代を過ぎると肉体的な不調が起きてきます。どんな機械でも長い間、運転を続けると、どこかに故障が発生するものです。まして人体は超精密機械ですから、故障が色々なところに起きます。それが加齢の始まりです。その始まりは人によって違う、乱雑なものです。故障には二つの側面があります。まず第一は遺伝情報の変化です。いわば設計図が何回も書き換えられる間に、間違っただけのものになってしまうのです。別の表現では、遺伝情報の中に乱雑が忍び込むのです。情報の伝達に絶対に間違わない、ということはありません。第二は的確な指令が与えられているのに、作る方がその指令を実行出来ないという場合です。

## 7. 老衰

老衰は自分がもはや社会での現役ではない、という自覚を持ったときに始まります。また制度としての定年退職が否応なしに、この自覚を強要します。今まで普通のことと思っていた勤め先から、疎外されていると感じた時の衝撃は、大変なものです。自分が社会に貢献し、その対価として報酬を受け取るという関係は大きく揺るぎます。それと同時に、今までと違って身体の運動が不如意になっていることを発見します。この老衰に適應していくのは、かなりの仕事です。人によっては心のバランスを喪うことがあります。今まで会社などに縛り付けられていたのが解放されて、毎日が日曜日になるわけですから、喜んでしかるべきなのに、虚無感ばかりが広がります。人間は長年、秩序の中に置かれていると、それが当然という心理状態になって、自分が主

体となる乱雑生活に対応出来ないのです。

精神的な乱れは徐々に強くなります。はっきりしたものとして、まず記憶力の減退がおこります。うんと昔のことは覚えているのに、昨日起きたことが思い出せません。記憶力というものは生まれつき、もしくは遺伝的なものかも知れませんが、他人から見ても、自覚症状としても忘れっぽくなります。それと同時に判断力も衰えているのかも知れませんが、そっちは表面に出にくいものです。どちらもが“もうろく”と呼ばれるもので、徐々に死に近づいているのです。この有様を乱雑度の増加と呼んでもよいでしょう。その乱雑度がある線を越えたとき、それは“老人性痴呆”という段階に入ります。いわば、精神的にはほとんど死んだ段階です。いかに進んだ医学を持ってしても、これを元のように回復することは出来ません。

## 8. 死

人の一生は死への行進です。交通事故や細菌感染による死を除くと、肉体のどこか重要な部分が故障して、それを補修する能力が追いつかないというのが死の到来です。死ほど怖いものはありません。その中身は死の前に予想される烈しい苦痛と、死んだ後にひよっとするとあるかも知れない、死後の世界への不安です。

乱れという視点から見ると、死というのは秩序からの乱雑化です。色々な目的のために秩序を保って結合していた細胞が、乱雑な、ばらばらな物になってしまうのです。肉体が言うことを聞かなくなると、精神も死んでしまうしかありません。死はいつやってくるかわかりません。その意味で乱雑なものです。しかし修行によって、“死を視ること、帰するが如し”（死ぬのを、うちに帰るように思っている）という境地に達することが、万人の理想です。

## 9. 霊魂

死んだ後でどうなるかは誰も持っている疑問です。生きている間に良いことをした人は、肉体は滅びるけれど、魂は極楽に迎えられ、そこには楽しく、安楽な、次の世界が待っている、というのが洋の東西を問わずに信じられていることですが、それには証拠がありません。

(2013. 5/10 最終更新)

(「ながれだより」192号 2005. 6/1 に加筆)

# 424-6. 乱雑の功罪——個人の一生

## 0. まえがき

乱雑という状態は悪い印象しか与えませんが、考えてみると、良いこともするという話です。色々な分野がありますが、今回は個人の一生に関係した問題を取り上げます。

## 1. 赤ん坊

人間の一生は母親からの誕生で始まります。生まれたばかりの赤ん坊は個人の特徴を強く持っている、乱雑な存在です。赤ん坊は無限の可能性を持っています。天才的な芸術家にもなれば、優れた学者にも、政治家にもなれる素質を秘めています。しかしその可能性は、はっきりとは認められてはいません。両親にとって、赤ん坊は、可愛くはあるけれども、面倒くさい、手間のかかる、我が儘な存在なのです。どのように育てればよいのか、初めは、親たちはみんな未経験者です。何か簡単な育児法を探します。そして個性をつぶして、よい子を作り上げる、お手軽な子育てが始まるのです。赤ん坊は画一的な秩序に向かって、育てられます。そして、気の付かない間に赤ん坊の個性が失われて、平均的な人間へと作られていくのです。育児ハンドブックは、いかにすれば出来るだけ手を抜いて、簡単に赤ん坊を人並みに育て上げられるかを教えます。女性の社会進出が盛んになり、忙しい母親はどうすれば赤ん坊を手の届かない育て方をすることが出来るかを、教えてくれます。赤ん坊は、同じ年頃の仲間とどのようにして仲良くやっていくかということだけを学んで、将来、伸びる

可能性のある乱雑さを失っていくのです。この時期の子育てには、もっと個性の伸長が配慮されるべきではありませんか。みんなと同じようなことを、そつなくこなすようにしつけるのは、将来に大きな損失を招くことになるでしょう。最初に持って生まれた、無限の可能性は失われてしまいます。時間と労力を節約して、育てやすい子供を作ることにだけを奨励するハンドブックは、人類進歩の敵です。

## 2. 幼年期

人間を秩序の網に取り込んで、乱雑さを失わずような教育は、幼稚園、小学校で念入りに行われます。それはまんべんのない“お勉強”です。生徒が何に興味を持つか、どのような得手を持っているかを全く無視した、画一的な詰め込みです。

義務教育の目標が、社会に出たときに自分で最低限に生活が出来るような人間を養成することにあるわけですから、最低限、教える要目があることは否定出来ません。しかし、小学校の教育はそれを越えていることがあります。例えば、校庭に整列して校長先生の訓辞を聞いているとか、運動会で、友達とどちらが速く走るかを調べたりすることが、社会人として必要な訓練であるとは思えません。生徒の中には、絵を描くのが好きな子や、走り回るのが得意な子などがありますが、誰も彼も一律に教育されます。人間が生まれたときには乱雑であることや、その長所を伸ばすことがその子の幸福になるかも知れないことを、全く無視しています。聞くところに依れば、江戸時代の寺子屋では、個性を伸ばすような教育がされたという話ですから、現在の教育は、“角を矯めて牛を殺す”ような教育のようです。幼稚園で、丸い、常識人になるように教育されることの損失は、計り知れません。

## 3. 少年期

言葉が喋れるようになり、世の中が少し分かるようになると、小学校への入学です。これは国家を挙げての平均化教育です。どの生徒も一斉に教育を受けます。教育の効率を上げるために、30人も40人も生徒に一斉に授業をします。この一斉化こそが、子供が大きくなって、付和雷同するのに役立っています。違った意見を持つ生徒を抑圧して、なるべく、生徒一同が同じ考え方になるように導きます。これが、おとなになっても、自分の意見をはっきりと言わないほうがいいんだ、という気持ちを暗黙のうちに培うのです。この教育が“お上”が人民を治めるのに役立ちます。

教科の細かいことはよく分かりませんが、記憶に重きを置くことは放棄すべきです。頼朝が幕府を開いたのが何年で、スペインの首都がどこで、といったことを覚える必要はありません。そんなことは携帯電話で、すぐに分かります。記憶の類はそちらに任せて、各個人の創造的な方面をのばす教育が必要です。

平均的な優等生の姿があって、生徒を誰でもそれに近づけるように教育します。私の経験を言えば、速く走ったり、高い跳び箱を跳んだりすることがなぜ重要なのか、全く理解出来ませんでした。運動会などで、いわゆる運動神経の発達した連中は、ご褒美の小さなリボンをいくつも胸に付けて、誇らしげにのし歩きます。私には何もありません。運動会などなければいいのに、と強く願ったものです。

小学校高学年になると、自分の将来についての関心が強くなります。社会というものがどんなものか、未だよくわかっているとは言えないのですが、自分の長所と好みがどこにあるかを模索することになります。このときの希望は、人によって違う全くの乱雑で、親にも言えないで一人で悩むことになります。親の跡を継ぐという家系に生まれた人間は、必ずしもそれに賛成していなくても、最後には観念して跡継ぎになります。

## 4. 青年期

少年が成長して、いわゆる、色気が付くのが青年期です。生物学的に言えば、これが生殖の時季の始まりです。子孫を残そうという本能に導かれて、異性の存在が気になります。異性の認識は人によって違う、全くの乱雑です。またどのような異性に出会うかという事も乱雑です。男女の結びつきは前もって運命で決まっている、という主張もありますが、そんなことはありません。

この時期に著しい特徴は精神状態の変動です。色々な目に遭うことによって、悲観的になったり、物凄く良い気持ちになったりします。落ち込んだ状態を鬱、愉快になった状態を昂と呼ぶことにしましょう。この鬱と昂の繰り返しは誰にでもあることですが、歳を取るにつれて、肉体的にも成熟してきますので、その精神状態

が肉体的な行動として現れます。人を傷つけたり、ひどい場合には殺人を犯すことになります。この精神状態の変動は人によって違います。即ち乱雑です。いつも平静を保っている人もありますし、暴れで暴れで、どうしようもない人もあります。鬱の極致が自殺です。藤村なにがしが、有名な“岩頭の感”を残して華厳の滝に飛び込んでから、若い人の自殺が続いています。もっと軽い鬱の時季には引込みになって、社会と隔離しようとしたり、電車の中でチカンをして、自分を慰めるようなことになります。

この鬱と昂の変動が大きくなったり、小さくなったりする、振幅の変動が何に依るのかは心理学の好対象です。しかし未だ解明されてはいません。青年期に変動が大きいことをとらえて、性の衝動に結びつけようとする試みもありますが、たとえ同時に起きたとしても、一方が他方の原因であるということは実証出来ません。

青年期を締めくくるのは、就職と結婚です。学校の卒業が近づくと、どのような所に就職するかが大問題となります。自分が何に向いているのか自分でもよく分からない、というのが大抵の場合です。その意味で、社会も個人も、乱雑に出来ているのです。しかし自分が良さそうだと感じたところに就職出来るとは限りませんから、何らかの妥協が必要になります。向いていないと思いつつ、やむを得ず就職してみると、思いがけず面白く、良い仕事が出来るということもあります。またその反対もあって、それが人世を面白くし、社会にも大きな貢献をします。これが乱雑の効用です。あるいは、それが個人の順応性を物語っているとも言えます。

同じようなことが、結婚についても言えます。個人の好みというものは乱雑で、最も好ましい異性を客観的に定義することは出来ません。そのことが人世を楽しめます。最初は自分がどのような異性を求めているのかが、はっきりしませんが、段々とはっきりとして、自分の周囲にそれを求めるようになります。しかし、理想と現実とは一致しません。ひどい高望みであったり、相手にされなかったりします。無理に惚れ込んで、綺麗に振られたり、結婚した後で、こんな筈じゃなかったという目を味わうことになります。

## 5. 壮年期

この年頃になると、自分の出世が関心の中心です。歳を取るにつれて、出世するためにはどのように振る舞うべきかということも分かっていきますが、思うようにはなりません。そして、自分としては、この程度しか出来ない、諦めるようになります。

この時期の特徴の一つが、賞の欲望です。誰でもが、俺は他の人より優れていると思いたがり、その証拠を欲しがります。その現れが、天皇陛下から頂く勲章であり、ノーベル賞、その他、何とかと名前の付いた、無数の賞です。芸術家や学者はもとより、芝居の役者や、スポーツ選手に至るまでに、賞が準備されています。賞を貰えば、それだけで、世間は私を称賛していると勘違いしているのです。しかし賞を与える側としては、何を基準にしているのでしょうか。勲章を貰うときは天皇陛下から直接に渡していただくのは光栄ですが、どの人にどの勲章を与えるというのは、天皇が自分自身で直接に決めたわけではありません。例えば大学の教授なら、文部科学省の小役人が一生懸命に作られた業績の表を見ながら、ああこれなら何とかの賞が良からう、などと無責任に判定したものです。レコードが何枚売れたかなどと定量的なレコード大賞のようなものはまれです。大体が、たらい回しであることは確かです。権威を誇るノーベル賞にしたところが、地球の温暖化を予言して気象の専門家が賞を貰いましたが、その審査をするノーベル委員会の中に、流体力学の専門家がいるのかどうか分かりません。温暖化の結論自体が怪しいのです。

この時期のもう一つの特徴は会議です。大学では教授会、会社では重役会が重要な会議と思われています。しかし日本の会議は大抵、会議の体をなしていません。会議というものは、本来、銘々の信じることを思うままに吐露して議論を尽くし、よい結論を得ようというものでしょう。しかし日本での大部分の会議はそうなっていません。大抵の会議はおざなりで、結論は最初から決まっている、つまらないお祭り騒ぎです。最も望ましいのは、全会一致で、それに反対する奴らは、へそ曲がり、変わり者と見なされます。国民の生活に直接関係する国会でも、与党議員は賛成、野党は反対という、判で押したような会議です。それが乱れると困るので、党議拘束という信じがたいような暴挙を平然と行っています。各々の議員は選挙民を代表していて、ある政策案に選挙民が反対であろうと思ったら、堂々と反対するのが代議制議会の理想的な姿ではありませんか。今の政治家は、この乱雑さを極端に嫌います。閣僚の中でちょっとした意見の違があると、閣内不一致だと、内閣が倒れるほどの大騒ぎです。この前の戦争を始めるかどうかの御前会議が開かれたとき、全員一致で開戦に賛成したという信じがたいことがありますが、これが日本人には理想の形なのです。会議を乱す反対者は国賊だというわけです。しかし最も良い結論は、乱雑な議論の中から生まれるのではありませんか。そ

れを信じないのなら、会議などというものをしないことです。

## 6. 老年期

暦というものは良く出来ていて、一回りして還暦になると、やや草枯れて退職を考えるようになります。色々な規則で定年退職の時期が決められているときには、じたばたしても仕方ありません。

東洋では昔から敬老思想というものがあって、老人を敬うのが当然とされてきました。それは、長生きをした人は乱雑な経験を積んでいるから、その人の意見は人世を生きていくのに役立つところから来ているのです。しかし世の中が急な発達をするにつれて、必要で貴重なのは古い経験ではなく、新しい知識を消化することだ、ということが分かってくるにつれて、年寄りの値打ちも薄れてきました。そうすると、年寄りには邪魔な存在で、早くいなくなればよいという存在にしか過ぎないことになりました。

定年を過ぎると、通勤という務めから解放されて、自由な時間がたっぷりと与えられます。この時期の関心は何よりも健康に向けられます。長い間の友人の訃報が時々届く度に、俺の順番も間もなくやって来るという怖さを感じます。自分が生きてきた証拠を何かの形で残したいような気もするし、いや、そんなものはいらない、ただ粛々と消えるだけだという思いが交錯します。これも最後の乱雑です。

(2010. 5/28 「ながれだより」 248号 2010.6/1 掲載)

## 424-7. 独創と模倣

### 0. はしがき

人間の心は心臓にあると、長い間信じられてきましたが、今ではそれを信じる人はありません。人間の精神活動のすべては脳にあることは確かです。最近の脳生理学の進歩で新しいことが次々に発見されています。私は脳の生理そのものには全く知識がありません。それでもこんな題目をつけたのは、脳の働きについての私なりの“理論”を展開しようというわけです。脳の解剖学的な知識が増えるにつれて、私の理論が実証されることを期待しています。

### 1. 基本的な構造

まず脳の全体の構造として、5つの部分から成ると仮定します。脳の構造はコンピューターに似ているので、その言葉を使うと、CPUとメモリーと入力部と出力部と、それらを結ぶ連結網です。少しずつ解説を加えましょう。

CPUはそれこそ心の部分で、脳のすべての働きを制御しています。入力部は五感と呼ばれる、視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚で出来上がっていて、周囲の状況を把握して、それをCPUに送る仕事をします。周囲の中には、脳以外の体の内部の状態を含みます。出力部はCPUからの指令を受けて、いろいろな筋肉を動かすのに必要な信号を送ります。口の周りの筋肉を動かすことで、言葉を発することが出来ます。メモリーは必要な情報を蓄えます。この4つは枝分かれした連結枝で結ばれています。これらの構造で、脳の働き、即ち記憶、反応、行動などの目に見える動作が出来ます。ここでは出来るだけ簡単な基礎動作の組み合わせで、複雑な人間の動作を理解しようとしています。

例えば知っている人に会って、挨拶をしたという行為を分析すると、視覚で目から相手の姿が入力されると、その信号がCPUに送られ、メモリーの中で適合の検査をして、その姿が山本君であることを確認したら、CPUは口に指令を送って、こんにちは！という音を発するように命令するという訳です。このループでどれが欠けても、この一連の仕事をする事は出来ません。目が見えなければ姿が捕まえられません。メモリーが働かなければ、山本君を認識出来ません。口の筋肉がちゃんと働かなければ、挨拶は出来ません。ここで大切なのは、情報を伝送する伝送系です。これを神経と呼ぶのが適切かどうかは分かりませんが、一応そう呼ばせていただきます。この神経の伝送能力には、人によって差があります。この神経は複雑な網の目をしていて、その結ばれ方、伝送速度、伝送精度が人によって違い、年をとると変わって来ます。

## 2. 入力部

いわゆる五感は赤ん坊の時から発達して、ある年で最強になり、それから衰えていきます。例えば目という器官は、若いうちに近視とか乱視という不完全なものになることがあります。これは遺伝的なものでしょう。年をとって老眼になるのは、レンズの不具合です。他の感覚についても同じです。入力として、もう一つ付け加わるのは、自分の体調です。どこかが痛い、体がだるいというような情報も伝えられなければなりません。

## 3. メモリー

人間の脳のメモリー量は人によって違うとしても、大変な量でしょう。若いときに記憶力絶倫の人を私は知っています。いわゆる博覧強記です。私のように、さっぱり記憶力がなかった人間もいます。これはメモリーについての遺伝情報がDNAの中に入っているからでしょう。

このメモリーはコンピューターのそれとは違っていています。それは連結記憶ともいうものです。この人が山田さんだと紹介されたとき、メモリーには顔の画像だけでなく、ヤマダという名前も、着ている服も、紹介された場所も、連結されて記憶されます。この連結度は人によって強さが違います。記憶力のいい人は、ものすごい量の連結をしまいますが、そうでない人は名前と姿が精々です。連結度が低ければ、顔は覚えています名前が出てきません。

## 4. CPU

入力部から入って来た色々な情報を集めて判断するのが、CPUの仕事です。メモリーの中には過去の経験が入っていて、それも判断を下すのに重要な情報です。同じ間違いを繰り返さないことがCPUに要請されます。CPUは沢山のジェネラルレジスターを持っていて、沢山のデータを同時に処理することが出来ます。

CPUは判断はしますが、創造はしません。Aという行動と、Bという行動について、出来るだけの情報を集めて、自分としてどれがよいかの最終判断をします。それが我々の行動を規定します。その点でCPUの仕事はレストランでメニューの中から自分が食べるものを選ぶ仕事に似ています。

CPUの判断は二者択一です。即ち二つのものを取り出して、よい方を残し、よくない方を捨てます。次にもう一つのものを取り出して、残っているものと比べます。これは、パソコンで最大値を求める時と同じ手法です。

## 5. 出力部

出力部は、CPUの指令によって必要な命令をいろいろな筋肉に伝達するのが仕事です。しかし、ここには学習効果があって、同じパターンが何度か繰り返される時はCPUをバイパスして入力部に直結して独自に命令を出すことがあります。CPUの判断を待っていると間に合わない場合などです。熱いものを持ったとき、思わず取り落とすことがあります。CPUの判断では我慢して持っていないと、えらいことになる場合に、です。相撲取りに対してアナウンサーが、あのとき何を考えていたかと質問したとき、相撲取りが、体が自然に動いて気がつかないうちに相手を倒していた、と答えることがあります。いちいち考えて行動していたのでは間に合わないのです。これは、戦闘機乗りがドッグファイトをするときにも成り立ちます。

## 6. 連結枝

この理論の核心となるのが、この連結枝です。これはメモリーとCPU、メモリー同士を結ぶ配線のようなもので、概念の連結を司ります。強い連結と弱い連結があります。例えば、山の絵を見たときに、山という字を思い出します。これはメモリー同士が強く連結されているからです。しかしドイツの首相と言われても、すぐには出てきません。それは弱い連結だからです。病的になると、自分の妻の顔を忘れてしまうことがあります。連結が殆ど切れるほどに弱くなったからです。この連結枝は、脳の中で神経の複雑な網目を作っています。既にある連結枝をそっくり真似るだけでは、それはただの模倣です。

連結枝の一つの特徴は、連結枝だけで入力情報が処理されて、出力部に繋がることです。泳ぎを覚えるのは大変ですが、一度覚えてしまうと、いきなり海の中に放り込まれても手足が自然に動いて、浮いていられます。これはCPUを経過しないで、直接連結枝が働いたからです。

## 7. 応用例

以上のような準備をして、実際の人間のいくつかの精神活動を説明することが出来ます。

第1は人の名前を覚えることです。学校の先生なら生徒の名前を全部覚えなければ駄目だ、と先輩から忠告されたことがあります。そのような先生もおられることは事実です。しかし、それは誰にでも出来ることではありません。顔という画像と、名前というものをしっかりと結べるような連結枝を持っていない人には、とても出来ない芸当です。

次は外国語の習得です。我々は英語の先生から長い時間をかけて、英語を学びます。しかし、外国語の勉強は年が若いほど速いことを知っています。赤ん坊が日本語を覚えるのは、我々が学校で英語を勉強するのに比べて驚くほどの速さです。その理由は連結枝です。例えば、土地の上に突き出ている土のかたまりを山と呼ぶことを赤ん坊の時に習います。学校では、それは英語で **mountain** と呼ぶことを学びます。我々はそれを山という言葉との連結で覚えます。英語学習で悩まされる単語の記憶です。地上に突き出た土を見ると我々はまず山という日本語を引き出し、相手がアメリカ人なので **mountain** と言い換えます。実に手間のかかる仕事です。それに対して、子供はまだ空いている連結枝で土のかたまりと **mountain** とを直接に連結します。これが流暢な英語をしゃべることにつながります。会話のためには英語でものを考えなければ駄目だ、と言われる所以です。連結枝が多くて力強い人は、直接に、ものと言葉を連結出来るので、語学の天才と呼ばれます。

次は芸術などの天才です。若くして驚くような絵を描く人がいます。それは多くの連結枝を持っているから出来るのです。分かりやすくするために、俳句を例にとりましょう。芭蕉の“古池や蛙飛び込む水の音”という不朽の名作があります。この中の古池、蛙、などの言葉は誰でもが知っているのですが、それが名句と言われるのは、言葉の連結の仕方にあります。個々の言葉の連結のしかたには無限な数があり、それらの連結は乱雑です。芭蕉が優れているのは、その中から最善な組み合わせと並びを易々と選び出したところにあります。それが出来るためには、連結枝が多くて乱雑にそれらが使えることが、よい作品を作る元になるのです。絵は面の上に作られる2次元的なつながりであり、彫刻は3次元のもので、本質的には変わりありません。

この例には驚くほどの意味が隠れています。と言うのは、創造というものの解釈です。創造というものは、古い部品の新しい組み合わせに過ぎないという宣言です。俳句や詩ではそれが本当らしいのですが、もっと深い思想的な作品にまで、そんなことが言えるのか、という疑問が出ます。しかし、全く新しい思想といえども、使われている言葉が従来古いものであることを考えると、やはり新しい概念は古い概念の新しい組み合わせだ、ということ以外には考えられません。

最後に人生での脳の働きの発達について考えましょう。赤ん坊の脳の中は最初は真っ白ですが、いろいろな外界の刺激で働き始めます。最初のもは母親の認識でしょう。おなかがすいたり、寒かったり、おしっこが出たりしたときに、泣くことによって母親を呼んで世話をして貰わなければ生きていけません。つぎに獲得するのは言葉です。初めは、あーとか、うーとか言うだけですが、自分の要求を母親に分からせるには言葉が必要だと悟り、驚くべき速さで言葉を取得します。ものと言葉のつながりが出来るようになりました。連結枝が活動を開始したのです。

5歳ぐらいになると、日常生活には殆ど不自由がないほどに語彙が豊富になります。連結枝はどんどん増えていきます。学校で学ぶと、いろいろな知識がメモリーを埋めていきます。それに関連して、連結枝も活躍します。しかし、ここで個人差が発生します。連結枝に差が出るのです。学校に行く行かないとに限らず、連結枝は増えると同時に、固定されていきます。沢山のことを覚えなければなりません。漢字を覚え、九九を覚え、やっていいこととやってはいけないことを覚えなければなりません。連結枝が使い尽くされてしまうと発達が止まります。詰め込み教育です。連結枝の数は人によってまちまちです。またその活躍、即ちどのように結びつくかにも、個性があります。連結枝が乱雑に振舞うと、思いもかけない新しいものが生まれます。それに反して連結枝がきちんと並ぶと、その人に独特なものは生まれません。ここに、独創性の生まれる原因が連結枝の乱雑さにあることが分かります。即ち、ここでも乱雑は独創の母なのです。

年をとるにつれて知識は集積します。これは連結枝の秩序的な並びが増えることです。これで残った乱雑な連結枝の数が減っていきます。独創性が若い人のものであることが分かります。

老衰するにつれて、連結枝の働きが弱くなります。これがもの忘れとして認識されます。忘れるというのは、メモリーの中のデータが無くなってしまいうことではなくて、メモリー同士を結ぶ連結枝の衰えだと考えます。

そのようになると、空いている連結枝が無くて新しい発想は生まれず、自分の持っている固定した連結枝のシステムだけに固執するようになります。これが年寄りが守旧派になっていく原因です。

脳の働きについて、かなり大胆な“理論”を展開しました。お笑い草でもありましょうが、現実の一部を説明出来たかとも思えます。

(2007. 6/4 「ながれだより」 草稿：未発行)

## 424-8. 神様とバクチを打つ

年末にはクリスマス、年始には初参りと、神様と普段のご無沙汰を謝って仲良くなる季節です。ここで宗教のことを考えてみることも良いでしょう。バクチという言葉はいかにも失礼ですが、なぜ、そんなひどい言葉を選んだのかが、追いつ追いつに分かります。また私は宗教については全くの素人ですので、沢山の思い違いがあるでしょうが、御勘弁を願います。

### 1. 神々の誕生

驚くほどの強い風や、大雨による洪水などを経験した人類は、これは人間に出来ることではないと考え、人間の力を超えたものの存在を感じます。そこに知恵者が、これは神様の御旨であると言い出すと、誰もがそれに賛成します。神様の誕生です。また農耕民族にとって欠かすことの出来ない雨が降らないと、これも神様の仕業とされます。このような災難を避けるためには、神様の機嫌を取るしかありません。一方では悪い病気が広がって、人々がころころと死んでいくようなことが起きると、これも別の神様の仕業と考えます。このようにして、初めの神様は恐らく専門別に分かれていたでしょう。風の神、病気の神、水の神などです。日本の神話でも、天照大神の岩屋隠れの話は、日蝕が神様のやったことだと理解されていたことを示しています。

ここで重要な分離が起きます。一神教と多神教です。人力の及ばないことをする神様は一人なのか、色々な分野の専門家の集まりか、という争いです。神様は万能なので、何でも出来ると思えることも出来ますが、それではあまりにも神様が忙しすぎると思われれます。どちらをとるにしても、決まった可能性はありません。民族性や政治情勢によって、何となく決まったようです。日本人の持っている神様のイメージは多神教ですが、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教などは、はっきりした一神教です。

日本ではいわゆる新興宗教が続々と現れました。天理教、大本教など、新しいところではオウム真理教があります。日本人は、どの宗教にもひどい嫌悪感なしに存在を認めます。結婚式をキリスト教でやり、葬式を仏式で、七五三にはお宮参りというわけです。宗教に対してこれだけ寛容な民族は珍しいでしょう。別の言葉では、日本人は一般的には宗教にそれほど真剣ではないということです。

### 2. 神様の能力

神様である絶対条件は、人間よりも優れたいくつかの能力を持つことです。人間と同じ程度のことしか出来ない神様は、存在理由がありません。

まず風を起こしたり、雨を降らしたり、悪い病を流行らしたり、日蝕を起こすなど天変地異を起こす神様は、誰でも思いつくものです。しかもこのような、人間をいじめるような事件が起きるのは、神様が怒っているからだという説明が、受け止められるようになりました。しかし、科学の進歩で神様のやることは段々少なくなりました。今では自然科学の対象になる事柄に神様を持ち出す人は殆どありません。台風が接近するからといって神頼みをする人はありません。雨が降らないときに、雨乞いの行事をすることはありますが、気分だけのもので、本当に効き目があると信じている人はありません。

とすれば、私たちが神様に期待するものは何でしょうか。我々が神社にお参りするときには、必ず何かをお願いします。しかし誰が考えても無理なお願いもあります。それは例えば、入学試験に合格するよにというものです。合格者の数は決まっているのですから、誰かが抜け駆けして神様に願っても、神様は困るのです。神様が公平であろうとすれば、この類の願いを受け付けるわけはありません。これは宝くじを買って、それが当選することをお願いしても同じことです。神様は誰かに最良をすることは出来ないのです。

### 3. 神様とのつきあい

さて、このような色々な神様と、人間はどのようにつきあっていけばいいのでしょうか。神様の人間に対する態度には、いくつかの種類があります。自然があまりにも烈しいときには、神様は人間を苦しめるために存在するのではないかとさえ思われることがあります。神様は人間にいろんなことを要求しますが、一番厳格な神様は、単一神への、うむを言わせない絶対服従の要求です。神様は人間が理解出来る形で、従うべき規範を示します。有名なのは、モーセの十戒です。これによってエジプトから逃げ出した、ユダヤ人の社会が安全に保たれました。この十戒に従わない人間は神の罰を受けて、生命の安全さえも保証されません。その他にも神様に命令されている、いくつかの禁忌があります。酒を飲んでではならぬ、女性は肌をあらわにしてはならぬ、ある種の動物の肉を食べてはならぬ、などというものです。日本の仏教でも四足の獣の肉を食べることを禁止しています。

神様と人間は直接にはやりとり出来ないと考えられています。神様の意志を伺うと共に、人間の希望を神様に伝える“仲立ち”が必要なのです。仏教では僧侶、キリスト教では牧師とか神父と呼ばれる人々、神道では神主です。その中で傑出しているのが、イエス・キリストです。イエスは神の使わした神の子であるとされています。従って彼の言動は神の意志です。仏教でも空海や道元などの名僧とか、高僧と呼ばれる人々は、釈迦の教えを彼らなりに解釈して、人々に伝えました。

もう一つの関係は、神様と人間の間にある捧げものです。人間が神様に何かをお願いするとき、人間の側からも何かを神様に捧げるのが当然と思われまゝ。古くは食料として獲得した動物や、穀物を捧げました。いわゆる犠牲です。信心の深い富裕階級の人はお寺そのものを捧げたりもしました。やがて仏教では、お布施、神道では賽銭、キリスト教では献金と、お金を捧げることになりました。神様にはお金は必要ないので、献金は仲立ちの人にわたり、その人々の生活を支えます。しかしこうなってくると、面倒な問題が起こります。二人の人が神様に大学入学の合格をお願いして、一人は1万円、もう一人は千円のお賽銭を出したとき、神様はどちらを優先するのでしょうか。これではまるで贈賄と、収賄の形ではありませんか。このように、個人同士の争いには神様は何もしないことが求められます。しかし、人間の側では献金の額を争うようなことがあります。沢山献金をしたのだから、お願いをかなえて貰うのが当然だ、というわけです。

### 4. 神様への期待

現代での神様に対する期待は3つあります。一つは道德律です。二つ目は未来予測です。三つ目は異常な自然現象や、悪疫の流行です。

人のものを盗むな、人を傷つけるな、人を殺すな、といった人間社会の道德の底辺を支えるのが信仰です。人の行動のすべてを成文化された法律で束縛することは出来ません。まして、汝の隣人を愛せよ、親を敬え、というような道德律は宗教によって、はじめて作られるのです。儒教には神様はいませんが、儒教道德は広く東洋を覆っています。この道德律での神様への期待はいつまでも続くでしょう。

第二は将来の予言です。人間は自分では将来のことは分かりませんから、神様が頼りです。いわゆる人相見で、水難や交通事故の予告があり、それから始まって、進学や就職や結婚に至るまで、何となく神様に頼りたくなります。このまま進むと人間社会は壊滅するという物騒な予想まで、いろいろなものがあります。

第三の自然現象や悪疫の流行については、今では神様に頼る人はほとんどありません。自然現象に対しては、科学と技術によって解決するほか無く、病気に対しては医学の進歩に頼ることになると、神様に何をお願いするのでしょうか。

どうしても人間には出来ないこと、それは未来を予測することだけです。何とかして、自分や家族の将来がどうなるかを知りたいというのは、昔からすべての人の熱心な願いです。しかし、いくら学問が進歩しても、これだけは出来ません。身近なところでは丁半博奕、競馬の予想などです。やってくれるかどうかは別として、神様は未来を予想する能力があるのでしょうか。万能の神に出来ないことはない、という意見が強いのでしょうか、果たしてそうでしょうか。

### 5. 丁半博奕 (バクチ)

一番簡単な将来予測が、丁半博奕です。サイコロの目が次に丁となるか、半となるかを神様は当てる事が出来るのでしょうか。そこで神様と相対で、博奕を試みることにします。博奕そのものを禁じている宗教はあ

るでしょうが、今はそれを無視します。サイコロが正確に作られている限り、どんな手法を使っても次に丁が出るか、半がでるか予想することは出来ない、というのが常識です。ただサイコロの運動を徹底的に、微に入り、細をうがって、力学的に計算すれば予測は原理的には不可能ではないという主張もあり得るでしょう。神様は全能ですから、サイコロの重さ、手の動き、机の表面の状態、などが正確に入力されれば、スパコンの何倍かのスピードで計算出来るでしょう。しかしここで勝負をもう一層複雑にして、乱数表を使って勝負をすればどうでしょうか。ゼロから9までの整数の乱数表を神様に作ってもらい、サイコロの目だけ先にある数字が丁か、半かで争うのです。これならサイコロの運動が完全に解析されても、博奕に勝つことは出来ません。乱数表は神様が作ったものですが、これを暗記することは博奕の公正さを壊しますから、許されません。こうなると神様は手も足も出ないので、博奕に勝ち続けることは出来ません。即ち、この人間との博奕は勝ったり、負けたりです。別の言葉で言えば、この場合には神様は将来を予測することは出来ないのです。ここに問題の本質が潜んでいます。どの宗教も決定論的な構造を持っています。神様は固有の道徳律を持っていて、神を敬って、その道徳律に忠実に従う人間には祝福を与え、それに背く者には罰を与えるのです。従うべき道徳律には少しの差がありますが、祝福と罰の構造には、どの宗教にも違いがありません。仏教で“因果応報”と言い、キリスト教で“宝を天に積み”と説くのは、その趣旨です。丁半博奕のような、善悪がはっきりしない、乱雑な事柄は予測が出来ません。原因と結果とが1対1に繋がっているときには万能の神様も、乱雑が入って来ると万能さを失うのです。宗教の世界に乱れが入り込むと、宗教の土台骨が揺らぐ可能性があります。

## 6. 天国への道

現在の大きな宗教は、すべて2000年ほど前に作られたものですから、その中に含まれる道徳だけでは、今日の人間の行動を律することは出来ません。例えば範囲の広がった経済活動です。ここに一人の人がいて、電話を二回掛けて、100万円の利益を得たとします。この事実は神様によってどのように批評されるでしょうか。別の言葉で言えば、彼は天国に近づいたのか、遠ざかったのでしょうか。彼は二度の電話で株を買い、また売って、利益を得たのであって、彼の行動を非難する人はありませんし、どこの国の法律によっても罰せられることはありません。ただ神様はどう思うのでしょうか、佛も、イエス・キリストも、株というのを知りません。額に汗しないで、株の売買だけで贅沢な生活をする人を我々は尊敬することは出来ませんが、神様は何と言うのでしょうか。

## 7. まとめ

以上のような考察から、我々が宗教に対してどのような態度を取ればよいかの忠告を得ることが出来ます。宗教の役割は少しずつ減っていますが、未だ無くなりません。

世界全体を考えると、自分の信じる神様をあまり強く支持しない方がいいように思います。特にキリスト教とイスラム教とユダヤ教を奉じる人々が、いがみ合っているのは悲しいことです。この3つの教えにとって聖地とされるエルサレムを三方から取り合っている姿は、見てはいられません。全世界的に見ても、宗教の影響をゆるめる努力が必要です。宗教がアヘンとも思いませんが、私は本質的には宗教有害論です。

日本国内を見渡すと、我々は幸いにして醜い宗教戦争を持つような可能性からは解放されています。日本人が宗教に対して関心が浅く、異なった宗教を優しく受容していることは、結構なことです、伝統的な宗教行事などを無くする必要はありませんが、宗教色を薄めていくことは望ましいと思います。

日本独特なものとして天皇の問題があります。天皇家は天照大神の子孫として、神様であると我々は信じて来ました。しかし戦争に負けての人間宣言で、天皇もただの人であったことを知りました。しかし、明治天皇は今でも明治神宮に祭られています。天皇は死んだら神様になるものようです。正月には国民の大集団が初参りをします。それでどんな現世の御利益(ごりやく)があるのか知りませんが、天皇もただの人間であるなら、そんなに尊敬をする必要はないでしょう。我々の祖先は天皇を頂点とする統治体制に組み込まれて、色々な苦しい目にも遭ったのですから、主権在民の現在、天皇をそれほど敬わなければならない、というものでもありません。それでも天皇の前に出た日本臣民は誰でも体をこちこちにして、畏まって最敬礼をします。これはやはり一つの宗教と考えてもいいでしょう。私は日本一の旧家である天皇家は貴重なものと思いますが、天皇家と国民の関係も、もっと柔らかなものになってもいいのではありませんか。

(2013. 5/8 最終更新 「ながれだより」 223号 2008. 1/1 に加筆)

## 424-9 歴史観試論<sup>(5)</sup>

### 1. 史観序説

#### 0) はしがき

祇園精舎の鐘の声 諸行無常の響きあり

沙羅双樹の花の色 盛者必衰のことわりをあらわす

平家物語の巻頭を飾るこの言葉は、物語全編のすぐれたアブストラクトであると共に、人間の歴史の本質を道破してあますところがありません。これを散文的に“万物は流転する、権力者は必ず没落する”とも、“人間の歴史は一つの流れだ、そしてある法則に支配されている”とも言い換えることが出来ます。いかにも無味乾燥な解釈ですが、“歴史とは何か”という誰にとっても関心の深い問題を考える手がかりとして、勘弁していただきます。歴史に限らず何につけても、流れに例えられることは多いのです。“政治の流れを変えよう”というスローガンから“情に棹さして”流されたり、山岡鉄舟の“流れを汲ん”だり、日本人の流れ好きは呆れるばかりです。これは日本は雨が多くて、そこら中を川が流れ、湖があり、海の波が打ち寄せているためでしょう。砂漠の国の人達が、これほど流れを愛用するとは思えません。そこで日本人を相手にして“歴史は一つの流れである”と言っても、割合すっきりと賛成して貰えるでしょう。とすれば、歴史の研究に流体力学が顔を出しても不思議ではありません。

#### 1) 流体力学との対比

誰でも知っているように、流れの型式には層流と乱流があります。歴史は層流でしょうか？すべてが丸く治まって、大した事件も無い天下泰平な世の中は、層流でしょう。しかし人々が走り回り、争い、殺し合っている時代はどう見ても乱流です。完璧に層流なのは天国だけでしょう。日本歴史の中でも、仁徳天皇の伝説的な治世から、延喜、天曆の治、室町初期、江戸時代などは層流の典型です。この時世には上に立つ者と、下で支える者の区別がはっきりと階層を作って、まさに層流と呼ばれるにふさわしい構造でした。ところが社会の色々な矛盾が表面化すると、流れは乱れ始め、上下が激しく混ざり合います。歴史家は層流時代についてはあまり書くことがありませんが、乱流になると急に忙しくなります。英雄、豪傑が雲のように出て、戦い、奪い、殺します。戦国時代はその典型で、草履取りが天下をとる有様です。乱流が収まると、層流になり、それがまた乱れます。洋の東西を問わず、人間の歴史はこのパターンの繰り返しです。まさに盛者も塵のように飛ぶのです。

ところで歴史の最大の話題は、歴史の中に法則を見出すことです。“歴史は繰り返す”という有名な言葉がありますが、厳密に言えば、同じ歴史が繰り返されることは決してありません。歴史における法則はもっと的確で、“科学的”であるべきです。かつては自然科学の持つ法則性が、歴史、あるいは社会科学一般の中にも存在すると思われたこともありました。今ではその立場を取る人は少なくなりました。歴史の中にすっきりした法則性は発見されていません。ただ一つだけ、歴史には方向性があるという考え方は、多くの支持者を持っています。いわゆる“進歩史観”です。その一つは原始共産社会から始まり、封建制、資本主義、社会主義、共産主義と、社会は“進歩”する、それは水が高いところから低いところに流れるようなものだということです。もう一つの説は、人間の行動はすべて神のみ手に導かれており、歴史は神の作ったシナリオに従って人間が登場し、演技するのに過ぎないという“先決定論”と双生児です。この様な考え方は、キリスト教社会に反発し、しかもその枠から抜けられない唯物史観の立場です。東洋にはそのような歴史の一方向性の考え方はありません。諸行は無常であり、万物は流転してどこへ行くかは分からないのです。このことは流体力学的史観から見ると、乱れたり治まったりする流れが、ヨーロッパでもアジアでもアフリカでも、合流し枝別れしながら終極的には一つの方向へ流れているのか、あるいは全くでたらめに、あちらこちらにと流れているのか、ということです。山の斜面を流れ落ちる川は方向性を持っていますが、平野に下ると方向がまちまちになるということから類推すると、歴史はある時期には一方向に流れ、またある時期には別な方向に流れるという、歴史の方向自身にも乱れを持ち込むことも出来るでしょう。

歴史のハイライトが乱流時代にあり、また歴史に法則性があるとすれば、歴史の中の偶然をどのように解釈

編者注<sup>(5)</sup> 本文章は、複数の一連の短文を統合してある。

すれがいいのでしょうか。“もし、クレオパトラの鼻が低かったら――”をはじめとして、“もし蘇我入鹿の暗殺が失敗していたら――”、“関ヶ原で石田三成が勝っていたら――”などと歴史の中には大小無数の“もし”があります。正統派の歴史家はそのような問いに答えることを好みません。しかし彼らにしても、歴史は必然ばかりで成り立っているのではなく、偶然、しかもごく些細な偶然によって形作られていることを認めざるを得ません。現に我々が生まれ、生きて来たこと自体、かなりの偶然です。そうすると歴史はすべて偶然の巨大な連鎖なのでしょう。そう断言することは難しいでしょう。公家政治が衰えて武士が権力を握ったこと、着実な徳川が成り上がりの豊臣を破ったこと、近くは日本がアメリカに敗れたこと、これらは完全ではないがかなりの必然的な結果のように思われます。層流時代には必然色が濃く、百姓の子は百姓、王子に生まれれば王になります。乱流時代には強い偶然性があります。これが法則性とどのような関連を持っているのでしょうか。乱流はよく、偶然的な流体運動と言われます。旗が風の中でひらひらしたり、煙突からの煙を見ると、偶然という言葉がぴったりです。それでは、乱流とは全くデタラメな運動なのでしょう。決してそうではありません。乱流も流体の連続条件と、運動方程式の支配を免れることは出来ません。しかし層流と違って、これらの式から一義的に運動を“解く”ことは出来ません。それなら乱流の中にはどのような法則性が存在するのでしょうか。それは統計法則です。乱流を記述するには速度や密度の瞬間値ではなく、統計量を扱わなければなりません。統計法則は統計量の間関係です。それなら歴史法則も統計法則であるに違いありません。従って、生起する個々の事件を次々に追う事は不可能です。事件の統計量、即ち事件の集まりについてだけ法則を議論することが出来ます。ここの偶然的な事件、たとえば真珠湾での空母の撃沈、ガダルカナルからの退却、硫黄島での玉砕といったすべてを含んでの日本の敗北は、必然的な法則で説明することが出来るでしょう。さらに明治維新から、日清、日露の戦勝、太平洋戦争での敗北、それらを偶然的な事件として、100年間の日本民族の発展という、より大きなスケールの必然性が存在します。諸行無常と言うには個々の事件や、個人の運命はとるに足りない、我々は統計的に歴史を眺めるべきだということを示唆しているようにも思えます。

それなら歴史にはどのような統計法則が存在するのでしょうか？

## 2. 統計的取扱い

### 0) はしがき

歴史の見方は数多くあります。その中で乱雑度という統計量を社会の代表指標として、その時間的変化を追っかけていくのも、一つの方法です。中国で作られた“治乱興亡”という言葉は、簡潔に歴史の本質を道破しています。

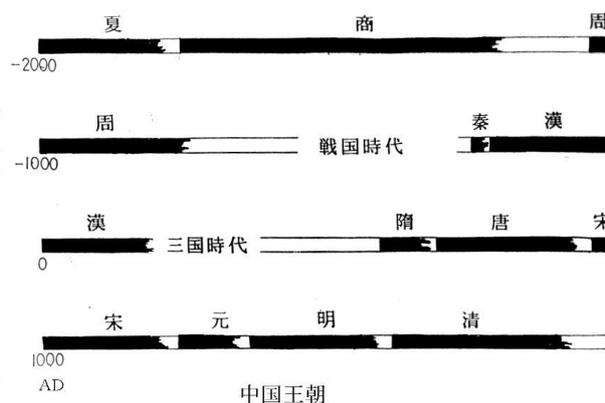
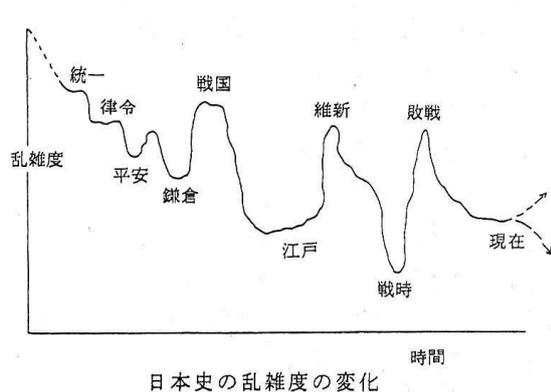
### 1) 乱雑度

歴史は社会の変遷を記述し、社会は人間で成り立っています。人間同士は仲良くなったり、争ったりします。社会が静かで争いのない時を、小さな乱雑度とします。それと逆に社会が騒々しい時を、大きな乱雑度とします。

乱雑度を定量的に表現することは出来るのでしょうか。純粹に数学的に考えると、乱雑度は数多くの成分から成り立っているベクトルと考えます。成分は泥棒の数、殺された人の数、テロリストの数、物価の上昇率、失業率などです。そしてその多成分ベクトルの長さを乱雑度とします。それで単純化された乱雑度はスカラーとなります。

### 2) 日本歴史

日本歴史にも乱雑度の激しい変動があります。最古の歴史書である古事記と日本書紀は、編纂時の王朝を擁護する部分が多いのですが、我々はそれに依る他はありません。



### 3) 中国史

中国は王朝の治乱興亡が烈しい国です。そして、新しい王朝は前王朝の歴史を編纂するという、歴史家にとって有り難い習慣があります。それには新王朝の自己主張が入り込むきらいはありますが、歴史事実は、ほぼ正確に記述されています。

### 3. 数学モデル<sup>6)</sup>

流れを定量的に記述するには微分方程式が主流で、乱流もその例に洩れません。そしてナビエーストウクス方程式を信仰の対象とする人が99パーセントです。しかし乱れを流れ以外の場に拡張するときには、この方程式が適切であるとは思えません。力学の微分方程式はニュートンの質点の運動に由来しており、空間の一点における力と運動との平衡を記述しています。しかし一般的な乱れ場を考えると、もっと良い方法があるでしょう。ここに提示するのはその一つの例です。

微分という概念から抜け出します。広い場の中の数多くの点が個性を持ち、その属性が時間軸の上でいろいろな変化をします。簡単のために、場を平面の2次元として話を進めます。平面を縦、横に区切って小さな四角を  $x, y$  の座標を持つ“点”と考えます。ここでは横30、縦20の600の点を扱います。この数と次元の制限は本質的ではなくて、多数、多次元の場合にも容易に拡張出来ます。

$x, y$  で指定する点の属性を  $sa(x, y)$  とします。この  $sa$  は簡単のためにスカラーとしますが、これもベクトルやテンソルに拡張出来ます。  $sa$  の変化を記述するのは

$$sa = pa * sa + pb * sa * sa$$

という代数関係です。これはコンピューターのプログラムの形です。第1項は線型成長、減衰で、 $pa$  は正、負どちらにもとれます。第2項は非線型関係で、 $pb$  は負にしておきます。でないと発散してしまいます。この式はいわば非粘性のもので、ある点と、点の近傍との干渉を考えるには粘性項として

$$+pc * (sa - sac)$$

を付け加えます。  $sac$  というのは、点  $x, y$  のまわりの値を表現しています。  $pc$  は粘性係数に相当しますが、これは正でも、負でもよいのです。負の粘性が面白い結果を与えます。これで非線型性と粘性を含んだ定式化

編者注<sup>6)</sup> 乱れ考察の一環として革命のメカニズム計算をプログラミング (VB) で試みた別原稿 (2002. 6/26、7/8) の引用が大半である。残念ながら、該当する画像が未発見のため内容が理解しにくいのが、故人の仕事の一端と考へ、参考までに掲載する。

他にも、畑での花の乱れ咲きや、多数の蛍の一齐発光減光といった、現象に関する計算なども試みられている。「第1部基礎的考察 414-10. 乱雑場」(上巻P18)に関連論述あり。

が出来ました。あとはパラメーターを適当にとり、次々に代入していけばよいのです。代入回数が、時間の経過に相当します。pa, pb, pc をどのようにとるかが腕の見せ所です。

## 0) はしがき

歴史は普通は文章で書かれますが、ここでは数学モデルで歴史を近似することを試みます。それによって違った時間、違った地域の歴史の相似性と、相違とを明らかにし、うまくいけば、歴史の中に流れている骨組みのようなものを明らかにすることが出来るかも知れません。

歴史の展開を個別的でなく、出来るだけ一般的に扱って、ある部分は計算に、の数学モデルの構築を目指します。

社会に不平が発生し、それが少しずつ成長してゆき、やがて燎原の火のように反抗運動が広がり、戦いの世となって、貴族が倒れ、王も殺されて、ついに王朝が交代する有様を描きます。

## 1) 筋書き

王は中心にあって大きい円。貴族9、庶民100と分かれています。  
最初はすべて王に忠誠で、青い(服従)。  
庶民の中に不平分子発生。緑は軽い不平。  
不平広がる。黄は少し行動、赤は実力行使。  
実力行使広がる。貴族の一部倒れる。 貴族全滅。王孤立。  
王倒れて新王朝成立。

## 2) 色分け

色を配置する。庶民に不平の成長率を割り当てる。sa の値によって域値を決め、不平度を分類する。繰り返し数を大きくすると段々に sa が大きくなる。

○ 社会に不平が発生し、それが少しずつ広がってゆき、やがて燎原の火のように広がり、貴族が倒れ、王も死んで、ついに王朝が交代する有様を描く。

○ 単位は、王、貴族、庶民とわかれている。

画面1 最初はすべて忠誠を誓っており、青い。王は中心にあって大きい円。 revn2

画面2 庶民の中に不平分子発生。緑は軽い不平、黄は少し行動。 revn3

画面3 不平広がる。実力行使(赤)。 revn4

画面4 実力行使広がる。貴族の一部倒れる。 revn5

画面5 貴族全滅。王孤立。 revn6

画面6 王倒れて新王朝。 revn7

○ 王(1)、貴族(9)、庶民(100) 配置 すべて青 revn2

○ 庶民に成長率を割り当てる。 revn3 基準は grow21

○ sa の値によって域値を決め、不平度を分類する。

○ 繰り返し数 k を大きくする。 sa が大きくなる。

○ 貴族の消長をきめる。

○ 点滅が出来るとよい。もう少し細かくないと連続とは見えない。

## 4. 革命

○人類は歴史の最も初期を除けば、社会を作って生活してきました。その社会は時に、統治者と被統治者、即ち国民に分かれて、国と言える政治形態を作りました。しかしこの国の形態が無限に続く事はありませんでした。統治者がいい気になっている間に国民の間に不満が高まり、今の統治形態を変えようとする気運が高まります。そしていわゆる蜂起、あるいは起義が国の色々な場所で起こります。統治者は弾圧によってそれを抑えようとはしますが、民衆の力が段々と強力になって、民衆側が勝利を収め、統治機構は崩壊します。これが革命です。有名なのはフランス革命、ロシア革命などです。革命は、一応秩序を保っている政治形態を乱雑な物に変える、乱雑化の姿です。

○革命はいつも勝利を収めるとは限りません。政府軍に打ち破られて悲惨な最期を遂げる例も数え切れないほどあります。

## 5. 庶民生活

### 0) はしがき

殆どの史書は、有名な英雄豪傑、皇帝の事跡を述べるのに熱心で、また戦争で誰が勝った、誰が負けたという著述で、その90%以上を費やしています。物語としてはそれが面白いのですが、歴史はそのような一握りの人だけで作られるものではありません。圧倒的に多い庶民が何を考え、どのような行動を取ったかという点で、歴史が動くことも少なくありません。ここでは歴史の中の庶民の役割を考えてみたいと思います。

### 1) 庶民の力

権力者の側から見ると、庶民はただの虫けらのようです。個人としては確かにそうかも知れません。しかし庶民には数の力があります。庶民を軽蔑する権力者は、結局庶民によって打倒、追放されるということは歴史が証明しています。この庶民の力が発揮されるのは、庶民の願望なり、意見なりが一つに集まった時です。即ち秩序です。庶民の意見は原則としてバラバラの乱雑であることが、何となく仮定されています。このことは近代の民主主義国家の成り立ちの理論的な基礎の一つです。そして集められた意見が過半数を占めた政党、あるいは個人が政権を担い、その投票者の意見に沿って政治を行うのだとされています。この過程が平穩理に実行されれば、政権の移動も滑らかに行われるのです。

過去の歴史では、必ずしも政権移動が平穩に行われることはありませんでした。政治形態も専制的で、人民の意見が合法的に汲み上げられることはありませんでした。戦国時代には武将と武将が戦って、どちらかが勝つという戦争の連続でした。その時、勝った方の大将の名前だけが歴史に残ります。一将功なりて万骨枯る、というわけです。しかし両方の軍勢は兵隊としては農民を連れて来たもので、その人々の忠誠心、即ち自分の領主にどれだけ一生懸命に勤めるかという意志が、勝敗に大きく関与しています。即ち、領主を強く支持している兵士の方が、強い軍隊を構成しているのです。言い換えると、士気が高いのです。戦いの勝敗に最下級の兵士達の忠誠心や団結を無視することは出来ないのです。これが間接的には、人民が自分たちの支持する支配者を選ぶことになるのです。

### 2) 庶民の離反

封建時代に天下平定が終わって、国内は一応、秩序立って治められているように見えるときでも、領主の政治が適切でないと、民心は領主を離れ、政治はうまく出来なくなり、場合によっては一揆が発生して領主が没落することになります。統治者が人民に選ばれている例です。それは一つの領主だけでなく、国の国民としても離反するようになります。

(2006. 10 / 30)